八田中遺跡群

県営圃場整備事業旭第２地区関係
埋蔵文化財発掘調査報告書３

１９９０年

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は県営圃場整備事業旭第２地区にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書３である。

2　この調査は、石川県農林水産部耕地整備課との協議に基づき、同課より依頼を受けた石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　本書に掲載した遺跡の発掘は以下の日程で実施した。
八田中中村遺跡　1987（昭和62）年５月１日～６月26日。担当者は小嶋芳孝。調査面積は約400㎡。
八田中アレチ遺跡　1987（昭和62）年５月18日～26日。担当者は小嶋芳孝。調査面積は約120㎡。
八田中ヒエモンダ遺跡　1988（昭和63）年９月８日～11月30日。担当者は福島正実。調査面積は約1,070㎡。

4　調査費用は県耕地整備課が負担したほか、文化庁補助金の交付を受けた。

5　遺物整理（洗浄、記名・分類・接合、復元、実測、トレース）は㈳石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

6　本書に掲載した報告の執筆は、八田中中村遺跡を小嶋・遺物を藤田邦雄がおこない、八田中アレチは小嶋が担当した。また、八田中ヒエモンダ遺跡は福島が担当し、全体を小嶋が編集した。

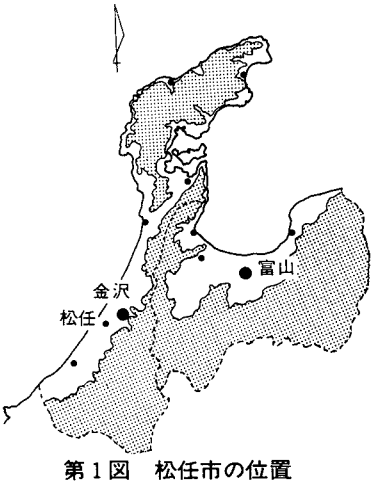
7　遺構記号を使用する場合は以下の通りとした。
・八田中中村遺跡は八田中アレチ遺跡　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　ＳＸ：その他の遺構
・八田中ヒエモンダ遺跡　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＩ：竪穴　ＳＸ：その他の遺構

8　本発掘調査で出土した埋蔵文化財および記録資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

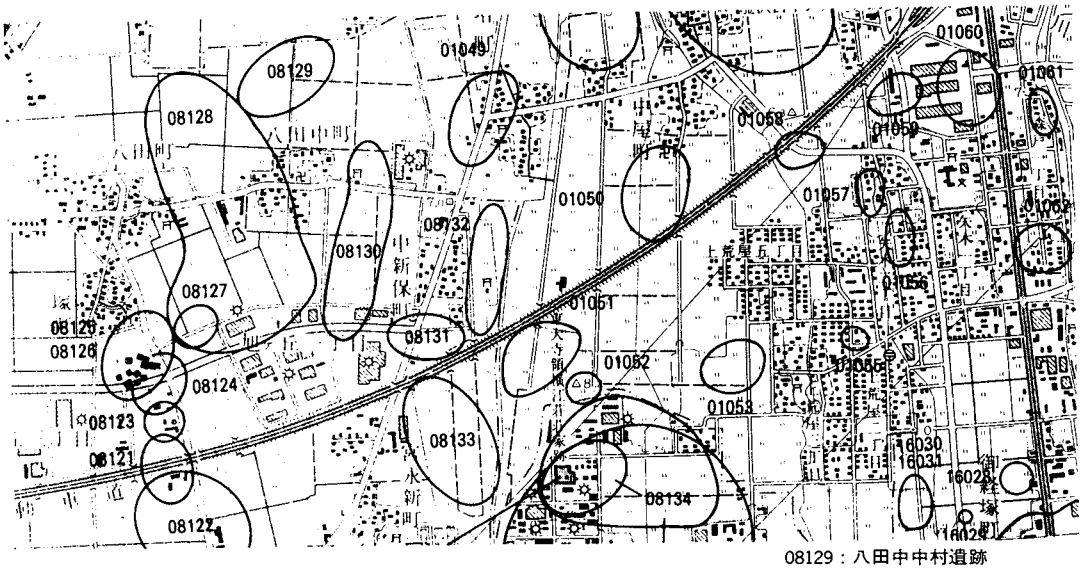
松任市八田中町周辺の環境

本書に掲載した遺跡は、いずれも石川県松任市八田中町に所在する。松任市は金沢市の南西部にある野々市町の西部に隣接し、約５万人が住んでいる。松任市の地形は、東部が手取扇状地の扇央部から続く地形で、西部は扇端部と海岸砂丘にはさまれた低湿地となっている。八田中町は、こうして形成された低湿地に臨む微高地に立地している。

八田中町は現在の海岸から約1.5kmの所にあり、標高は６ｍ前後である。周辺は全体的に平坦な地形で、耕地整理の田面差は二寸を基準にしたと伝えられている。耕作土は深く、粘土質で、1970年代までは扇状地の伏流水が湧き出る水田が多かったようである。



第１図　松任市の位置



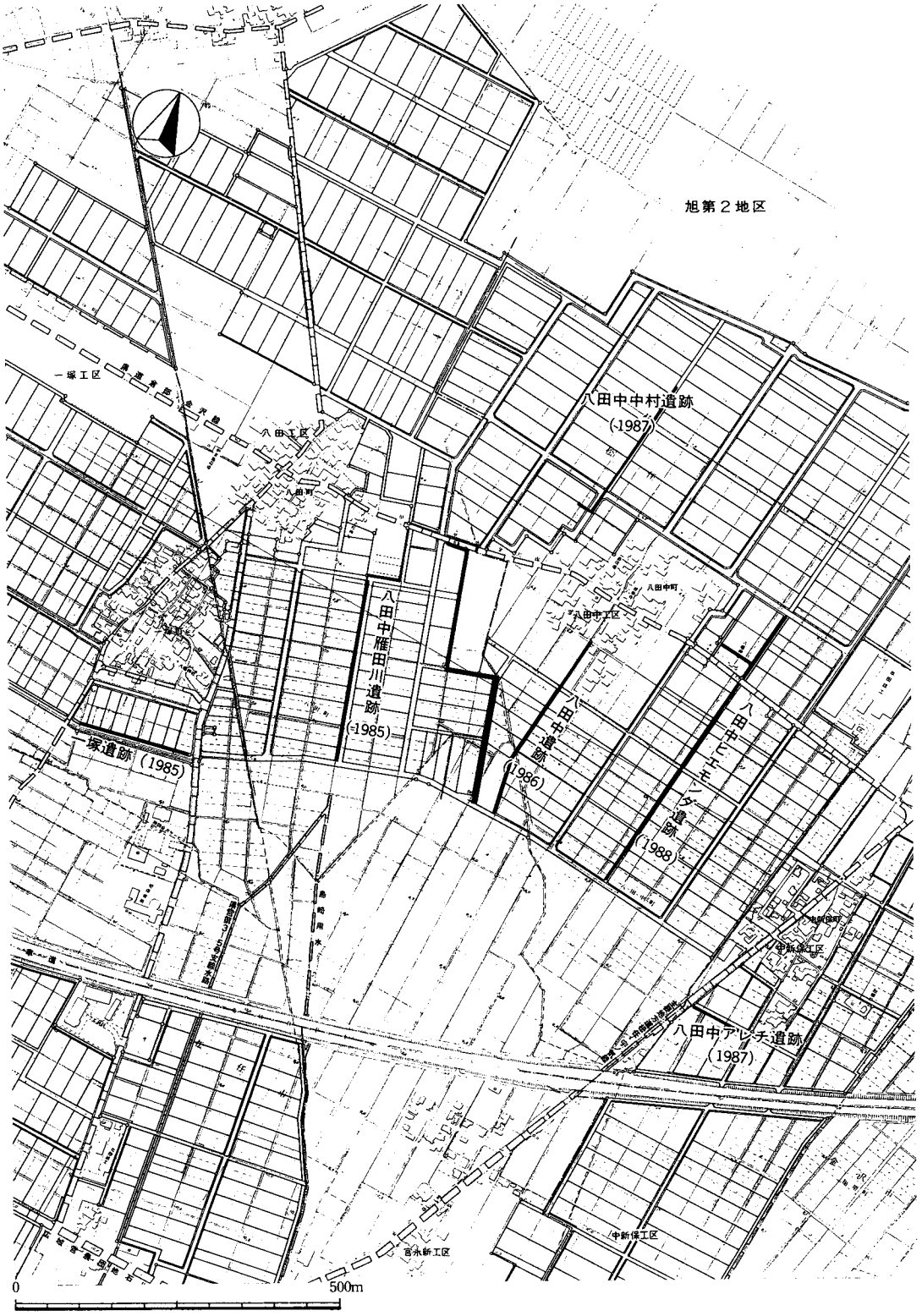
08129：八田中中村遺跡
08131：八田中アレチ遺跡
08130：八田中ヒエモンダ遺跡

第２図　松任市八田中町周辺の遺跡

八田中町の周辺は縄文時代後晩期の遺跡が一塚遺跡などで見られ、野々市町御経塚遺跡や金沢市新保本チカモリ遺跡などの大規模な後晩期の遺跡も周辺に展開している。弥生時代に入ると八田中遺跡や金沢市矢木ジワリ遺跡などで前期から中期初頭の集落が営まれ、八田中ヒエモンダ遺跡や金沢市横江町周辺で中期の遺跡を見ることができる。後期に入ると、松任市旭遺跡群や宮永遺跡群など地形が扇端部から低地に移行するあたりで、大規模な集落が多く営まれている。

県営圃場整備事業旭第二地区に係る埋蔵文化財については、1985年一塚遺跡・八田中鴈田川遺跡、1986年八田遺跡、1987年八田中中村遺跡・八田中アレチ遺跡、1988年一塚遺跡・八田中ヒエモンダ遺跡の調査を行なっている。いずれも、排水路の建設工事に係る発掘調査で、田面の工事については遺跡包含層の深さを確認した分布調査の結果に基づいて松任土地改良事務所と遺跡保護の協議をし、盛土で保存することとなった。県営圃場整備事業旭第2地区にともなう遺跡調査報告は、これまでに『八田中遺跡』県営圃場整備旭第2地区関係埋蔵文化財調査報告1（1988年）・『松任市一塚イチノツカ遺跡』県営圃場整備旭第2地区関係埋蔵文化財調査報告2（1990年）の二冊の調査報告を刊行しており、本書は当該事業に関係する調査報告3である。

1950年代の松任市八田中周辺の航空写真



第３図　県営圃場整備旭第２地区発掘調査位置図

1970年代後半の松任市八田中周辺の航空写真

八田中中村遺跡発掘報告

1　調査区の位置

八田中中村遺跡は、松任市八田中町の北部に位置する。周辺の海抜は６ｍ前後で、遺跡は耕作土の直下で検出している。調査は1987（昭和62）年５月１日～６月26日にかけておこない、調査面積は約400㎡である。調査の途中で、本田秀生氏が志賀原発建設にともなう発掘調査に参加するため志賀町に派遣されることになり、調査期間中に併行して行なう予定だった八田中アレチ遺跡の調査も小嶋が一人で担当せざるをえなくなった。なんとか、調査を完了することができたのは補助員の林あかね氏と安宅務氏の協力のお陰である。

2　主な遺構

調査区は幅約２ｍで、南北長約170ｍ、東西長15ｍである。遺跡の層序は、厚さ約20㎝の耕作土・約15㎝の灰褐色土の下に黄灰色砂層の地山があり、遺構は灰褐色土の下から地山に掘り込まれることが多い。検出した主な遺構は、溝・土坑・柱穴である。主な遺構の概要を以下に記す。

ＳＤ03　幅400㎝・深さ70㎝の東西方向に走る溝。埋土は、暗褐色土を主とする。

ＳＤ04　幅180㎝・深さ40㎝の東西方向に走る溝。埋土は暗灰褐色土を主とする。

ＳＤ05　幅150㎝・深さ30㎝の東西方向に走る溝。埋土は地山ブロックを多く含んだ暗褐色土を主とする。

ＳＤ06　幅300㎝の東西方向に走る溝で、深さ30㎝で幅210㎝の溝底に幅50㎝・深さ20㎝の溝が掘り込まれている。埋土は木片を多く含んだ暗褐色土を主とする。

ＳＤ07　農道で北半分は調査できなかったが、幅120㎝以上で深さ50㎝の東西方向に走る溝。埋土は上から灰褐色土・暗褐色土と堆積している。

ＳＤ08　幅160㎝・深さ50㎝の東西方向に走る溝で、ＳＤ09の北肩を切込んで掘られている。埋土は、木片を含んだ暗黄褐色土である。

ＳＤ09　幅250㎝・深さ70㎝の東西方向に走る溝で、ＳＤ08に北肩を切込まれている。埋土は黄灰褐色土・黒褐色土・暗褐色土と堆積している。

ＳＤ10　幅400㎝・深さ90㎝の東西方向に走る溝。土層の観察では、元来は幅420㎝で掘り込み面から30㎝の深さで、南北両側に約40㎝の段をもつ二段掘り溝であることがわかる。埋土は、暗褐色土・褐色土の順に堆積している。

ＳＤ11　幅210㎝・深さ40㎝の東西方向に走る溝で、埋土は暗灰褐色土の下に地山を含んだ暗褐色土が堆積している。

ＳＤ12　幅約200㎝・深さ約20㎝の東西方向に伸びる、浅い溝状の凹み。埋土は暗灰褐色土暗褐色土が堆積している。

ＳＤ13　幅170㎝・深さ40㎝の東西方向に走る溝。埋土は、暗褐色土を主とする。

ＳＤ14　幅270cm・深さ80cmの東西方向に走るしっかりした溝。埋土は、暗灰褐色土・暗茶褐色土・暗褐色土と堆積している。

ＳＤ15　幅120cm・深さ約10cmの東西方向に伸びる、浅い溝状の凹み。埋土は暗灰褐色土と暗褐色土が堆積している。

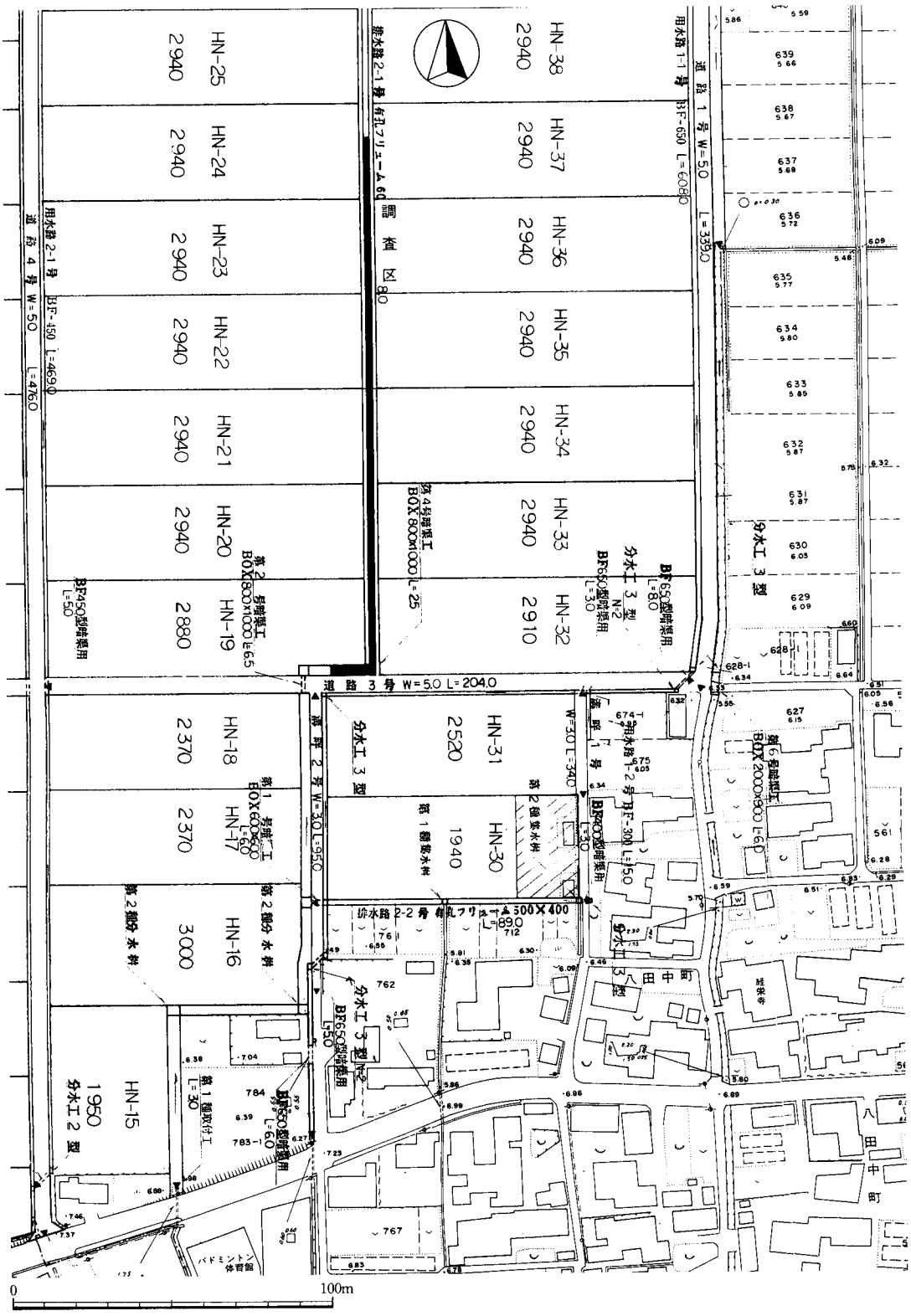
ＳＤ16　幅150cmの溝が南北に重複している。深さは30cmで、埋土は北溝が褐色土・南溝が暗灰褐色土で、北溝が南溝を切込んでいる。

ＳＤ17　幅770cm・深さ40cmで、底幅が660cmの東西方向に走る溝。埋土は暗褐色土が堆積している。

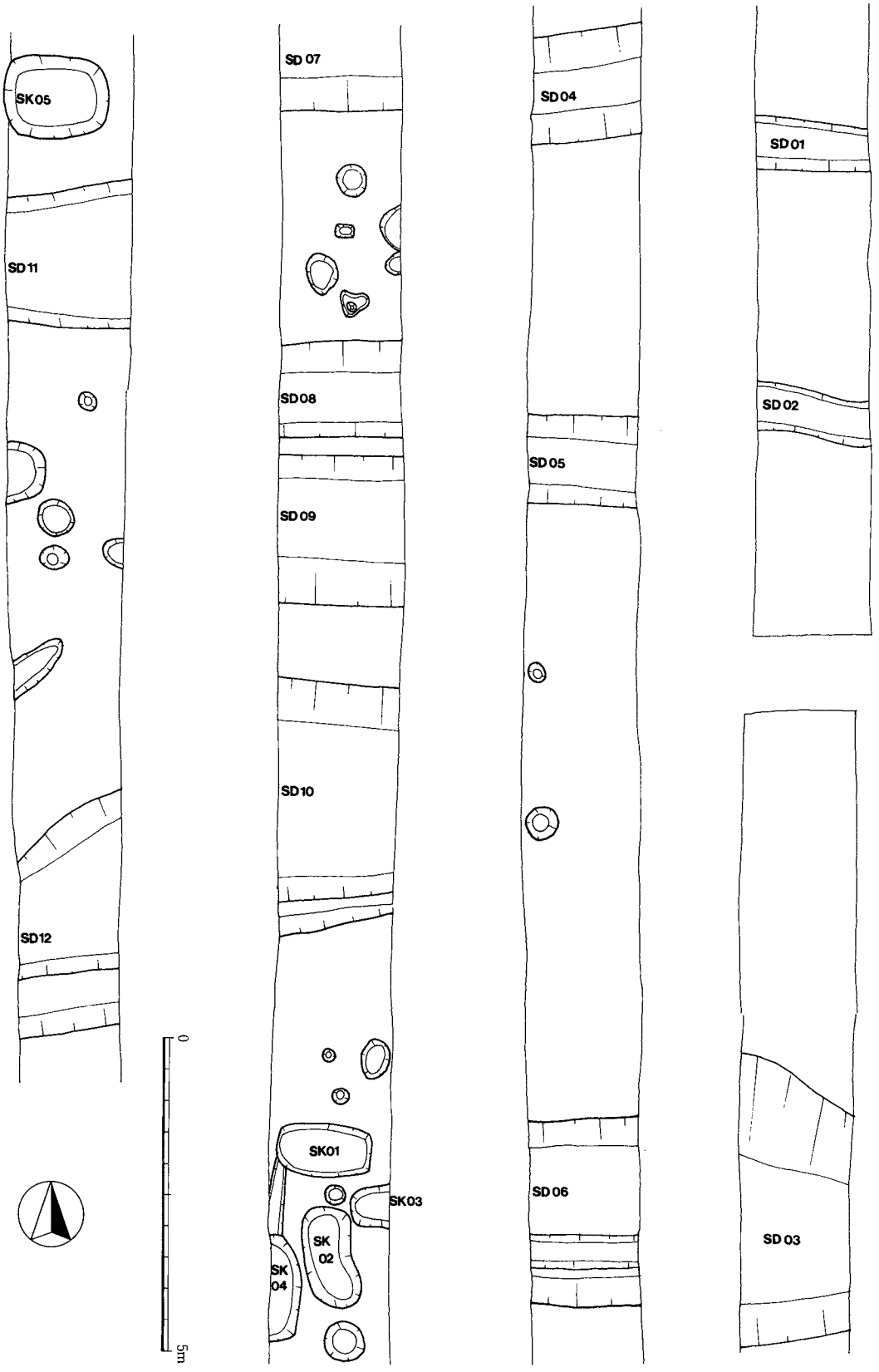
ＳＤ18　幅370cm・深さ30cmで、東西方向に走る浅い溝。埋土は褐色土を主とし、土層観察ではＳＤ17がＳＤ18の北肩を切込んでいる。

ＳＤ19　幅160cm・深さ30cmの東西方向に走る溝で、埋土は灰褐色土が堆積している。

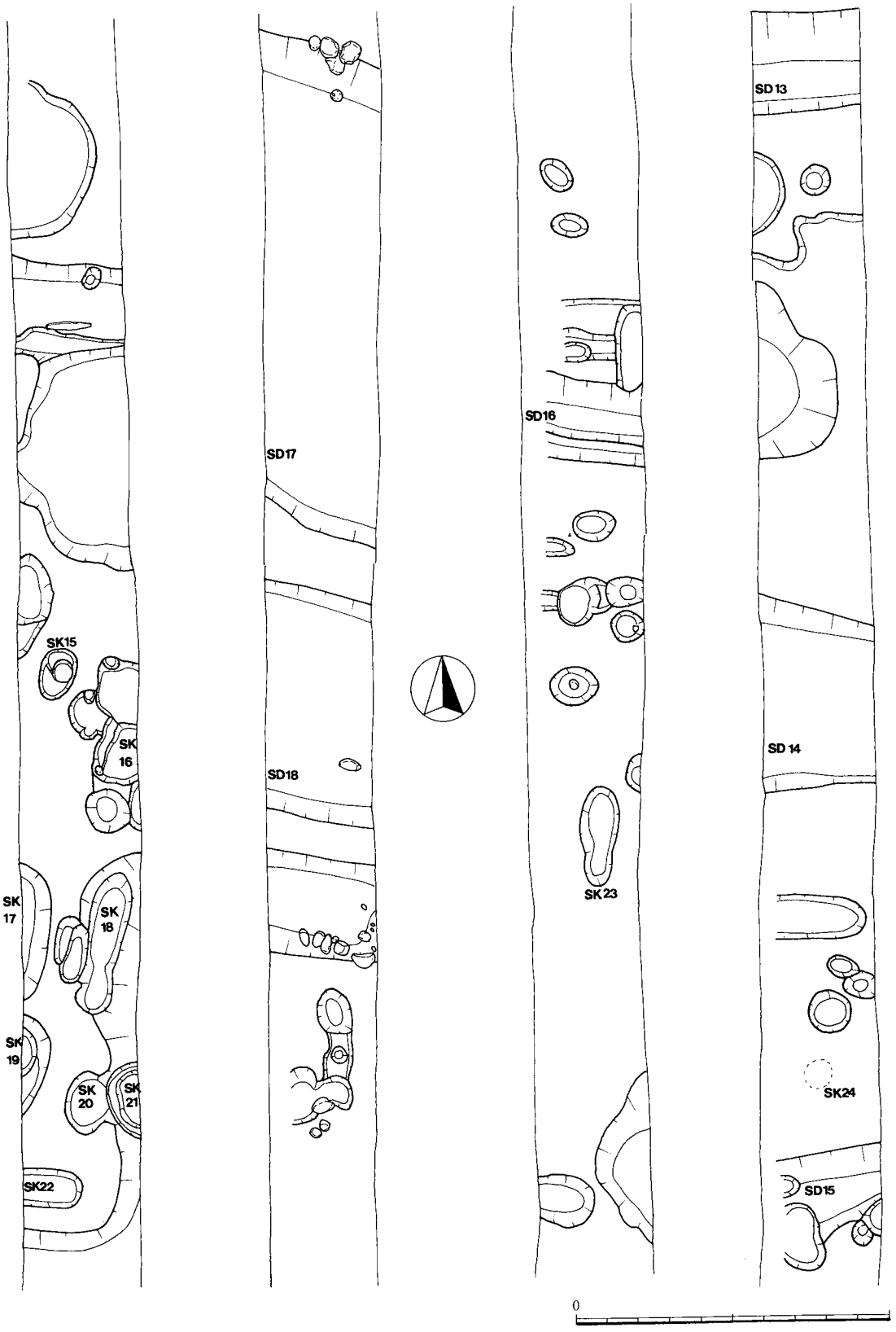
このほかにも、200×200cm前後の方形を呈し、深さ約100cmの土坑を数基検出しているが、いずれも埋土は褐色系の土である。また、木柱が残るピットも検出しており、調査区の周辺に木造建物のあったことが窺われる。（以上小嶋）



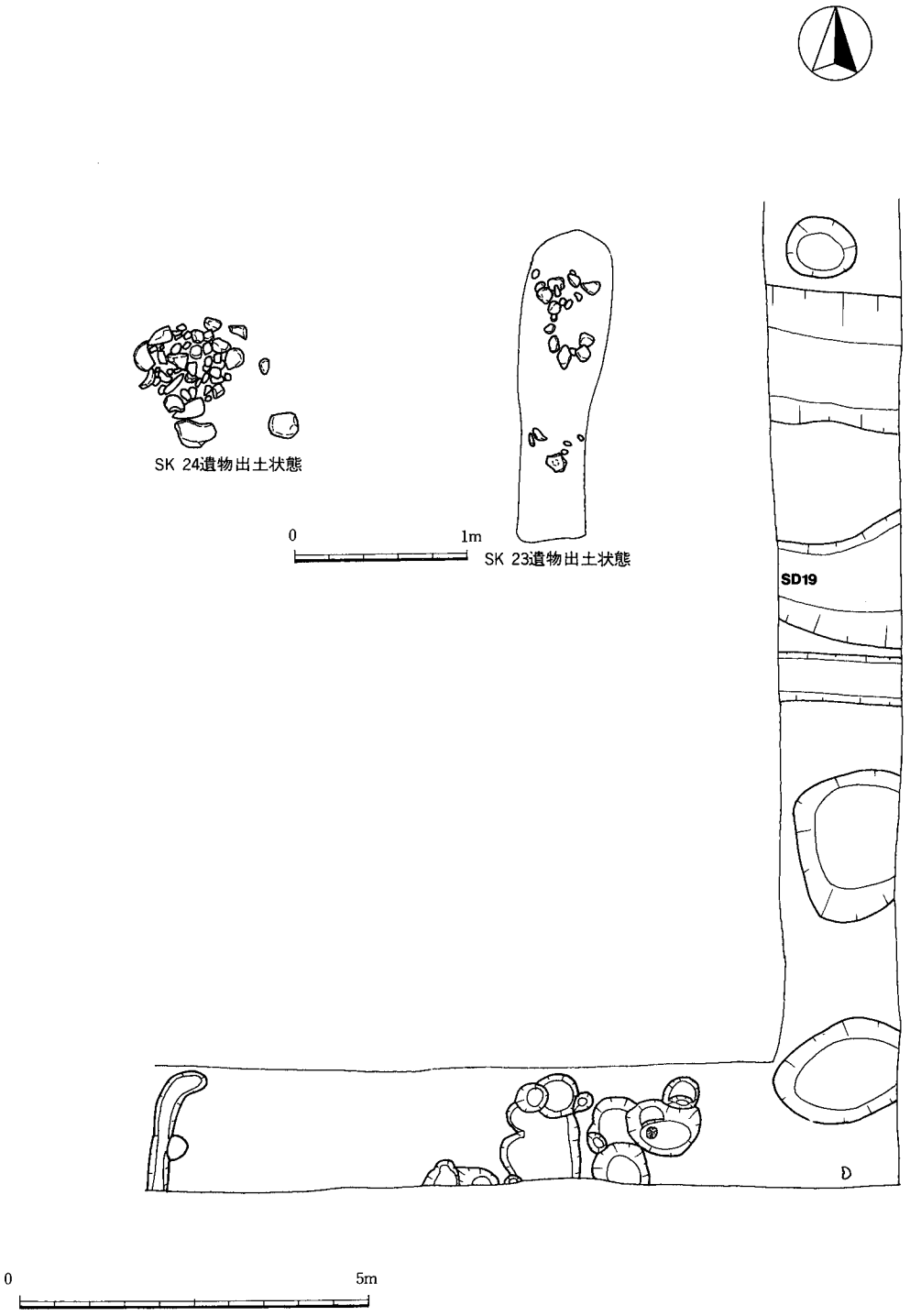
第 1 図　八田中中村遺跡の調査区位置図



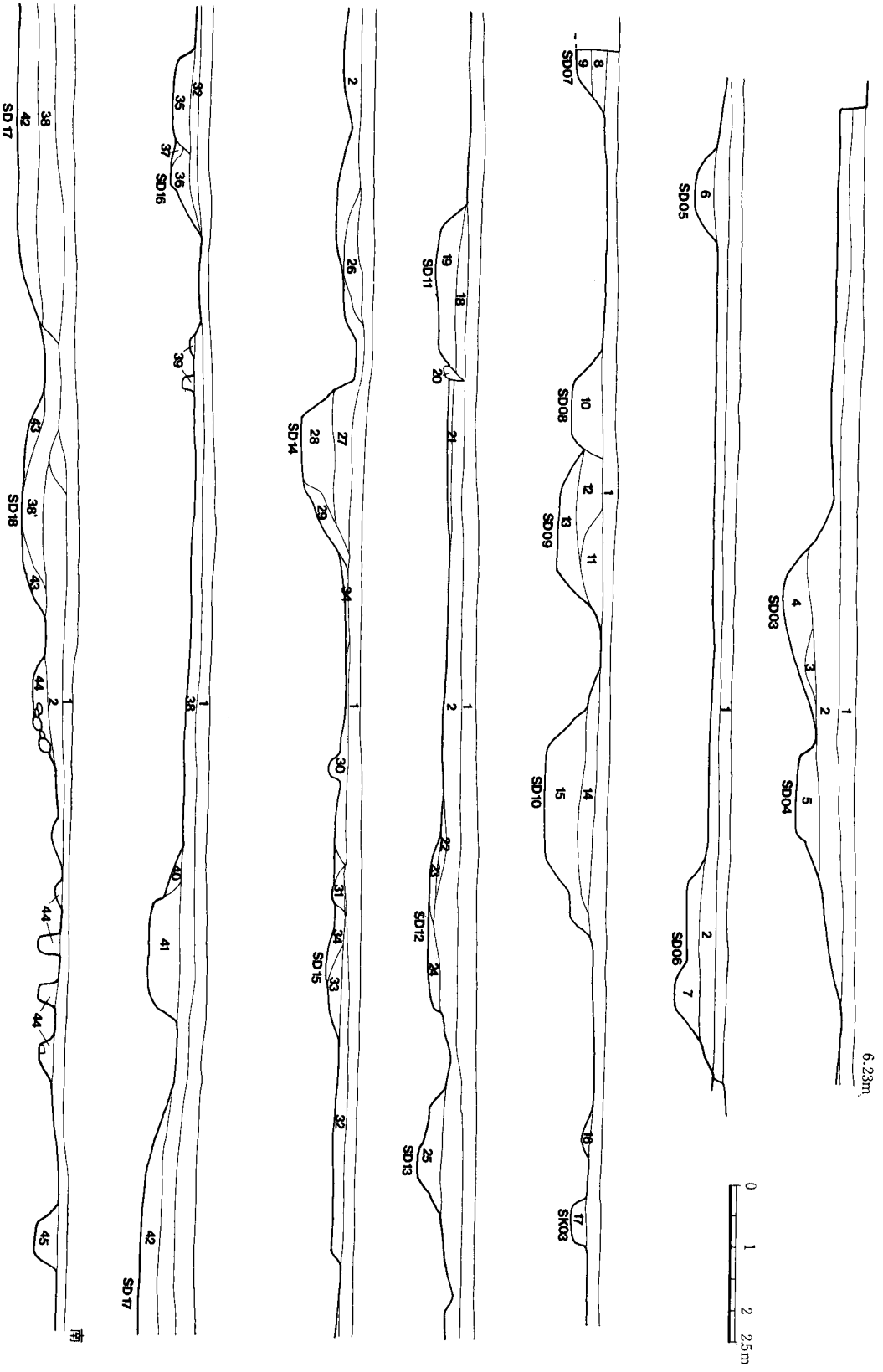
第２図　八田中中村遺跡遺構図



第３図　八田中中村遺跡遺構図

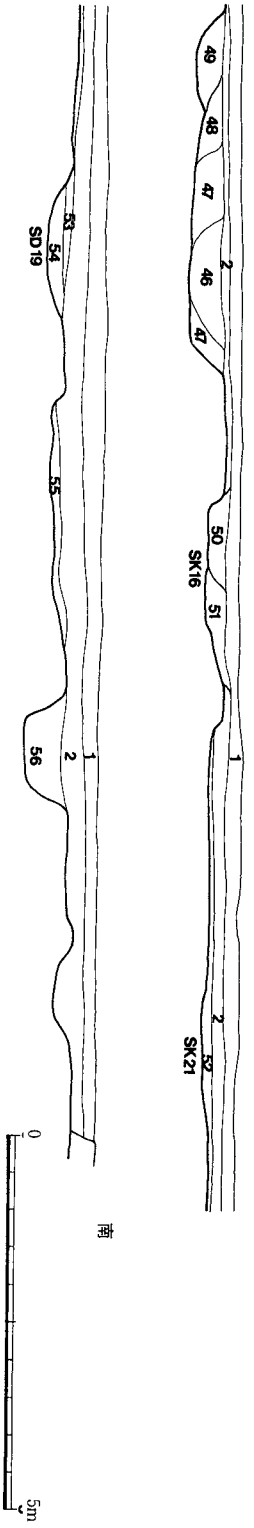


第４図　八田中中村遺跡遺構図



第５図　八田中中村遺跡遺構図

1．耕作土
2．灰褐色土
3．黄灰褐色土 ［SD03］
4．暗褐色土
5．暗灰褐色土［SD04］
6．暗褐色土（含地山ブロック）［SD05］
7．暗褐色土（木片多い）［SD 06］
8．灰褐色土 ［SD07］
9．暗褐色土
10．暗黄褐色土（含木片）［SD08］
11．黄灰褐色土
12．黒褐色土 ［SD09］
13．暗褐色土
14．暗褐色土 ［SD10］
15．褐色土
16．褐色土
17．褐色土［SK03］
18．暗灰褐色土 ［SD11］
19．暗褐色土（含地山ブロック）
20．黒褐色土
21．暗褐色土
22．暗褐色土
23．灰褐色土 ［SD12］
24．暗褐色土
24．暗褐色土［SD13］
26．黄灰褐色土
27．暗灰褐色土
28．暗茶褐色土 ［SD14］
29．暗褐色土
30．暗褐色土
31．暗褐色土
32．暗灰褐色土
33．暗褐色土 ［SD15］
34．地山漸移層
35．褐色土［SD16北］
36．暗灰褐色土 ［SD16］
37．暗褐色土
38．暗茶褐色土
39．灰褐色土
40．暗黄褐色土
41．暗茶褐色土
42．暗褐色土［SD17］
43．褐色土［SD18］
44．褐色土
45．暗褐色土
46．灰褐色土
47．暗褐色土
48．暗灰褐色土（含地山ブロック）
49．黒灰褐色土
50．灰褐色土 ［SK16］
51．灰褐色粘土（含地山ブロック）
52．褐色粘土［SK21］
53．黒灰色土 ［SD19］
54．灰褐色土
55．暗褐色土
56．暗褐色粘土
57．地山 黄灰色砂層



第６図　八田中中村遺跡の土層

3　遺　　物

本遺跡は松任市初見の近世単独遺跡であり、金沢城下近郊の農村集落における希少な発掘調査例として注目される。ただし調査区域が制限されているため、遺構全体の拡がりは確認できていない。遺物はパンケースで14箱出土した。その大半は近世の陶磁器類で占められるが、その他石製品や中世遺物が少量みられる。

ここではまず、実測遺物について触れ、その後に出土遺物の全体像を概観してみたい。

1）実測遺物

ＳＫ05（第９図１）　珠洲の甕口縁部片。口縁部は大きく外反し、胎土内には少量の海綿骨片が認められる。今回確認できた資料中では最も古い13世紀代の製品である。

ＳＫ19（第15図４）　京焼風陶器皿。見込は蛇の目釉剥ぎ、中央に銹絵で山水文が描かれ、釉剥ぎ部分の文様は褐色に発色する。胎土は精緻で、釉には貫入がはいる。高台内の削り込みは深く、京焼風陶器の中でも新しい様相をもつ。

ＳＤ04（第９図２）　丸瓦片。凹面の凸凹は、模骨や布についた縄の結び目などによる可能性がある。焼成は甘く瓦質で表面は黒色である。

ＳＤ06（第９図３）　染付磁器碗。外面には一重網目文がはいり、内面は無文。小振りの碗で、釉は青みをおびる。

ＳＤ07（第９図４）　染付磁器碗。端反口縁で内面に幅の狭い文様帯が巡る。釉はやや灰色にくすむ。

ＳＤ10（第10図１～10）　１は白磁碗。高台内無釉で、雑に面取りした畳付には砂が付着する。外面には轆轤目が残り、青みをおびたむらのある釉がかかる。２は染付磁器碗。鋭角に削られた高台内は橙色無釉である。３は染付磁器碗。外面にはコンニャク印判による鶴文と松文を交互に配する。釉は灰色にくすむ。４は青磁碗。高台は深みのあるＵ字状に削られ、釉にはむらがみられる。５は小振りの白磁皿。蛇の目釉剥ぎ、外底無釉で、釉はやや青みをおびる。釉剥ぎ部分には細かい砂が付着する。６・７は蛇の目釉剥ぎ、外底無釉の染付磁器皿。文様は内面のみに簡素に描かれ、呉須の発色は淡緑色にくすむ。８は染付磁器皿。口縁部外面に一重圏線、内面には半菊文が描かれる。９は腰部に段をもつ灰釉陶器皿。蛇の目釉剥ぎ、外底無釉で、釉調は透明感のある淡い緑色である。10は刷毛目陶器鉢。灰緑色の素地に白化粧土で、動きのある縞状文様が内外面共に描かれる。

ＳＤ11（第11図１～２）　１は灰釉陶器皿。見込には重ね焼き時の胎土目跡が残る。露胎となる高台の削り出しは浅く、見込中央は使用のためか非常に平滑である。２は全面施釉の灰釉陶器皿。見込には砂目跡が残り、高台は三角形状に明瞭に削り出される。

ＳＤ13（第11図３～５）　３は越中瀬戸の鉄釉陶器皿。口縁は輪花状に仕上げ、釉は浸けがけで

口縁部の周縁に施される。見込は平滑である。4は染付磁器碗。口縁端部がわずかに外反する。外面には菊唐草文が描かれ、口縁部内面には一重圏線が巡る。5は褐色系の灰釉陶器皿。溝縁口縁で、見込には三カ所の砂目跡がみられる。削り込み高台の畳付は幅広く面取りされる。

ＳＤ16（第11図６）　染付磁器碗。外面の圏線は鶴・松文のコンニャク印判下に一重、高台際に二重巡る。内面無文。高台内の一重圏線内には大きく崩れた「大明年製」銘がはいる。出土遺物中最も点数の多い碗種である。

ＳＤ17（第12図１～８、第13図９～13）　１は染付磁器碗。ＳＤ16出土品と同様。２は染付磁器碗。外面には芙蓉手文が描かれ、高台は薄く端正に作られるが、焼成不良で釉が白濁し、呉須の発色にはむらがある。３は九谷の染付磁器碗。見込は中央にむかって緩やかにくぼみ、高台外側面はやや内傾する。貫入のはいる釉全体に青みがあり、見込には降灰痕、畳付には細かな白色砂が付着する。胎土は灰白色でややぬめりをもち、胎土中のすき間にはいり込んだと思われる黒細粒状のよごれが顕著にみられる。見込圏線内には花文状の染付文を配する。４は九谷の白磁碗。深みのある碗形で、高台は低く断面は正三角形状となる。高台内中央には円形の緩やかな隆起が認められる。釉は灰黄みをおび、外面にはピンホールが目立つ。胎土は３と同じであるが、貫入はみられない。３・４共に県内消費地初見資料である。５は白磁碗。高台内周縁は浅く凹線状に削られ、見込には降灰痕がみられる。６は京焼風陶器碗。胎土は柔らかく、全面施釉で浅黄色。内外面共に細かい貫入がはいる。７・８は灰釉陶器皿。いずれも溝縁口縁で外底無釉、見込に砂目跡をもつ。７の高台内にはＮ字状の墨痕がみられる。９・10は叩き成形の鉄釉陶器甕。いずれの内面にも当て具痕が青海波状に残る。９は肩部にタガ状の貼付凸帯を巡らせる。10は外面に右下がりの平行叩き痕が残り、割れ口には漆による補修痕が認められる。11は口縁部にのみ鉄釉をかけた轆轤成形の陶器擂鉢。口唇部は内側につまみ出すように肥厚させる。卸し目は下から施し、上方は揃えない。12は同様の陶器擂鉢底部。無釉であるが、一部に鉄釉垂れがみられる。外底部は糸切り離しで轆轤は右回転である。13は外面に細みの蓮弁文をもつ青磁碗。中国産で15世紀後半～16世紀前半の製品である。割れ口には漆による補修痕が認められる。

ＳＤ18（第14図１～８）　１は染付磁器碗。ＳＤ16出土品と同様。２は染付磁器碗。端反口縁で蛇の目釉剝ぎ、見込中央にはコンニャク印判による五弁花を配する。全体に厚手で釉は灰色にくすむ。３～５は法量に多少の差はあるが、蛇の目釉剝ぎ、外底無釉の染付磁器皿。外面無文で、内面には粗放な折枝文がはいる。６は京焼風陶器皿。第15図４と同様の特徴をもつが、文様は見込側面に描かれている。７は染付磁器小碗。外側面には型紙摺りによる草花文がみられる。内面は無文。８は土師器皿。小型の製品で内面屈局部には粗い沈線が巡る。口縁部周縁には油煤痕が明瞭に付着し、灯器としての使用がうかがえる。

ＳＤ19（第15図１～３・５～７、第16図８～13）　１は染付磁器碗。ＳＤ16出土品と同様。２は染付磁器皿。内側面に草花文、外側面に草繋ぎ文、見込中央にはコンニャク印判による五弁花がはいる。高台内にはハリ跡が一カ所残る。３は刷毛目陶器碗。全面褐色の素地に白化粧土で縞文様を施す。内面は無文。５は刷毛目陶器鉢。見込蛇の目釉剝ぎ、外底無釉で、釉剝ぎ部分には灰白色のアルミナ砂を塗布する。高台畳付外側部には弱い面取りが施される。６は高取の鉄釉陶器

碗か。全面施釉で部分的に藁灰釉の流しがけがみられ、鉄釉素地との境は紺青色に発色する。7は産地不明の灰釉陶器片口。灰白色の胎土は密で、確認できる範囲は全面施釉である。8は越前の甕。口唇部はやや外傾し幅広に仕上げる。塗り土は内外面共部分的に施される。9は全面鉄釉の陶器擂鉢。外反する口縁部下に一条の凸帯を巡らす。10も同様に鉄釉の施された叩き成形の擂鉢底部。高台は貼り付けで、本来の底部境よりも2.5cm程上方に付く。見込には重ね焼きの痕跡を示す灰白色砂が帯状に巡る。11は越前の甕底部。残存部に明瞭な塗り土はみられない。外底部中央に「王」字状の文字記号が彫り出される。12は珠洲の甕口縁部片。外面には粗い叩き痕、割れ口には漆による補修痕が認められる。14世紀代の製品である。13は凝灰岩質の行火である。台部をもち、内面には鑿痕が顕著にみられる。

ＳＤ23（第17図１）　深みのある灰釉陶器皿。濃緑色の釉で、見込には二カ所の胎土目跡がみられる。

ＳＤ24（第17図２～５、第18図６～８、第19図９～12、第22図24）　２は灰釉陶器鉢。見込の割れ口付近に二筋の鉄絵をわずかに残す絵唐津片である。３は越前の甕口縁部。幅３cm近くの水平な口唇部をもつ。口縁部外面には一条の凸帯、内面には一条の凹線が比較的明瞭に巡る。塗り土はみられない。４は丸瓦片。端面・側面付近でわずかに欠けている。凹面には1.9cm間隔に縦方向の凹みが、横方向には波状の沈線が約３cm間隔で二本確認される。５は越前の甕口縁部片。縁帯をもち、口縁端部はわずかに外反し丸くおさめる。胎土内には多量の長石がみられる。14世紀後半の製品である。６～12は粉挽き臼をはじめとした、いずれも在地産と思われる石製品である。24は越前の甕口縁部片。口縁端部外面がわずかに張り出す。口唇部を含めた内外面共に塗り土を施す。

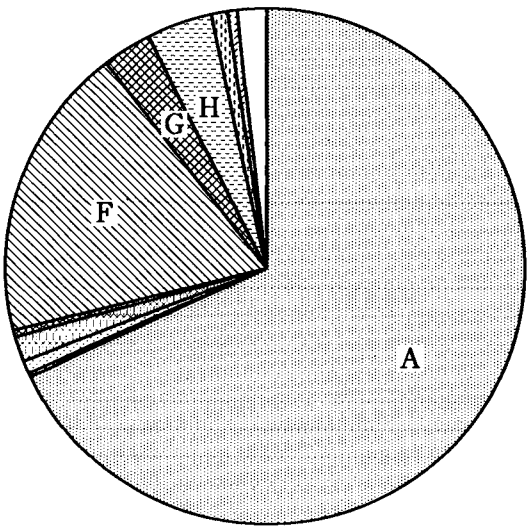
包含層（第20図１～14、第21図15～23、第22図25～28、第23図29～32、第24図33～35）　１・２は染付磁器碗。ＳＤ16出土品と同様。３は染付磁器碗。高台内の二重圏線内に「太明」銘がはいる。釉は生がけで焼成にはむらがある。４は染付陶胎碗。高台内の削り込みは深く、畳付は丸く仕上げる。胎土は灰色で、釉は青みをおびた濁灰色である。５は筒型の染付磁器碗。外面には雪輪文、見込中央にはコンニャク印判による崩れた五弁花がはいる。本遺跡で確認された筒型製品はこの１点のみである。６・７は見込蛇の目釉剥ぎ、外底無釉の染付磁器皿。ＳＤ10・18出土品と同様。８は刷毛目陶器碗。外面には横方向、見込には渦巻き状の縞文様を描く。９は全面施釉の灰釉陶器碗。高台付け根部分は削り込まれ、竹節状にくびれる。10は灰釉陶器皿。腰部に段をもち、見込には二カ所の胎土目跡がみられる。11は灰釉陶器皿。高台は碁笥底風に浅く削り込まれる。焼成の際最上部に置かれたのであろうか。目跡はみられない。12～14は灰釉陶器皿。器形・釉色・胎土はそれぞれ異なるが、いずれも外底無釉で、見込には砂目跡が残る。15は青緑釉陶器皿。内面は銅緑釉で蛇の目釉剥ぎ、外面は透明釉で底部無釉とかけ分けされる。16は越中瀬戸の灰釉陶器皿。口縁部は輪花状に仕上げ、高台は付け高台。内面釉境には釉止めの段が認められ、見込中央には「大吉カ」の印がはいる。17は瀬戸・美濃の灰釉折縁皿。重ね焼きのため見込の釉は輪状にふきとられ、高台内には輪トチンの一部が融着する。18は櫛目陶器鉢。褐色の素地に白化粧土をかけ、櫛状工具で縦横に刷毛目を描いた上に褐彩文を施す。外面は無文で体部以下は無

釉。19は産地不明の灰釉陶器壺。釉は透明感のある灰緑色で全面施釉。胎土は灰白色で堅い。20は叩き成形の灰釉陶器片口。口縁部は方形に張り出し、内面には青海波状の当て具痕が残る。釉調は藁灰釉に近く外側面にのみ施される。高取の可能性もあろうか。21・22は越前の甕類。21は轆轤成形の小甕で、内外面には顕著な轆轤目が残り、塗り土が施される。23は丸瓦片。凹面には鉄線によるコビキ痕が残る。布目もみられるが明瞭ではない。凸面は縦方向に丁寧に磨かれる。24～26は越前の甕口縁部片。26は16世紀代の製品で無釉赤褐色の肌をもち、外面に一条の凸帯、内面には沈線が巡る。27・28は越前の擂鉢で共に無釉。27の口縁部は直線的に仕上げられ、卸し目は器面いっぱいに施される。色調は内面と口縁部外面が灰色、それ以下は灰褐色と明瞭に分かれ、重ね焼きの様子がうかがえる。29～35は凝灰岩質を主とした石製品。五輪塔の一部もみられる。

2）土器・陶磁器様相

本遺跡からは、前述の実測遺物を含め485点の土器・陶磁器が出土している（瓦を含め489点）。算出方法は破片数を基本とし、同一個体の破片は一括して1点とした。ただし大甕類のような大型製品は実個体数以上の点数が示されている可能性がある。その内訳は表1に示した。時期的には13世紀（珠洲甕）～19世紀（行平蓋）の幅をもつが、中心となる遺物の生産年代は16世紀末～18世紀前半にある。なお半数近くの231点（47.6%）は包含層資料である。一方ＳＤ10・17・18・19・24等に定量みられる遺構出土遺物は内部間での時間差が大きく、現時点では一括消費（廃棄）資料として扱うことは難しい。そのため今回は遺跡全体を対象とした陶磁器類の出土様相を、それぞれの生産地および生産年代を軸に概観することにしたい。

(1) 産地組成



A－肥前	330 (68.0%)
B－高取	1 (0.2%)
C－瀬戸・美濃	4 (0.8%)
D－越中瀬戸	8 (1.6%)
E－九谷	2 (0.4%)
F－越前	89 (18.4%)
G－珠洲	15 (3.1%)
H－不明擂鉢	20 (4.1%)
I－在地	5 (1.0%)
J－中国	3 (0.6%)
K－不明・その他	8 (1.6%)
合　計	485

第７図　出土遺物の産地別構成比

A－肥前330点（68.0％）　鍋島藩・唐津藩（佐賀県）、平戸藩・大村藩・長崎幕府領（長崎県）産の陶磁器をさす。肥前陶器196点（40.4％）と肥前磁器134点（27.6％）に大別され、本遺跡出土遺物の大半を占める。

肥前陶器は碗30点（肥前陶磁器比9.1％）、皿76点（23.0％）、鉢30点（9.1％）、甕類26点（7.9％）、擂鉢29点（8.8％）、片口5点（1.5％）の6種に分かれる。碗は古手の製品は2点と少なく17世紀前半代で13点と増加傾向が現れ、17世紀後半以降の京焼風陶、18世紀前半の刷毛目陶へと続く。銅緑釉製品は1点と少ない。皿は肥前陶器中最も点数が多く、碗と同様に17世紀前半資料の増加が33点と目立つ。また、17世紀末以降では16点の嬉野町内野山系の蛇の目釉剝ぎ銅緑釉陶をはじめ、刷毛目陶、京焼風陶がみられる。鉢はそれらに対し、刷毛目陶を主体とした17世紀後半以降での増加が認められる。貯蔵容器の甕類は内面に青海波状の叩きを残す17世紀初頭資料が定量みられ、それ以降の格子状叩き製品へと続く。ただし大型品の出土は確認できない。調理容器の擂鉢は時期的な増減は少なく、17世紀～18世紀にかけてほぼ同数の出土（17世紀前半・9点、17世紀後半・11点、18世紀・9点）が認められる。なお片口でみられたのは、内面に青海波状の叩きを残す古手の製品だけであった。

一方肥前磁器は碗85点（25.8％）、皿48点（14.6％）、瓶子1点（0.3％）の3種に分かれる。碗は肥前製品中最も点数が多い。17世紀前半代から13点の資料が認められ、17世紀後以降も極端な減少傾向はみられない。量的増加は18世紀前半を主体とする32点のコンニャク印判製品に現れる。また皿は17世紀前半代の初期伊万里は4点と少なく、肥前陶器とは対照的である。資料の増加は17世紀末以降と思われる波佐見系の蛇の目釉剝ぎ、外底無釉製品29点に認められる。コンニャク印判製品に対応するものであろうか。瓶子は染付の底部片が1点確認できただけであった。このようにみると本遺跡における肥前産食器の搬入消費の画期は、陶器碗・皿は17世紀前半に、そして磁器碗・皿は17世紀末～18世紀前半に想定することができるようである。

B－高取1点（0.2％）　筑前（福岡県）産の陶磁器をさす。量的には少なく、SD19出土の陶器碗1点だけである。小石原村に所在する小石原中野窯系の製品に類似品がみられる[1]。

C－瀬戸・美濃4点（0.8％）　16世紀後半以降の大窯製品であり、量的には灰釉皿3点、志野向付底部片1点と少ない。なお17世紀以降の連房期の製品は確認できていない。

D－越中瀬戸8点（1.6％）　富山県中新川郡立山町を主要生産地とする陶磁器をさす。技術的には瀬戸・美濃の大窯製品の影響を色濃く受けて成立しており、開窯期は16世紀末頃に比定される。近年富山県内はもちろん、石川県、新潟県等でも出土が確認されている。本遺跡では皿の出土例が7点と比較的多い。登窯資料である立山町彦右衛門窯採集資料中に類似品がみられるため、時期的には17世紀代を想定しておきたい[2]。

E－九谷2点（0.4％）　大聖寺藩（石川県）九谷村産の陶磁器をさす。染付碗と白磁碗のわずか2点ではあるが、県内消費地初見資料である。この他には、かつて大聖寺藩江戸上屋敷であった東京大学本郷構内遺跡の医学部附属病院地点から2点が確認されている[3]。九谷の実態は定かではないが、今回大量の肥前陶磁器類に混じり農村域から出土した事実は興味深い。寛文12年（1672）に刊行された加賀藩の諸事を綴った手習い本である『加賀往来』には、各地の名産品と

して「九御國之名物者　加賀絹　同染絹　染手綱　象眼　鎧　鼓革　淺野川鯸　金沢菊酒　二俣之杉原　宮腰鯛　大正持燒茶碗　粟ケ崎鯉鰤　大場海老……」と「大正持燒茶碗」の記載がみられる。また元禄～元文期（1688～1741）の『三州名物往来』にも同様の記述で「大聖寺燒染附茶碗」とある。おそらく当時九谷は大正持（大聖寺）焼の名でも呼ばれ、雑器類はこうして地元を中心にわずかに流通していたのであろう。時期的には昭和46年（1972）の九谷古窯第２次調査の際、第１号窯物原から「明暦弐歳　九谷　八月六」と染付された色見片が出土しているため[4]、明暦２年（1656）以降の年代が与えられる。

Ｆ－越前89点（18.4％）　肥前陶磁器に続き量の多い資料である。甕70点（14.4％）と擂鉢19点（4.0％）に大別される。また甕は無釉製品40点と塗り土製品30点に分かれる。塗り土は寛永年間前半頃（1620～30年代）に焼成時間の短縮（燃料の節約）等を目的に取り入れられた技法である[5]。無釉陶はそれ以前の製品と思われるが、大甕の耐久性を考慮すれば、塗り土製品との併用は十分に考えられる。なお擂鉢にも中世の製品がみられるが、その量はわずかである。

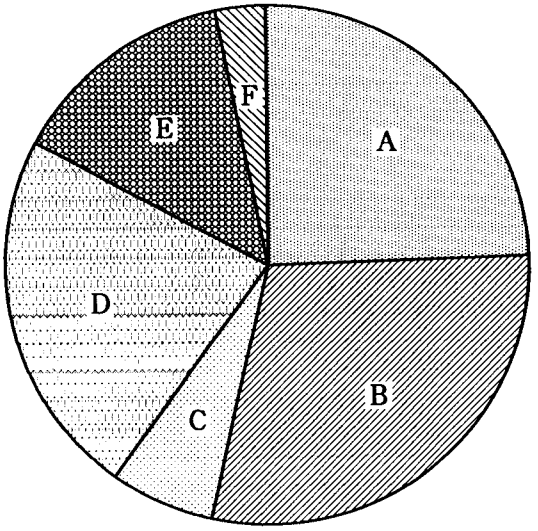
Ｇ－珠洲15点（3.1％）　甕片15点を確認できた。珠洲は15世紀いっぱいでほぼ操業を終える中世須恵器である。それも最終焼成品は片口鉢である。それだけに甕片のみの出土は、前述の越前甕と同様の機能を思わせる。また越前・珠洲以外の中世遺物がわずか数点であることも、本遺跡の主体が近世にあることを示しており、今後各地域の近世遺跡における珠洲の出土様相が注目される。

Ｈ－不明擂鉢20点（4.1％）　実測されてはいないが、全面に鉄泥を施す擂鉢が定量認められる。轆轤成形で削り出し高台、口縁端部を外側に折り返し、その直下を凸帯状に仕上げる。胎土は浅黄色もしくは暗灰色系でかたく焼き締まる。産地は不明であるが、全体の印象は越中瀬戸に近い[7]。時期的にはＳＫ14・18のわずかな共伴資料から18世紀代を想定しておきたい。

Ｉ－在地５点（1.0％）　在地産とみられる土師器皿５点を確認している。その中で灯火具としての確実な使用が認められる油煤痕付着資料はＳＤ18の１点のみであり、都市部と比較しての絶対量の少なさに特徴がある。例えば著名な新美南吉著『おじいさんのランプ』には、20世紀初頭の農村部（愛知県）の夜の様子が以下のように描かれている[6]。「巳之助の村では、夜はあかりなしの家が多かった。まっ暗な家の中を、人びとはめくらのように手でさぐりながら、水がめや、石うすや大黒柱をさぐりあてるのであった。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りのとき持ってきたあんどんを使うのであった。」この文章が示すように、明治時代以降にランプが普及する以前は、都市部以外の夜は闇に近い世界であったと思われる。本遺跡の所在する松任近辺は、近世初期から加賀有数の菜種生産地（種油）として知られているが、その供給先はあくまで金沢城下をはじめとした都市域に限られていたものと推測される。

Ｊ－中国３点（0.6％）　実測されてはいないが、福建省漳州窯系陶磁器をさす。皿２点、鉢１点が確認できた。景徳鎮窯系以外のいわゆる「華南系青花」、「スワトウ」等と呼ばれる一群である。釉は灰色ぎみで厚くかかり、呉須の発色も悪い。時期的には16世紀末～17世紀初頭に全国的な増加がみられる。本遺跡では景徳鎮窯系の製品は認められなかった。なおＳＤ17出土の青磁碗は、近世の組成からは外れると判断し、その他に含めている。

(2) 器種組成



A－碗	119	(24.5%)
B－皿	141	(29.1%)
C－鉢	31	(6.4%)
D－甕	111	(22.9%)
E－擂鉢	68	(14.0%)
F－その他	15	(3.1%)
合計	485	

A－碗119点（24.5%）　肥前陶器30点（25.2%）、肥前磁器85点（71.4%）、高取1点（0.8%）、越中瀬戸1点（0.8%）、九谷2点（1.7%）の5種で構成される。大半が肥前陶磁器で占められる。17世紀前半代は肥前陶器15点、肥前磁器13点とほぼ拮抗するが、17世紀後半～18世紀前半代には肥前陶器15点、肥前磁器66点と磁器の伸びが著しい。なおこのような磁器碗の増加普及は、中世以来食器組成において重要な位置を占めてきた漆器類にも大きな影響を及ぼしたことが予想される。

B－皿141点（29.1%）　肥前陶器76点（53.9%）、肥前磁器48点（34.0%）、瀬戸・美濃3点（2.1%）、越中瀬戸7点（5.0%）、在地5点（3.6%）、中国2点（1.4%）の6種で構成される。大半が肥前陶磁器で占められる。17世紀前半代には肥前陶器が42点と主体であり、以下越中瀬戸、肥前磁器、瀬戸・美濃、中国と続く。それが17世紀後半～18世紀前半代には肥前陶器34点、肥前磁器35点と両者が拮抗するようになり、18世紀後半以降は肥前陶器の姿はみられない。

C－鉢31点（6.4%）　肥前陶器30点（96.8%）、中国1点（3.2%）の2種で構成される。大半が肥前陶器で占められる。碗・皿類に比べ点数が少なく、使用頻度の低かったことがうかがえる。

D－甕111点（22.9%）　肥前26点（23.4%）、越前70点（63.1%）、珠洲15点（13.5%）の3種で構成される。他の陶磁器類に比べ個体を構成する破片数が多いため実数は把握しづらい。このうち約半数の55点（越前無釉40点・珠洲15点）は、貯蔵容器として中世来使用され続けてきた可能性のある資料である。また越前は量的に最多であるが、近世以降の塗り土製品は30点であり、その点では肥前に近い数字となる。なお肥前は小・中型品、越前・珠洲は中・大型品が多いようである。

E－擂鉢68点（14.0%）　肥前29点（42.7%）、越前19点（27.9%）、不明20点（29.4%）の3種で構成される。時期別の詳細な量比は定かではないが、17世紀代はその初頭から肥前と越前の両

者が搬入消費され、そして18世紀近くになるとそこに系譜の異なる製品が定量加わる組成を想定しておきたい。

3）小　　結

ここでは今まで扱ってきた16世紀末～18世紀前半代の出土陶磁器類を大きく２時期に分けて、それぞれの構成器種を列記しておく。

Ⅰ期（16世紀末～17世紀中）・肥前陶器碗・皿・鉢・甕・擂鉢・片口、肥前磁器碗・皿、瀬戸・美濃皿・向付、越中瀬戸碗・皿、越前甕・擂鉢、珠洲甕、中国皿・鉢（17種）

Ⅱ期（17世紀後～18世紀前）・肥前陶器碗・皿・鉢・甕・擂鉢、肥前磁器碗・皿・瓶子、高取碗、九谷碗・越前甕・擂鉢、不明擂鉢、土師器皿（14種）

こうしてみると本遺跡出土陶磁器類の構成器種は比較的単純であり、食器類は肥前陶磁器、貯蔵容器・調理容器類は肥前陶器と越前にその主体のあることが分かる。このような単純な器種構成、また金沢城下等の都市部でみられる色絵製品・各種大皿類・京焼系陶器類の欠如、加えて絵唐津・中国製品・土師器皿の極めて散発的な出土等は、当時の農村部の制約的な生活様相を示すものと理解しておきたい。なお今後より多くの遺跡との比較の中で、近世社会の総合的な認識が深まることを期待したい。

本稿を成するに当たり以下の方々から多くのご教示を受けている。記して感謝の意を表したい。
大橋康二・岡本恭一・木立雅朗・川畑　誠・田中照久・増山　仁・宮田進一

註

(1) 佐賀県立九州陶磁文化館の、大橋康二氏のご教示による。なお、本遺跡の遺物全般にわたり、大橋氏のご教示を得ている。
大橋康二　1989『肥前陶磁』　ニュー・サイエンス社

(2) 宮田進一　1988「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境　第12号』　富山考古学会

(3) 東京大学遺跡調査室　1990『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』　東京大学医学部附属病院

(4) 九谷古窯跡調査委員会　1973『九谷古窯跡　第２次調査概報』　石川県教育委員会

(5) 田中照久　1989「福井県丹生郡清水谷町笹谷乗泉寺遺跡の陶器について」『福井県考古学会会誌　第７号』　福井考古学会

(6) 新美南吉　1983『おじいさんのランプ』　ポプラ社

(7) 脱稿後、増山　仁・庄田知充両氏に今回産地不明擂鉢とした製品が、山口県の須佐唐津窯産である可能性が高いことをご教示いただいた。よって本稿での不明擂鉢20点を須佐唐津系擂鉢と修正しておきたい。

（以上　藤田）

表1　八田中中村遺跡遺構別器種組成一覧

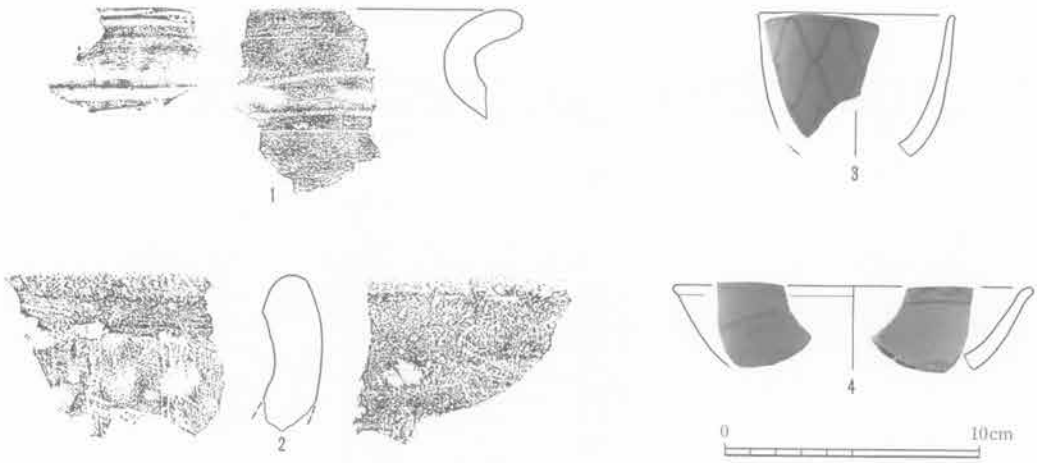
陶磁器の内容			SD																		SK																破片数
産地等	器種	年代他	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	15	16	17	18	19	23	24	1	2	3	4	5	14	15	16	17	18	19	20	21	22	包	計	
肥前陶器	碗	17初																																	2	2	
		17前				1												1		1													1		9	13	
		京風								1						1											1								3	6	
		銅緑																																	1	1	
		18								1								2								1				1					3	8	
	皿	17初									1							1	1																6	9	
		17前								1	1		2			3	2	2				2													20	33	
		京風															2	2													1		1		2	8	
		銅緑														1		5																	10	16	
		17〜18								1																									1	2	
		18															1													1					6	8	
	鉢	17初																1		1																2	
		17前														1	1															1			1	4	
		17後								1			1			4		1																	6	13	
		18		1						3								1								1				1					4	11	
	甕	17初														2			1	3										1					10	17	
		17〜															1																		8	9	
	擂鉢	17初前														2	1																		6	9	
		17後														1	3	1		2										1					3	11	
		18											1					3										1					1		3	9	
	片口	17初														1			1	1															2	5	196
肥前磁器	碗	17前中								3			1			1				1															7	13	
		17後				2							1			2	1	1																1	9	17	
		青磁								1							1																		2	4	
		印判								4			1		1	2	6	5										1							12	32	
		陶胎																																	3	3	
		18								2			1				2	1								1				1					2	10	
		18中後					1										1											1							3	6	
	皿	17前中								1						1			1	1																4	
		蛇の目								5			1				6	4															1		12	29	
		18																1		1									2						2	6	
		18中後															1																		8	9	
	瓶子	18																																	1	1	134
高取	碗	18																1																		1	1
瀬戸	皿	16後末																				1													2	3	
美濃	向付	志野																			1															1	4
越中	碗	17																		1																1	
瀬戸	皿	17								1			2					1																	3	7	8
九谷	碗	17後														2																				2	2
越前	甕	無釉	1			1	1	1	2	7		2		1	2	1	1			5	1	2			3					1			1		7	40	
		塗土		1				1	1	3								2		4															18	30	70
	擂鉢	15〜16						1								1																			1	3	
		17〜										1								1					1										13	16	19
珠洲	甕	中世									1		1		4			3	1						1	2									2	15	15
不明	擂鉢	18〜				1												1		3				1		1				2					11	20	20
在地	皿	土師															1	1	1				1												1	5	5
中国	皿	福建																																	2	2	
	鉢	福建																																	1	1	3
その他					1		1	1								1		1																	3	8	8
小計			1	2	1	5	3	4	3	35	3	3	12	1	7	27	31	42	6	25	2	5	1	1	5	6	1	3	2	9	1	1	5	1	231	485	485
瓦	丸瓦	燻		1																1															1	3	
	桟瓦	赤																																	1	1	4
合計			1	3	1	5	3	4	3	35	3	3	12	1	7	27	31	42	6	26	2	5	1	1	5	6	1	3	2	9	1	1	5	1	233	489	489

表２　八田中中村遺跡出土遺物観察表(1)

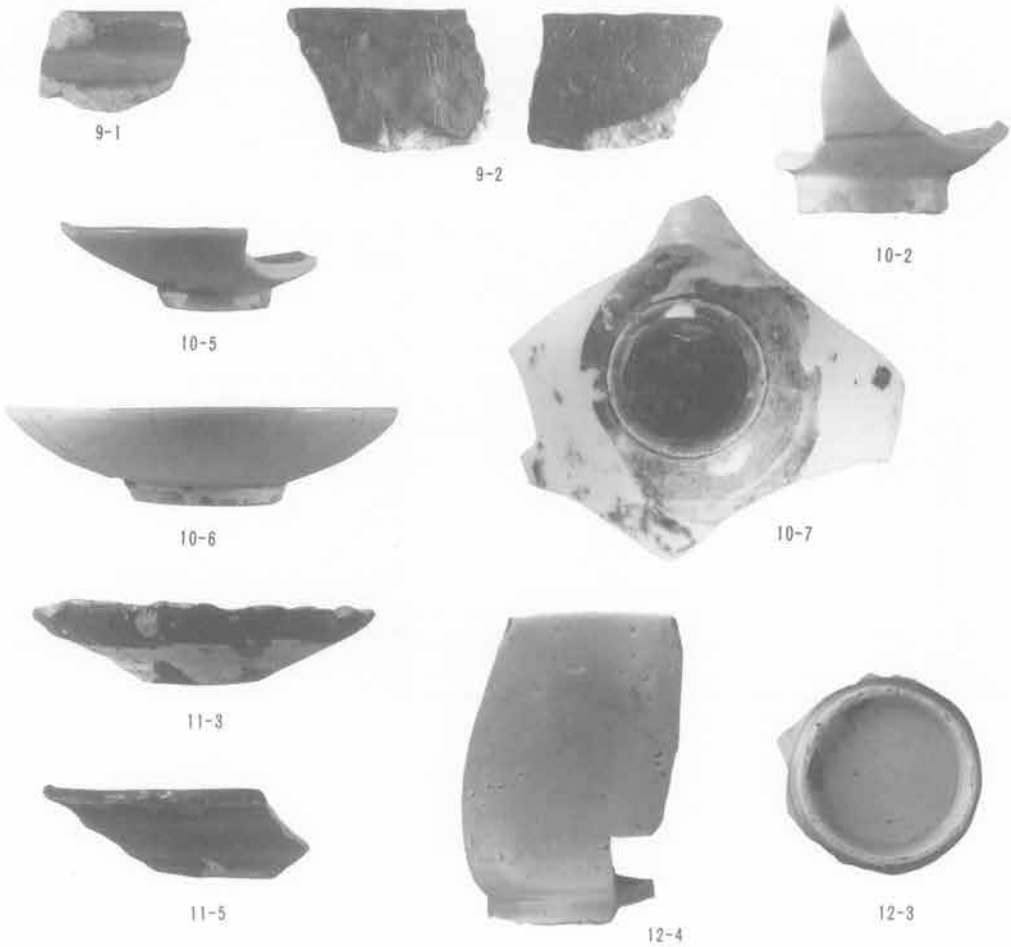
図	No.	遺構	器種	口径	器高	高台径	産地	生産年代	備考
9	1	SK05	甕				珠洲	13	
9	2	SD04	瓦						丸瓦・燻焼
9	3	SD06	碗	7.6			肥前	17後	染付磁
9	4	SD07	碗	14			肥前	18後	染付磁
10	1	SD10	碗			5.1	肥前	17中	白磁・高台内無釉
10	2	SD10	碗			3.9	肥前	17中	染付磁・高台内無釉
10	3	SD10	碗	8.9			肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
10	4	SD10	碗			3.8	肥前	17後～18前	青磁
10	5	SD10	皿	9.3	2.6	3.4	肥前	17末～18前	白磁・蛇の目釉剥ぎ
10	6	SD10	皿	11.8	2.9	4.4	肥前	17末～18前	染付磁・蛇の目釉剥ぎ
10	7	SD10	皿			4	肥前	17末～18前	染付磁・蛇の目釉剥ぎ
10	8	SD10	皿	12.4			肥前	17前	染付磁
10	9	SD10	皿	11.8	4.2	5.1	肥前	17後～18前	灰釉陶・蛇の目釉剥ぎ
10	10	SD10	鉢	20.8			肥前	18	刷毛目陶
11	1	SD11	皿			4.6	肥前	17初	胎土目陶
11	2	SD11	皿			3.7	肥前	17前	砂目陶
11	3	SD13	皿	11	2.9	4.1	越中瀬戸	17前	鉄釉陶
11	4	SD13	碗	9.6			肥前	17前	染付磁
11	5	SD13	皿	12.1	3.1	5.4	肥前	17前	砂目陶・溝縁
11	6	SD16	碗			4.7	肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
12	1	SD17	碗	9.4	5.9	4.8	肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
12	2	SD17	碗			5	肥前	17後	染付磁
12	3	SD17	碗			4.8	九谷	17後	染付磁
12	4	SD17	碗	9.4	7.3	5	九谷	17後	白磁
12	5	SD17	碗			5.1	肥前	17前	白磁
12	6	SD17	碗			4.7	肥前	17後～18前	京焼風陶
12	7	SD17	皿	12.4	2.9	4.8	肥前	17前	砂目陶・溝縁
12	8	SD17	皿	13.1	3.3	5.4	肥前	17前	砂目陶・溝縁
13	9	SD17	甕				肥前	17初	鉄釉陶
13	10	SD17	甕	14			肥前	17初	鉄釉陶・漆補修痕
13	11	SD17	擂鉢				肥前	17前	陶
13	12	SD17	擂鉢				肥前	17前	陶・底径12.2
13	13	SD17	碗				中国	15後～16前	青磁
14	1	SD18	碗	9	6.5	4.9	肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
14	2	SD18	碗	11.3	5	4	肥前	18後	染付磁・蛇の目釉剥ぎ・コンニャク印判
14	3	SD18	皿	11.4	3.5	3.7	肥前	17末～18前	染付磁・蛇の目釉剥ぎ
14	4	SD18	皿	12.3	3.8	4.3	肥前	17末～18前	染付磁・蛇の目釉剥ぎ
14	5	SD18	皿	12.8	3.9	4.2	肥前	17末～18前	染付磁・蛇の目釉剥ぎ
14	6	SD18	皿	12.1	4.4	4.1	肥前	18前～中	錆絵陶・京焼風
14	7	SD18	小碗	6.5	3.8	2.6	肥前	18前	染付磁・型紙摺
14	8	SD18	皿	8.3	1.6		在地	18	土師器・油煤痕
15	1	SD19	碗			4.4	肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
15	2	SD19	皿	13.1	2.7	8	肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
15	3	SD19	碗	10	7	4.7	肥前	18前	刷毛目陶
15	4	SK19	皿			4.3	肥前	18前～中	錆絵陶・京焼風
15	5	SD19	鉢			7.3	肥前	18	刷毛目陶・蛇の目釉剥ぎ
15	6	SD19	碗			4.1	高取	18	鉄釉陶
15	7	SD19	片口	17.4					灰釉陶
16	8	SD19	甕	24			越前	17前～中	塗り土
16	9	SD19	擂鉢	31.5			肥前	18	鉄釉陶
16	10	SD19	擂鉢			13	肥前	18	鉄釉陶
16	11	SD19	甕				越前	17	底径12.2
16	12	SD19	甕				珠洲	14	漆補修痕
16	13	SD19	行火				在地		凝灰岩・底幅15.5
17	1	SD23	皿			5.1	肥前	17初	胎土目陶
17	2	SD24	鉢			8.5	肥前	17初	胎土目陶・鉄絵

表３　八田中中村遺跡出土遺物観察表(2)

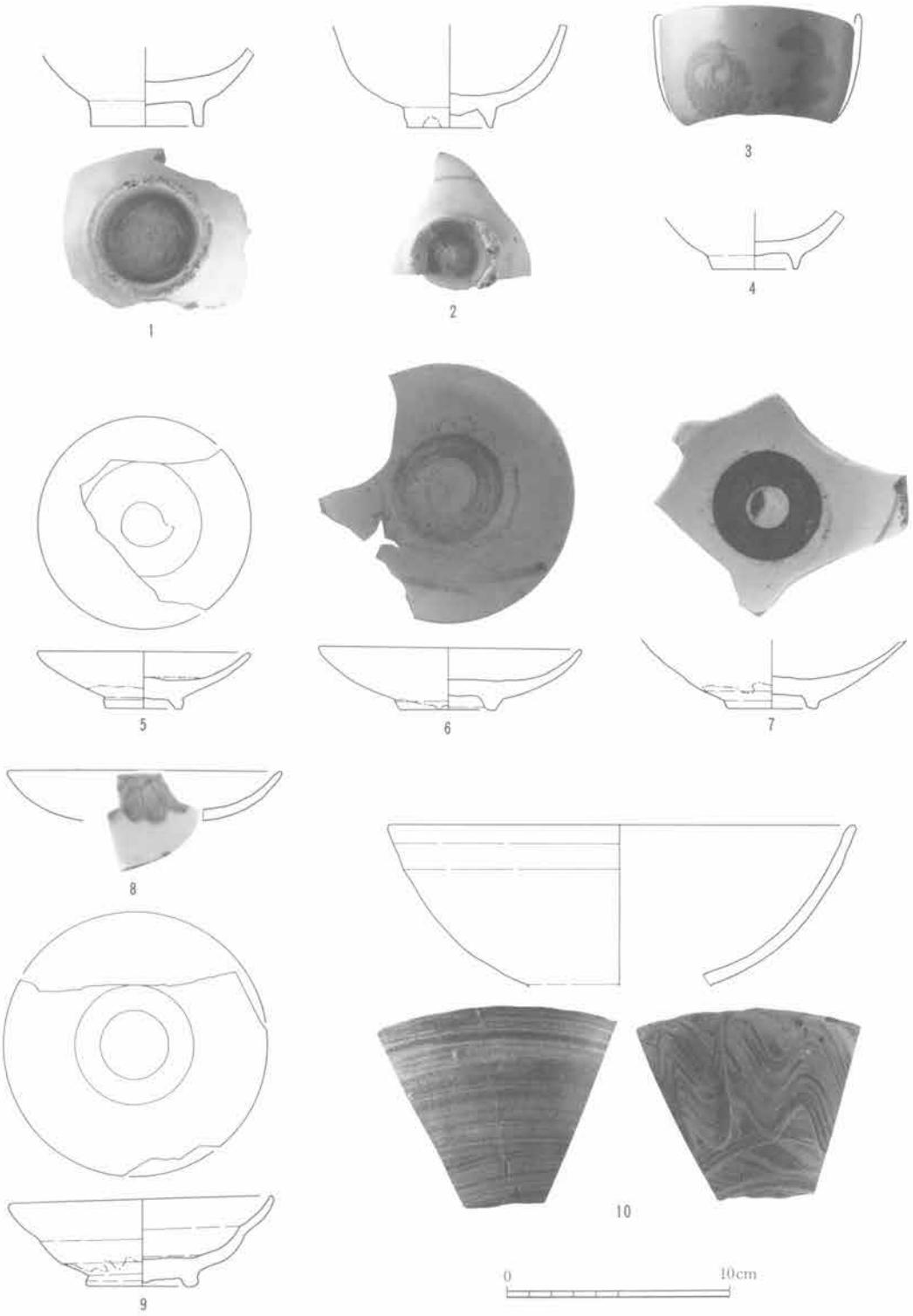
図	No.	遺構	器種	口径	器高	高台径	産地	生産年代	備考
17	3	SD24	甕	32.5			越前	16末	
17	4	SD24	瓦						丸瓦・燻焼
17	5	SD24	甕				越前	14後	
18	6	SD24	粉挽き臼				在地		臼面径28.4・厚8.5／上臼・石英質安山岩
18	7	SD24	粉挽き臼				在地		臼面径32.3・厚6.7／上臼・凝灰岩
18	8	SD24	粉挽き臼				在地		臼面径28.1・厚5.7／下臼・凝灰岩
19	9	SD24	茶臼				在地		臼面径20・厚12.5／下臼・凝灰岩
19	10	SD24	石製品				在地		底径6.6／凝灰岩
19	11	SD24	石鉢	22.2	11	9	在地		凝灰岩
19	12	SD24	砥石				在地		幅4.2・厚2／砂岩
20	1	包含層	碗	8.5	6.3	4.3	肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
20	2	包含層	碗	8.2	5.7	5.2	肥前	18前	染付磁・コンニャク印判
20	3	包含層	碗			5	肥前	17中	染付磁
20	4	包含層	碗			4.6	肥前	18前	染付陶胎
20	5	包含層	碗			3.4	肥前	18後	染付磁・コンニャク印判
20	6	包含層	皿	12.4	3.7	4.3	肥前	17末～18前	染付磁・蛇の目釉剝ぎ
20	7	包含層	皿	12.5	3.8	4.4	肥前	17末～18前	染付磁・蛇の目釉剝ぎ
20	8	包含層	碗	9.6	6.9	4.5	肥前	18	刷毛目陶
20	9	包含層	碗			4.4	肥前	17前	灰釉陶
20	10	包含層	皿			4.7	肥前	17初	胎土目陶
20	11	包含層	皿			3.2	肥前	17初	灰釉陶
20	12	包含層	皿	12.5	3.5	4.2	肥前	17前	砂目陶
20	13	包含層	皿	12.2	4.4	6.1	肥前	17前	砂目陶
20	14	包含層	皿	13.4	3.8	5	肥前	17前	砂目陶・溝縁
21	15	包含層	皿	11.6	3.5	4.5	肥前	17末～18前	銅緑釉陶・蛇の目釉剝ぎ
21	16	包含層	皿	18.8	3.4	6.5	越中瀬戸	17前	灰釉陶・印銘
21	17	包含層	皿	10.5	2.4	5.4	瀬戸美濃	16後	灰釉陶
21	18	包含層	鉢	37.8			肥前	17後～18前	櫛目陶・漆補修痕
21	19	包含層	壺	7.8					灰釉陶
21	20	包含層	片口	15.4	11.1	10.2	肥前系	17初	
21	21	包含層	甕	13.1			越前	19	塗り土
21	22	包含層	甕？				越前		塗り土・底径14
21	23	包含層	瓦						丸瓦・燻焼
22	24	SD24	甕	24.8			越前	17前	塗り土
22	25	包含層	甕	34.8			越前	17前～中	塗り土
22	26	包含層	甕	39.4			越前	16末	
22	27	包含層	擂鉢	25.8	9.6		越前	17	底径9.2
22	28	包含層	擂鉢				越前	17	底径14.6
23	29	包含層	粉挽き臼				在地		臼面径28・厚9.6／上臼・凝灰岩
23	30	包含層	粉挽き臼				在地		臼面径30・厚4.6／下臼・凝灰岩
23	31	包含層	粉挽き臼				在地		臼面径28.4・厚8.8／下臼・素粒砂岩
23	32	包含層	砥石				在地		幅4.6・厚1.4／砂岩
24	33	包含層	火輪				在地		軒先幅38.6・高(23.0)／軽石凝灰岩
24	34	包含層	水輪				在地		最大幅20.5・高（13.9）／凝灰岩
24	35	包含層	手水鉢	26			在地		凝灰岩



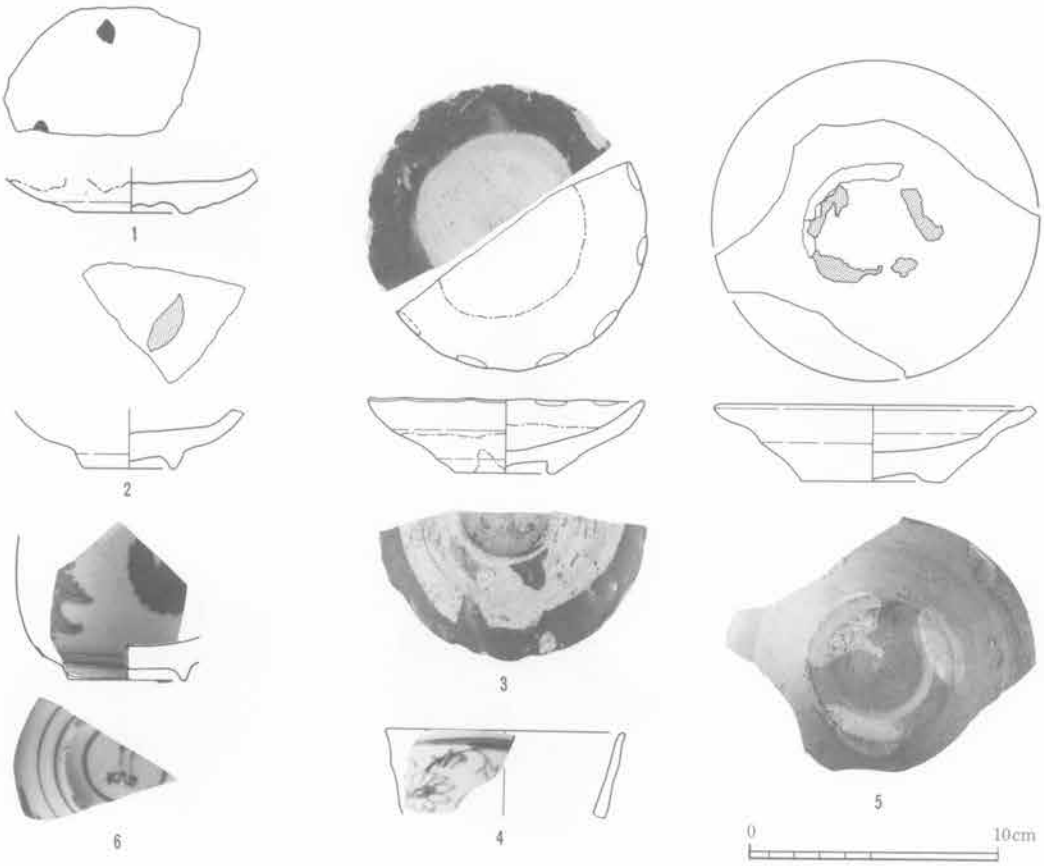
第９図　SK05(1)・SD04(2)・SD06(3)・SD07(4)　出土遺物実測図(1/3)



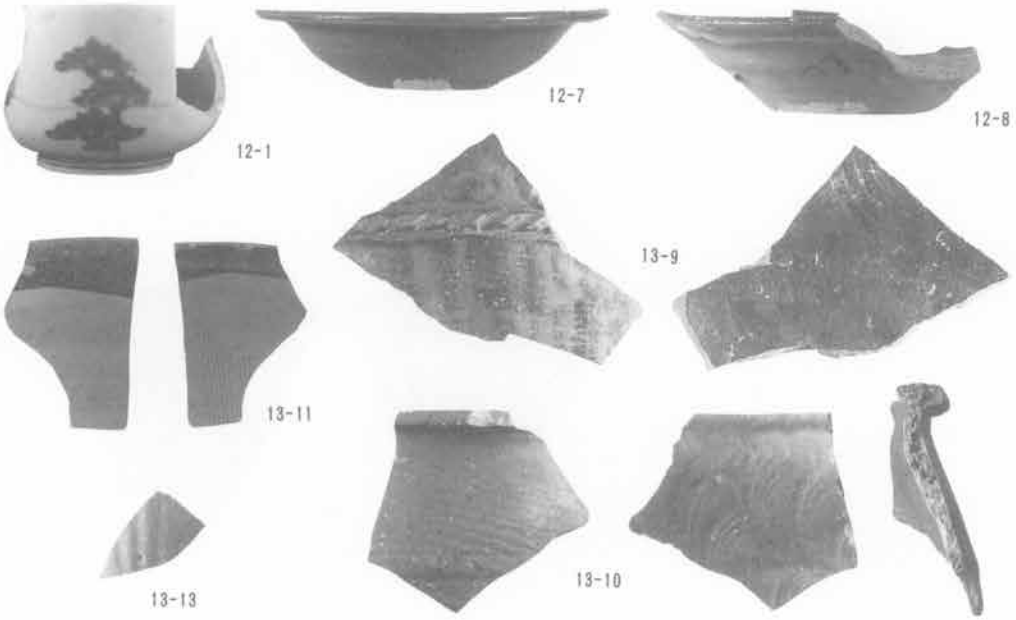
出土遺物写真



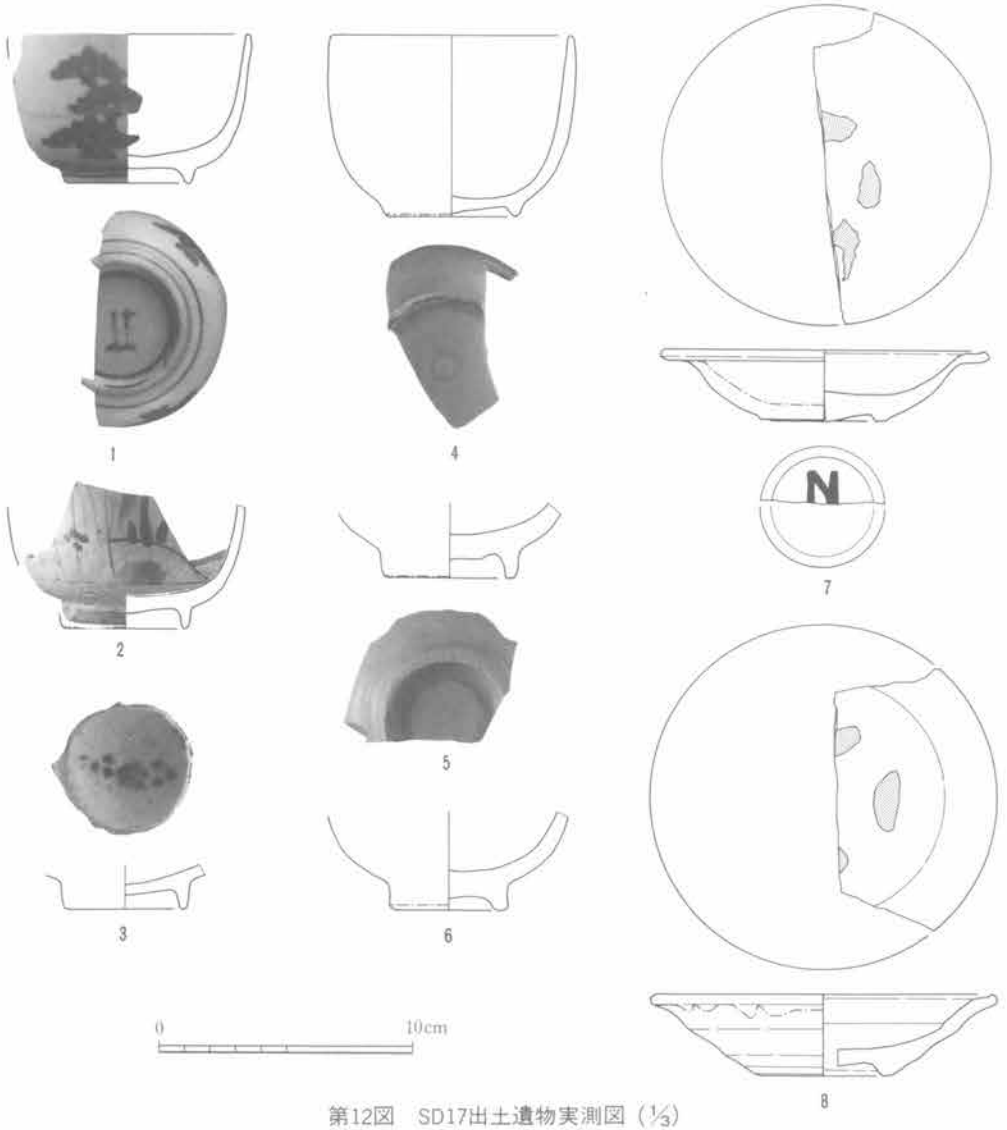
第10図　SD10出土遺物実測図(1/3)



第11図　SD11(1～2)・SD13(3～5)・SD16(6)出土遺物実測図(1/3)

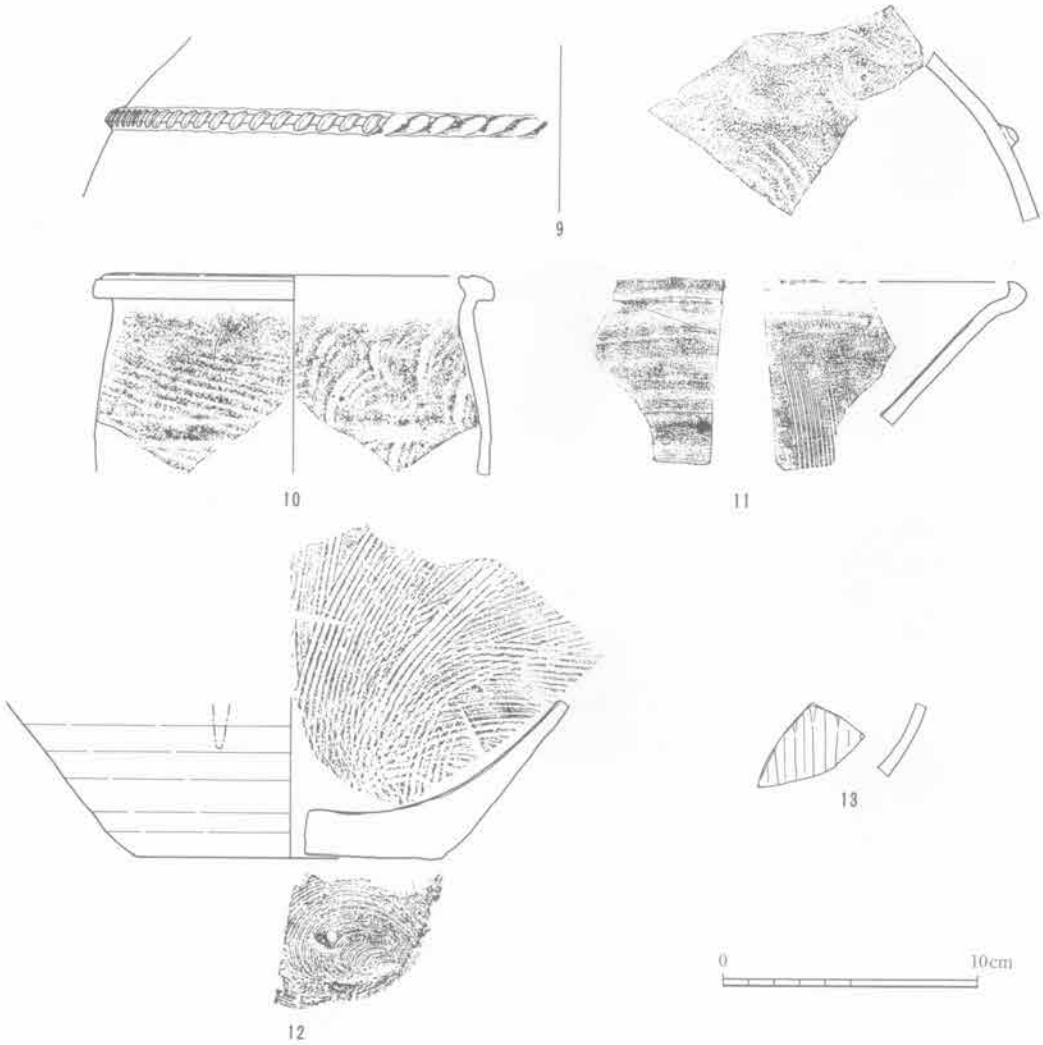


出土遺物写真

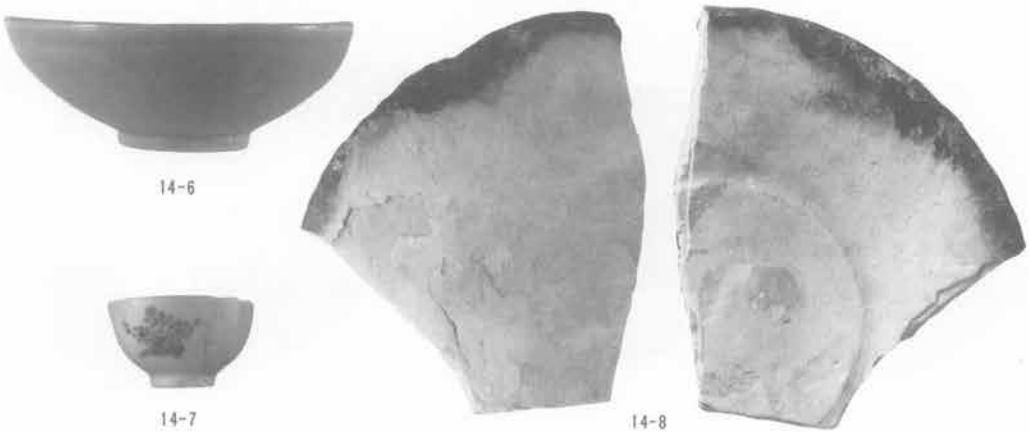


第12図　SD17出土遺物実測図（1/3）

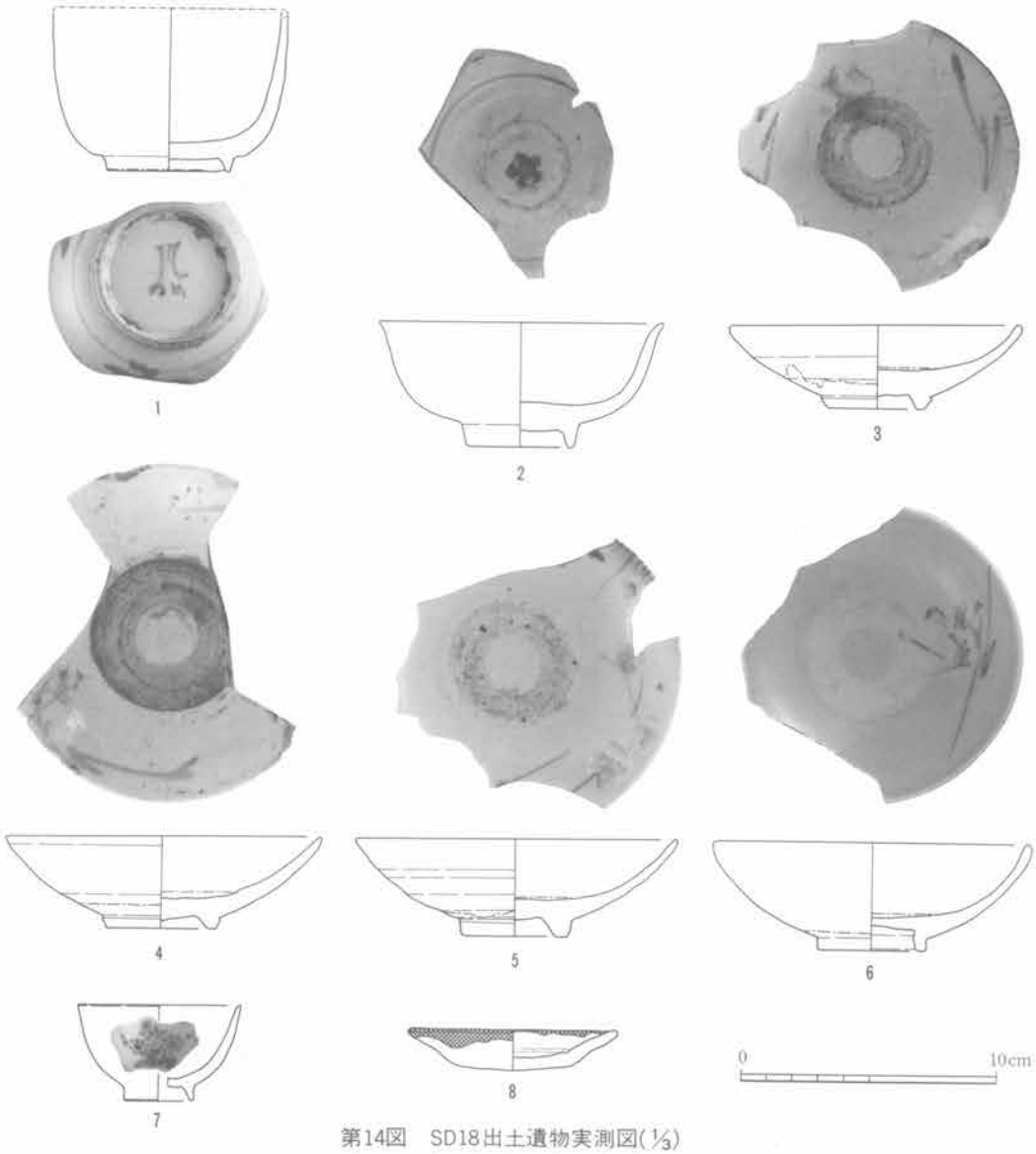
出土遺物写真



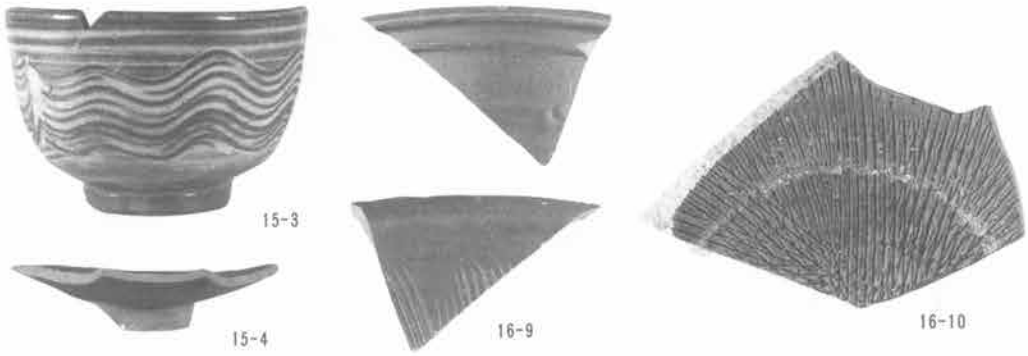
第13図　SD17出土遺物実測図（1/3）



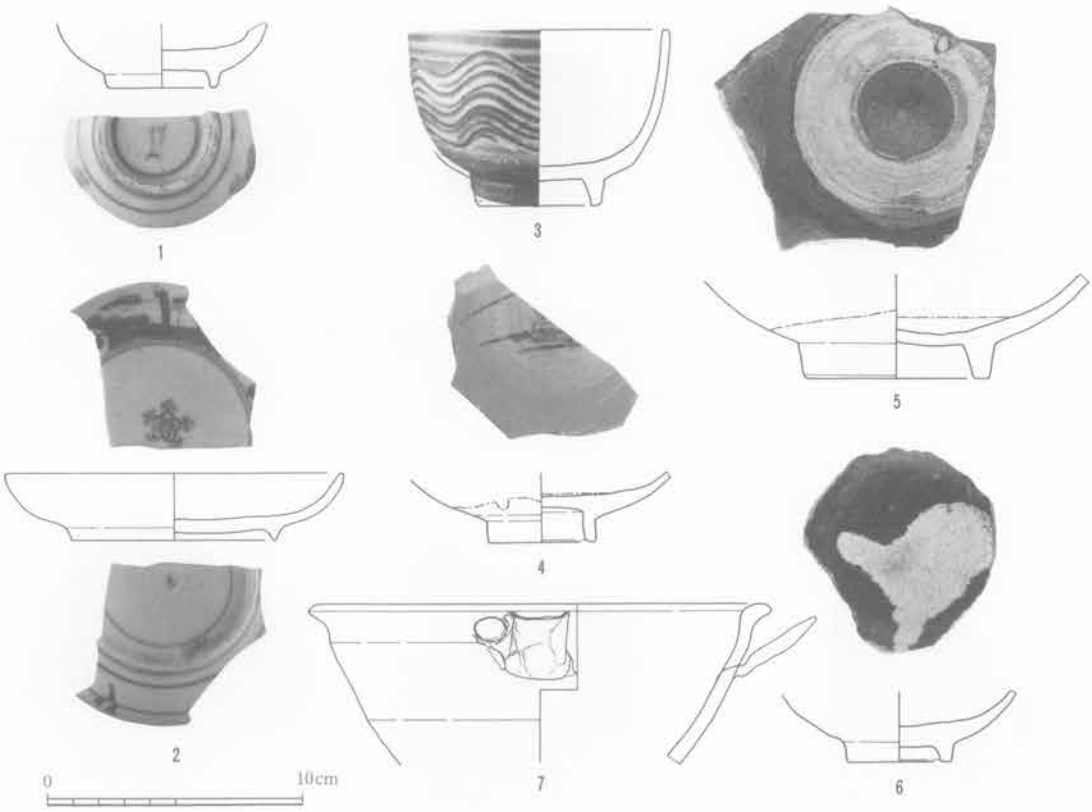
出土遺物写真



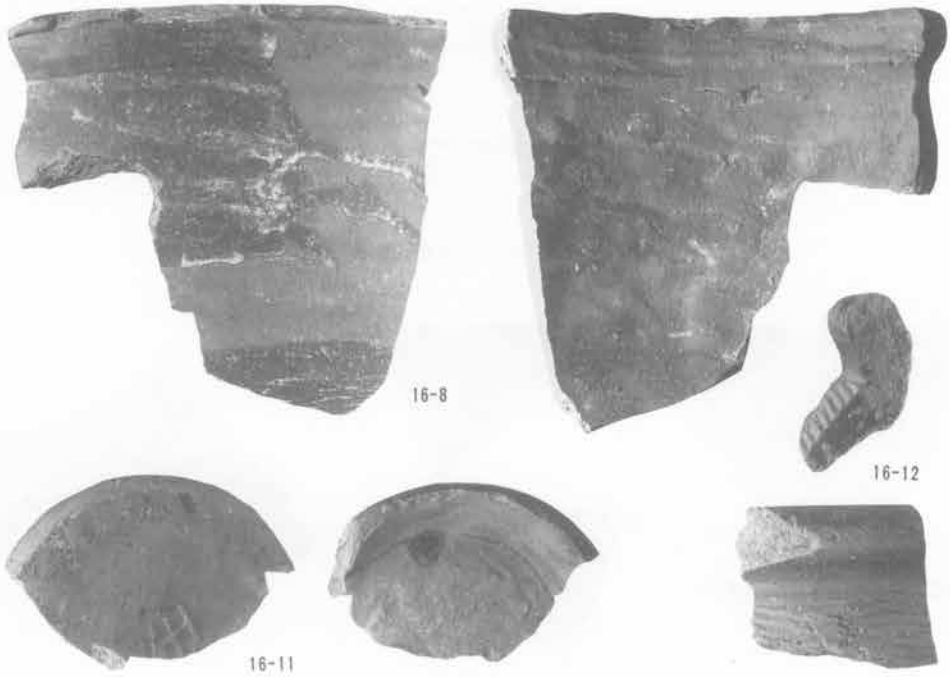
第14図　SD18出土遺物実測図(1/3)



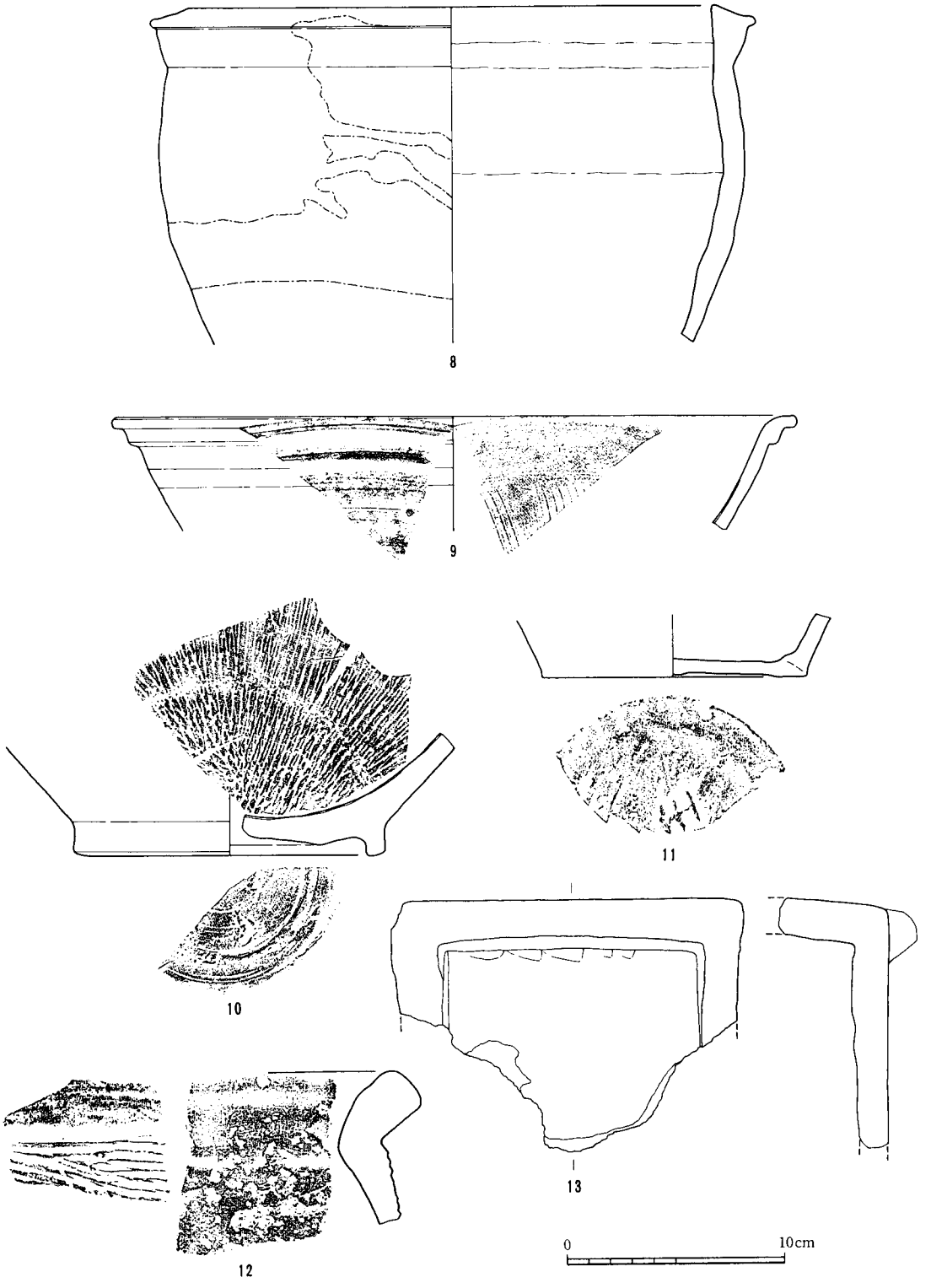
出土遺物写真



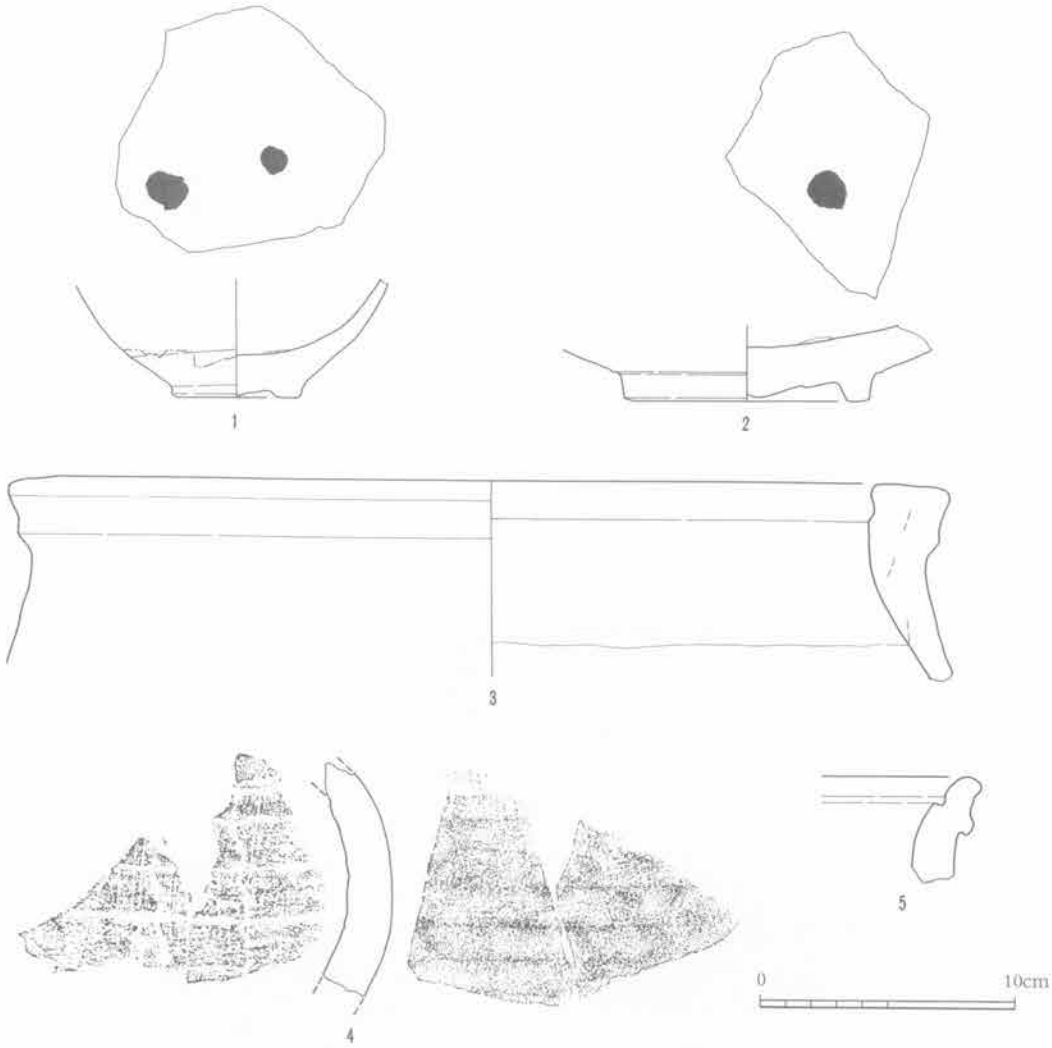
第15図　SD19(1～3,5～7)・SK19(4)出土遺物実測図（1/3）



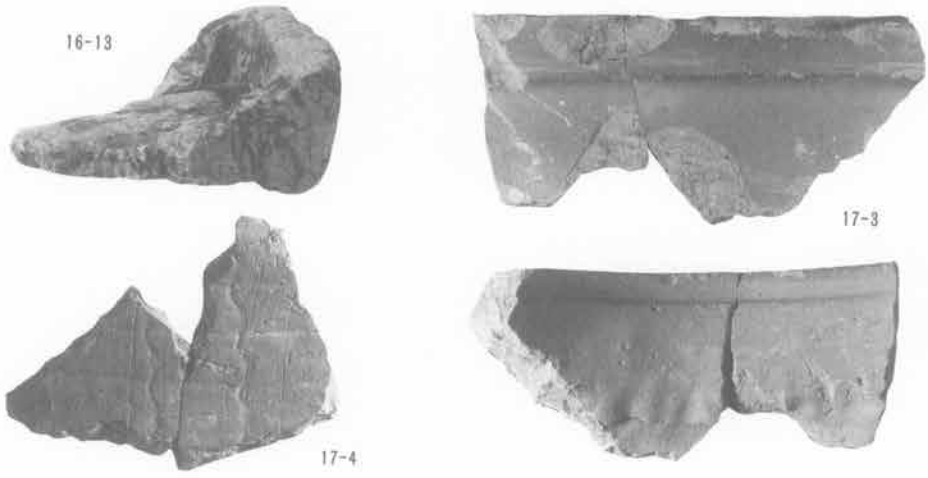
出土遺物写真



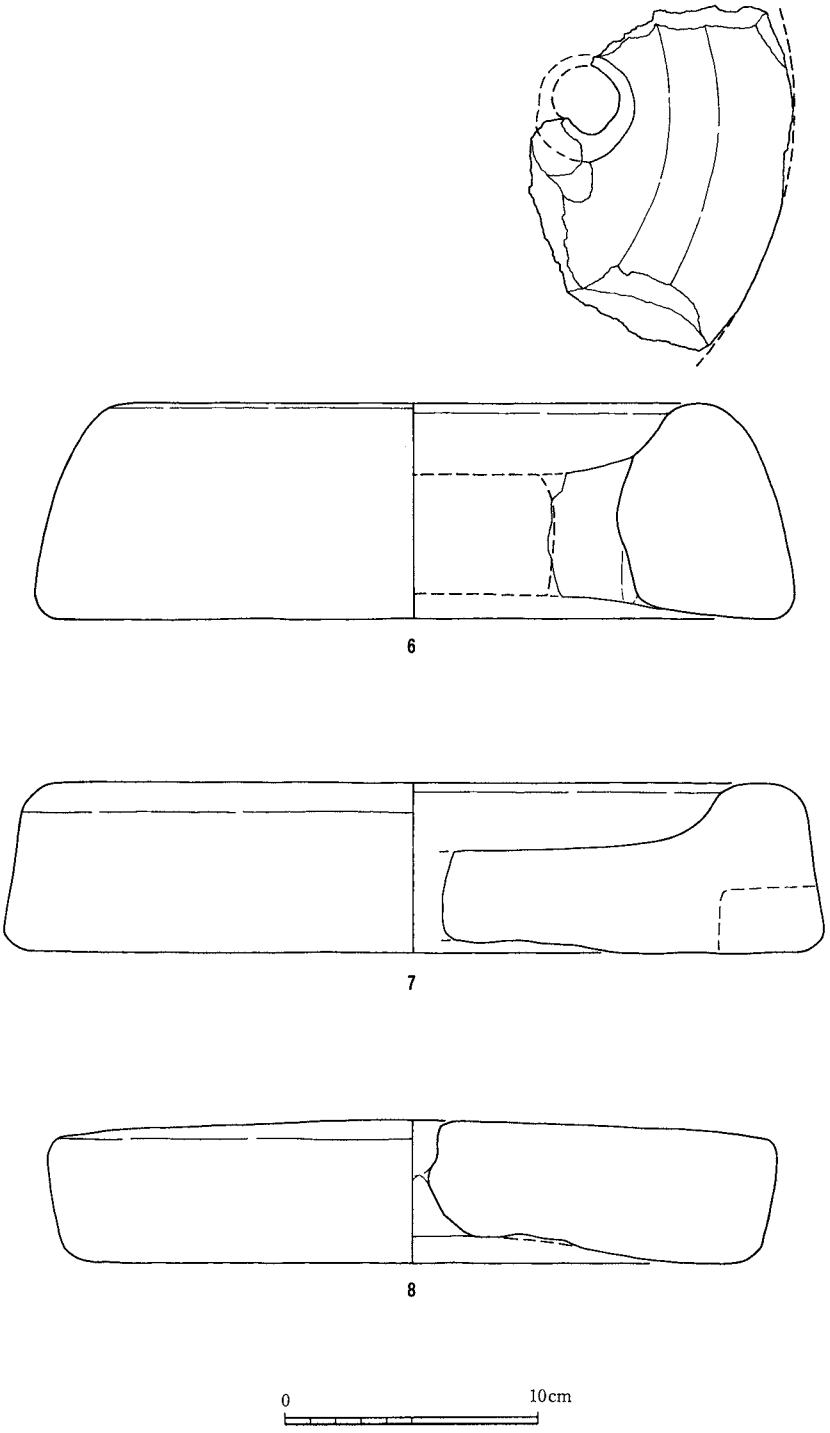
第16図　SD19出土遺物実測図（⅓）



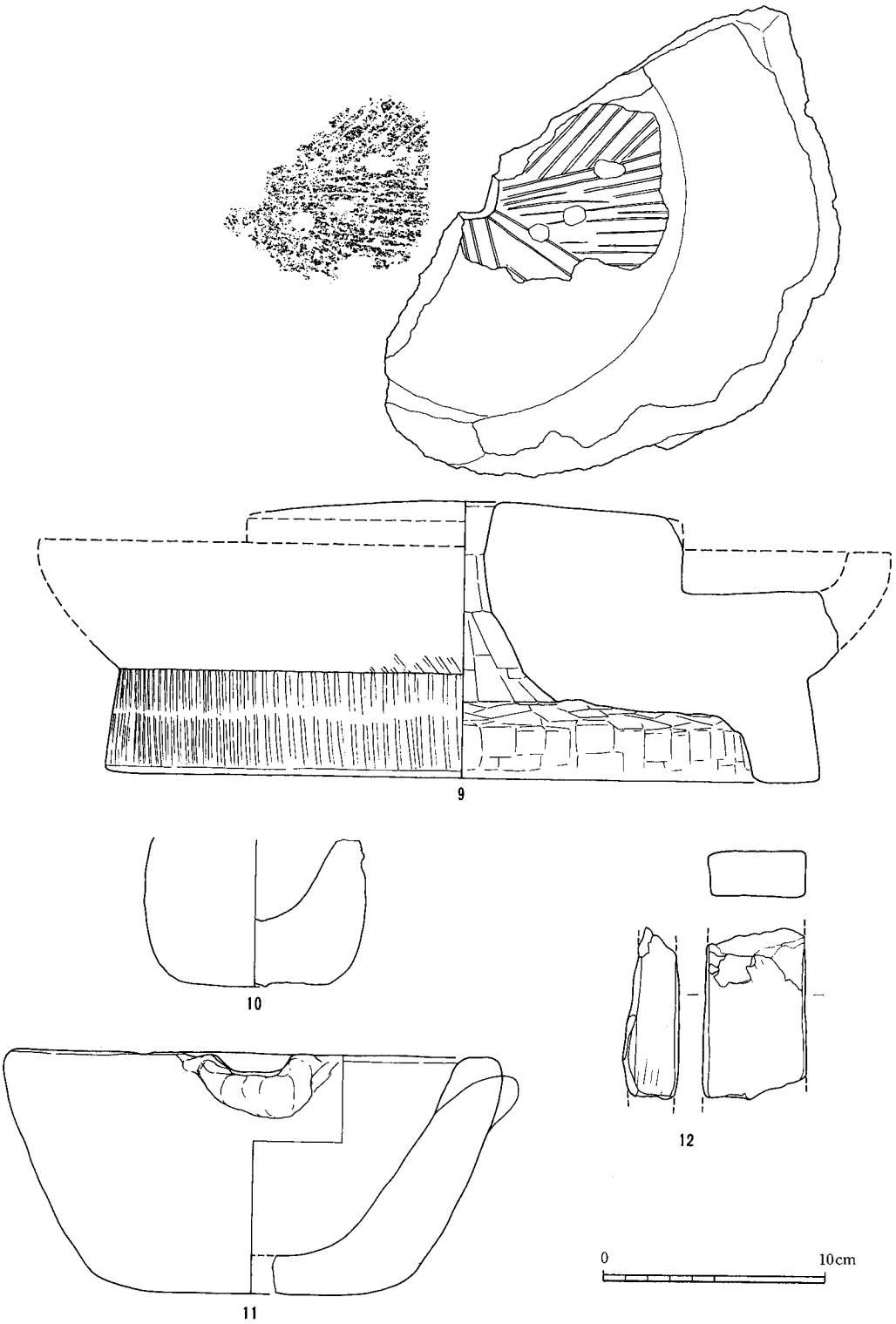
第17図　SD23(1)・SD24(2～5)出土遺物実測図（1/3）



出土遺物写真



第18図　SD24 出土遺物実測図（⅓）



第19図　SD24出土遺物実測図（1/3）

18-6

18-8

18-7

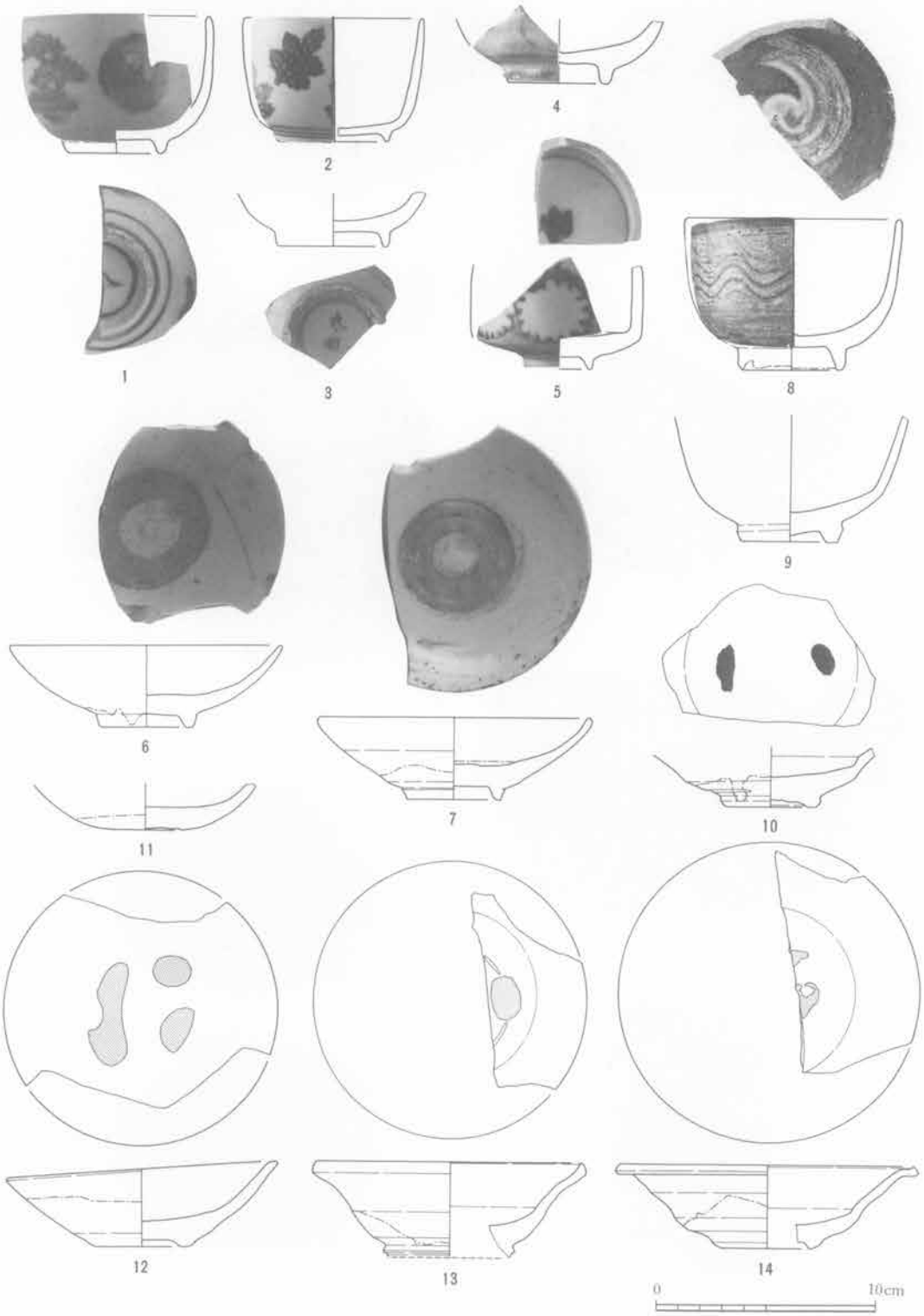
19-9

19-11

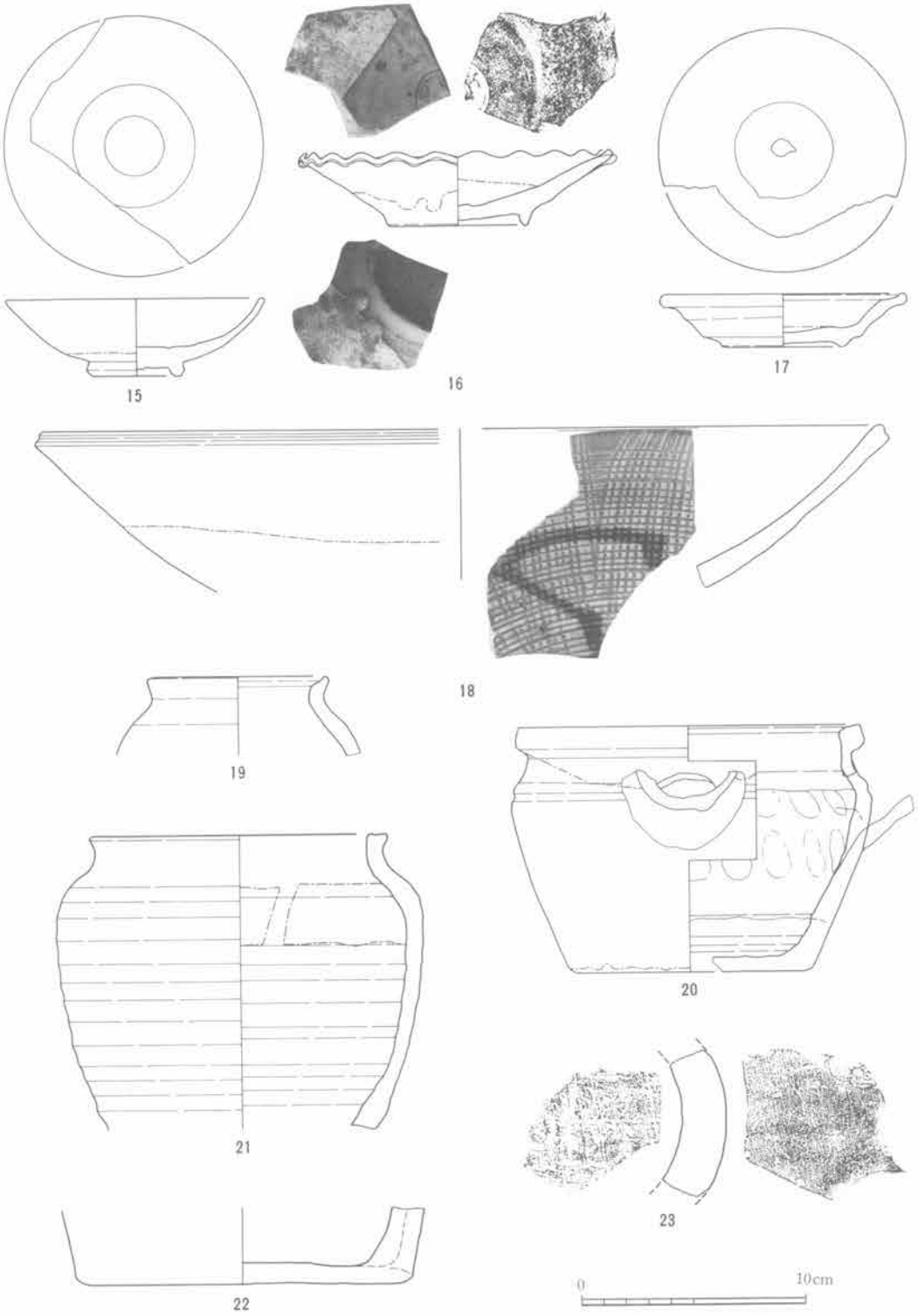
19-12

19-10

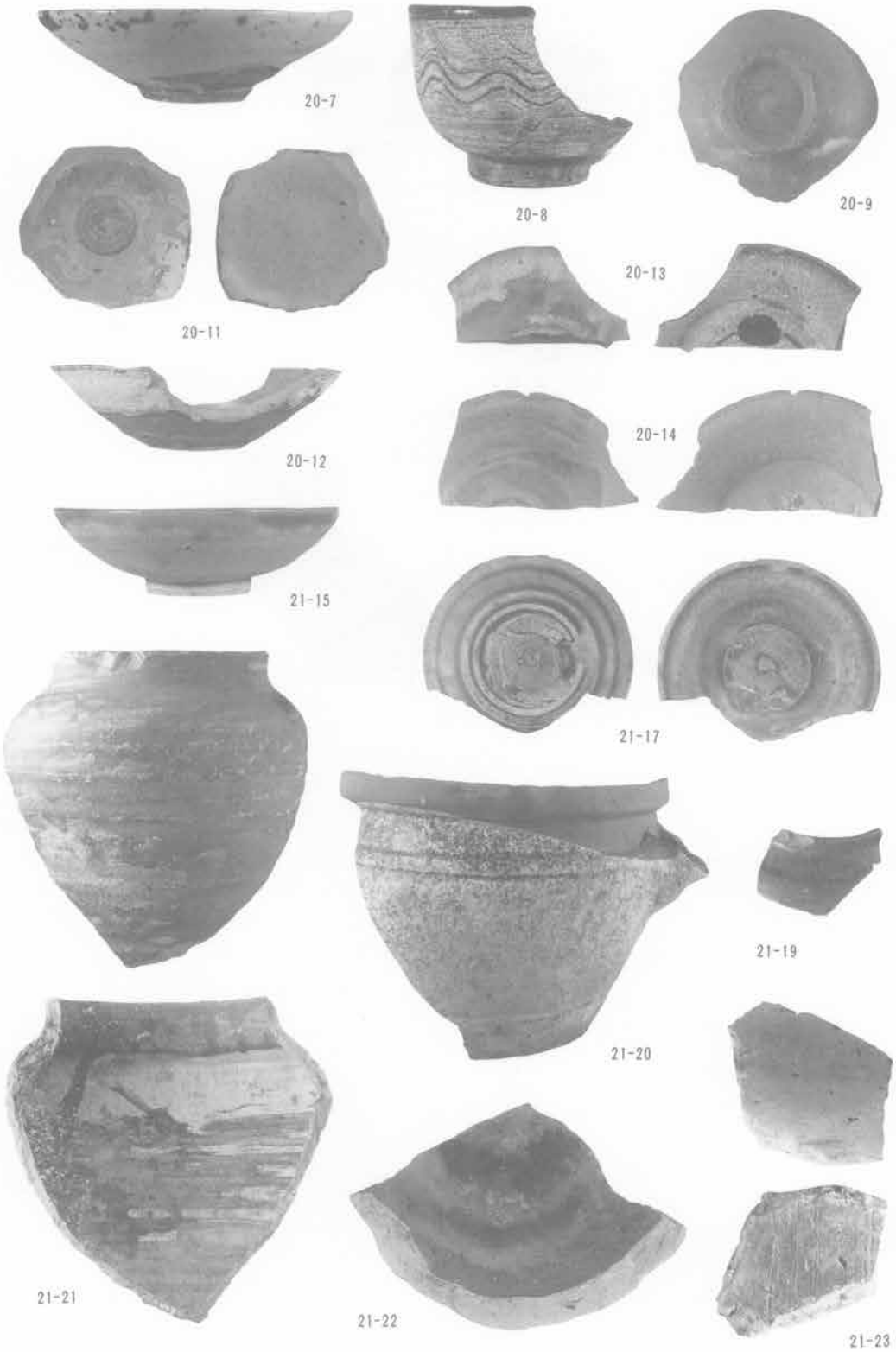
出土遺物写真



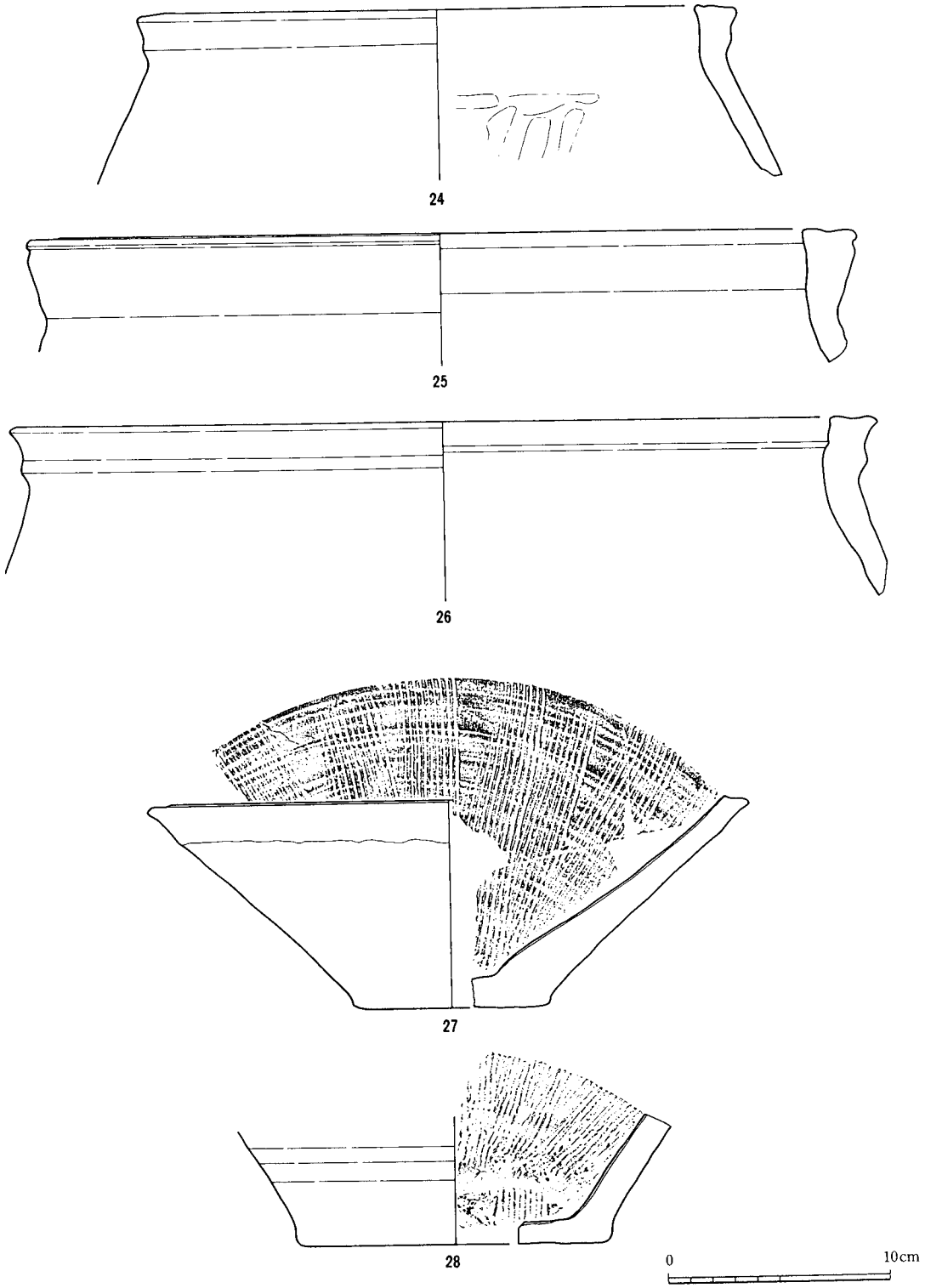
第20図　包含層出土遺物実測図（⅓）



第21図　包含層出土遺物実測図（⅓）


20-7
20-8
20-9
20-11
20-13
20-12
20-14
21-15
21-17
21-19
21-20
21-21
21-22
21-23

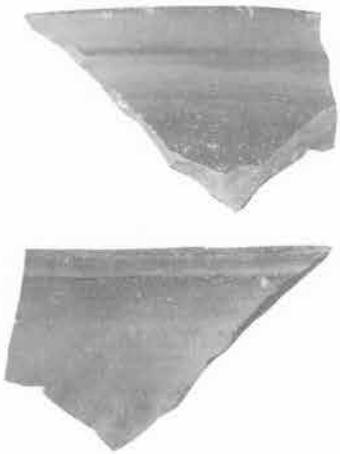
出土遺物写真



第22図　SD24(24)・包含層(25～28)出土遺物実測図（1/3）

22-24

22-25

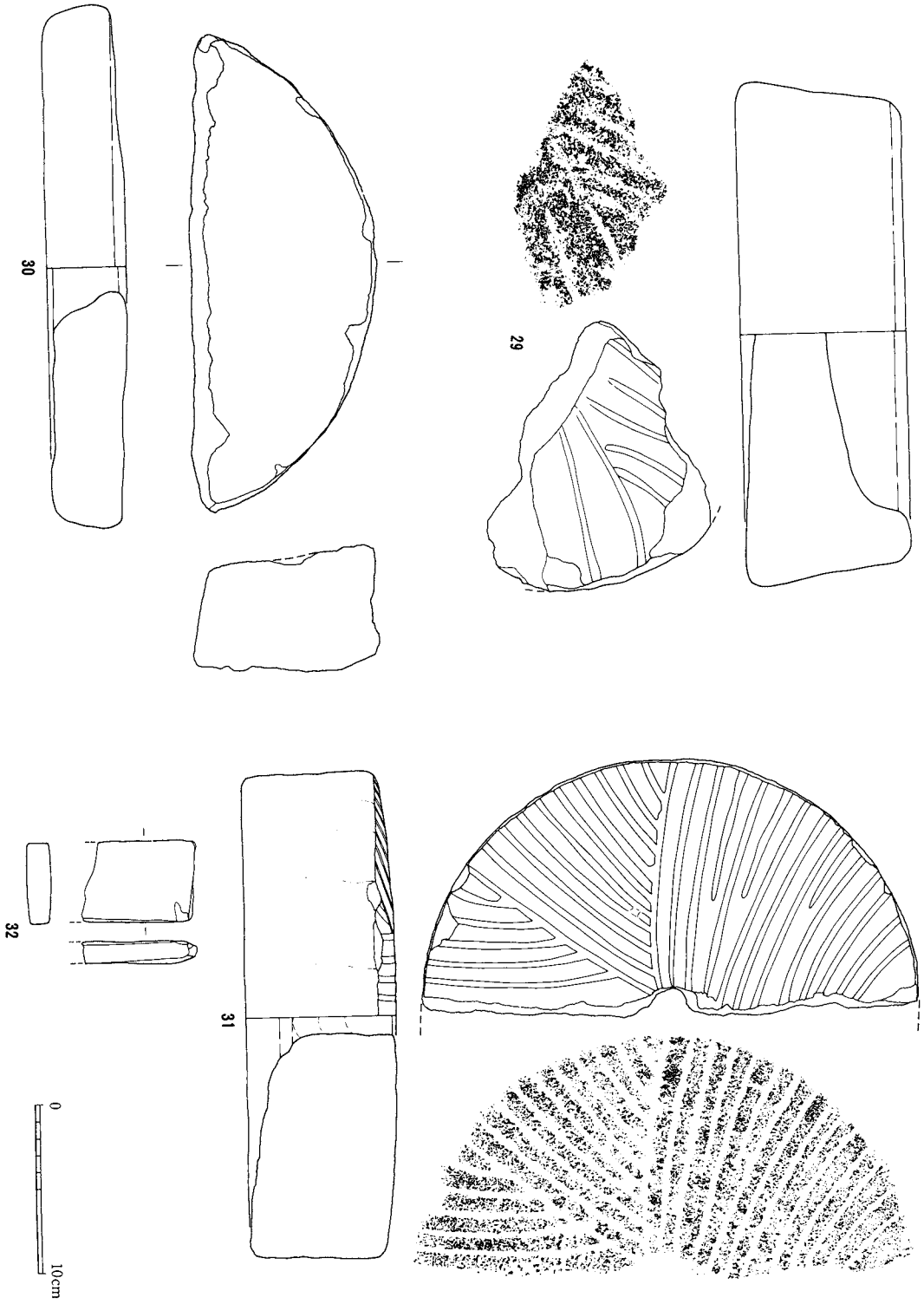


22-26

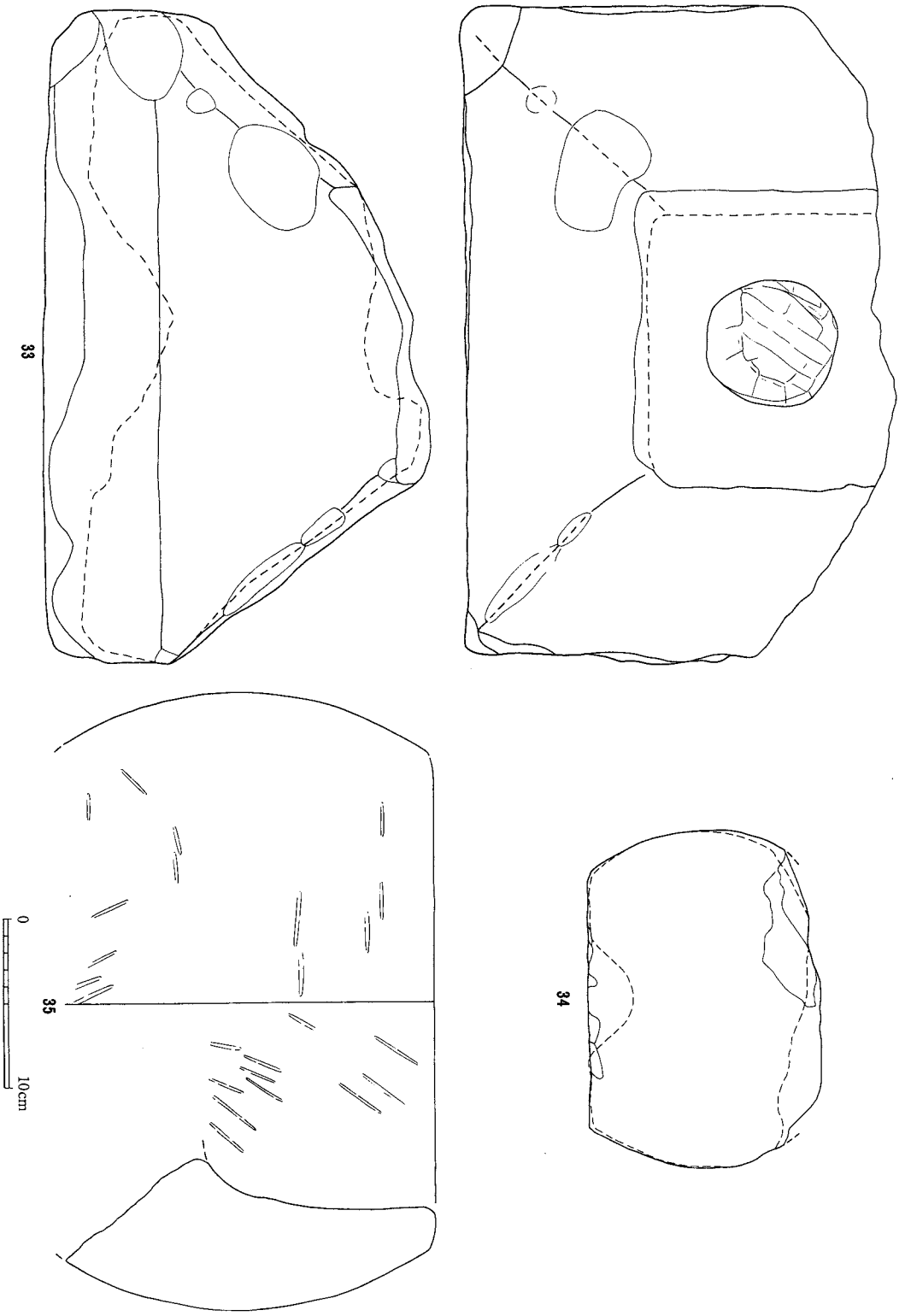
22-27

22-28

出土遺物写真



第23図　包含層出土遺物実測図（1/4）



第24図　包含層出土遺物実測図（¼）

23-29

23-32

24-35

23-31

24-34

24-33

出土遺物写真

調査区北部（南から）

SD 08北の柱穴群（南から）

図版 2

SD 03, 04（北から）

SD 08～10（北から）

SD 17、18（北から）

調査区南部（北から）

図版 4

調査区全景（南から）

調 査 風 景

八田中アレチ遺跡発掘報告

1　調査区の位置

八田中アレチ遺跡は、松任市中新保町の南部に位置する。周辺の海抜は８ｍ前後で、遺跡は耕作土の直下で検出している。調査は1987（昭和62）年５月18日～26日にかけておこない、調査面積は約120㎡である。1986年度に実施した分布調査で、中新保町の周辺で広範囲に遺跡包含層を確認し、田面については盛土工法で遺跡を保護することとし、今回報告する水路部分について発掘調査を行なうこととした。

2　主な遺構

調査区は県道松任・宇ノ気線に接する水田から東西方向に約60ｍ設定し、幅２ｍで掘削した。調査面積は約120㎡である。検出した主な遺構は、溝と谷状地形である。

ＳＤ01　幅70㎝・深さ20㎝の箱掘りで、東西に350㎝伸びて北に向かって屈曲している。埋土は黒褐色土である。

ＳＤ02　幅50㎝・深さ20㎝の南北方向に走る溝で、埋土は灰褐色を呈する粗砂層である。

ＳＤ03　幅300㎝前後で、深さ70㎝の河道跡と思われる遺構。埋土は茶灰褐色粗砂層の下に暗褐色の粗砂混じり粘土層が堆積している。下層から、ヒョウタンや条痕文土器片が出土している。

ＳＤ04　幅60㎝・深さ30㎝の南北方向に走る溝で、埋土は灰色土である。溝の東肩をＳＤ05が切込んでいる。

ＳＤ05　幅170㎝・深さ50㎝南北方向に走る溝で、埋土は褐色土・灰色土の順に堆積している。

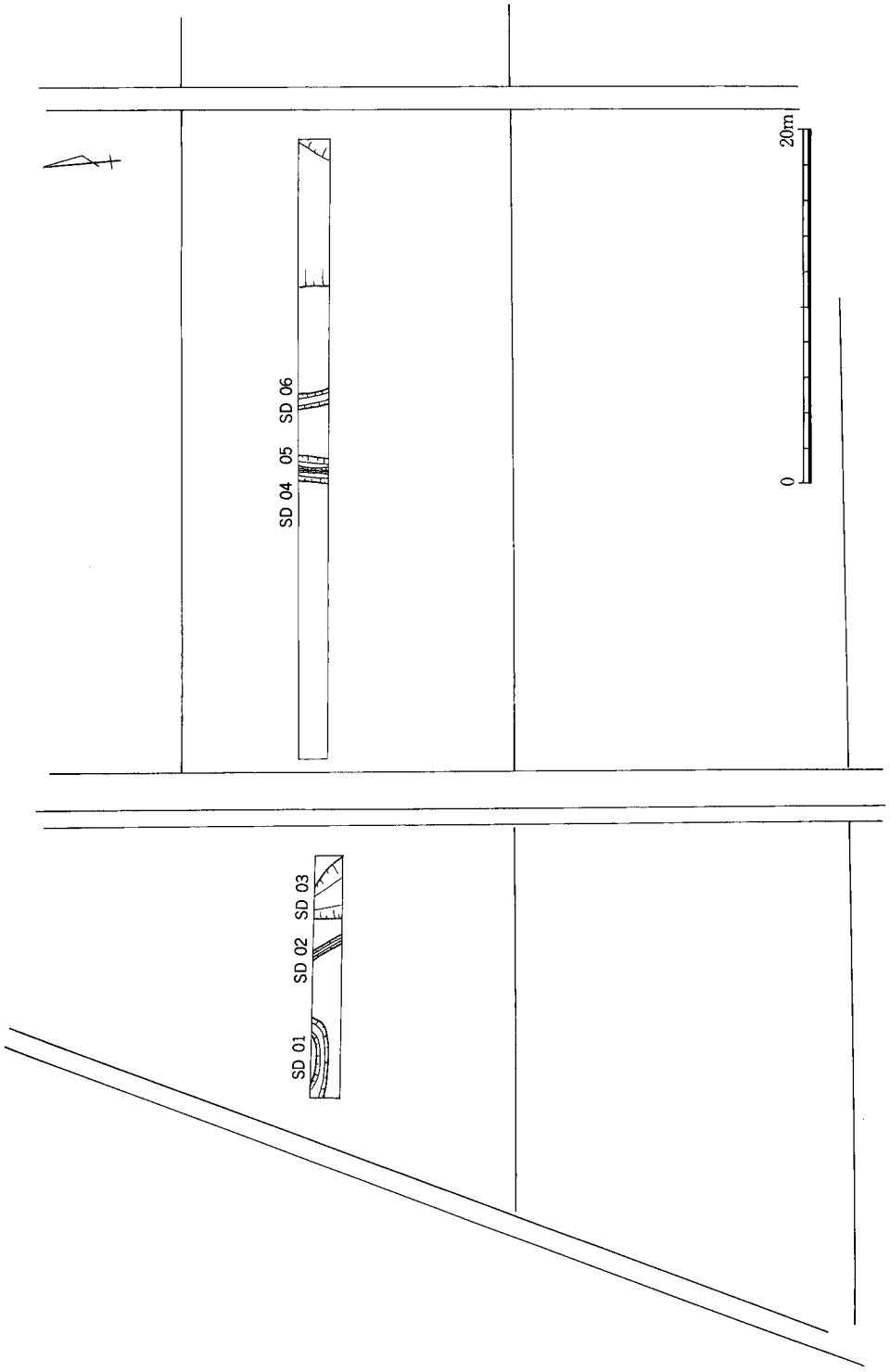
ＳＤ06　幅70㎝・深さ30㎝の南北方向に走る溝で、埋土は暗灰褐色土である。

調査区の東端では、灰褐色土の地山層が次第に深くもぐっていき、鞍部か谷状地形となっているようである。

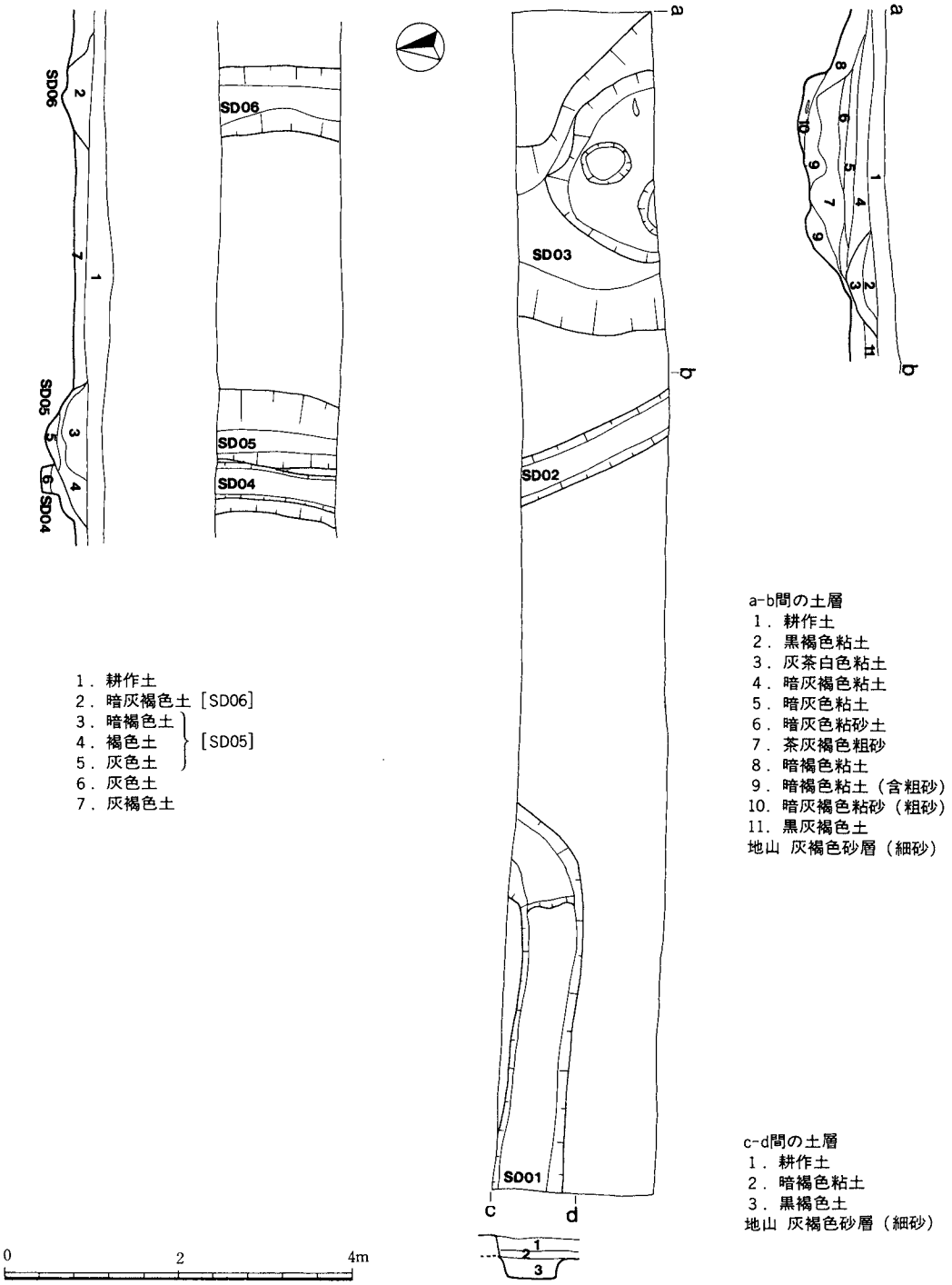
3　調査のまとめ

今回の調査は小規模なものであり、遺跡の性格を把握するのは困難である。南北に伸びるＳＤ04～06の溝状遺構は、近代の耕地整理以前の溝と思われる。ＳＤ03からは条痕文土器が出土しており、縄文時代晩期ないし弥生時代前期から中期初頭に比定できる。

第１図　八田中アレチ遺跡の調査区位置図



第２図　八田中アレチ遺跡調査区実測図



第３図　八田中アレチ遺跡遺構図

表土除去作業（東から）

遺構検出状況（東から）

図版 2

SD 01（東から）

SD 02（西から）

SD 03（東から）

SD 04・05（南から）

SD 04・05とSD 06（西から）

図版　4

調査区東部（西から）

調査区全景（東から）

八田中ヒエモンダ遺跡

例　　言

1　本編は県営ほ場整備事業旭第２地区に係る石川県松任市八田中ヒエモンダ遺跡発掘調査報告書である。

2　調査は石川県農林水産部耕地整備課との協議に基づき、同課より依頼を受けた石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地調査は昭和63年９月８日から同年11月30日にかけて実施した。調査は福島正実（石川県立埋蔵文化財センター主事）が担当した。

4　調査費用は県耕地整備課が負担したほか、文化庁補助金の交付を受けた。

5　遺物整理（洗浄、記名・分類・接合、復元、実測、トレース）は（社）石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

6　本編の執筆は福島が行った。なお、挿図、図版の指示は以下の通りである。

(1)　方位は公共座標系による。

(2)　遺物図版の縮尺は不同である。

(3)　遺構記号を使用する場合は以下の通りとした。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＩ：竪穴　ＳＸ：その他の遺構

7　本発掘調査で出土した埋蔵文化財および記録資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯と経過 …… 49

Ⅱ　調査の概要 …… 49

Ⅲ　遺構、遺物 …… 52

挿図目次

第１図　八田中ヒエモンダ遺跡周辺地形図〔１／3,000〕（県営ほ場整備事業着工前）… 50

第２図　各調査区位置図〔１／3,000〕（県営ほ場整備事業による新区画）…… 51

第３図　Ａ，Ｃ調査区全体図集成〔１／300〕（網線部は旧河道）…… 53

第４図　Ｂ調査区全体図集成〔１／300〕（網線部は旧河道）…… 54

第５図　Ａ調査区遺構図〔１／150〕…… 55

第６図　Ｂ調査区遺構図(1)〔１／150〕…… 56

第７図　Ｂ調査区遺構図(2)〔１／150〕…… 57

第８図　Ｂ調査区遺構図(3)〔１／150〕…… 58

第９図　Ｂ調査区出土遺物実測図(1)〔１／３〕…… 63

第10図　B調査区出土遺物実測図(2)〔1／3〕…… 64
第11図　B調査区出土遺物実測図(3)〔3／3〕…… 65
第12図　B調査区出土遺物実測図(4)〔1／3〕…… 66
第13図　B調査区出土遺物実測図(5)〔3／3〕…… 67
第14図　B調査区出土遺物実測図(6)〔1／3〕…… 68
第15図　B調査区出土遺物実測図(7)〔1／3〕…… 69
第16図　B調査区出土遺物実測図(8)〔2／3〕…… 70
第17図　A，B調査区出土遺物実測図〔1／3〕…… 71

図版目次

図版1上　A調査区全景（南端（A－0付近）より撮影）
図版1下　A調査区全景（北端（A－125付近）より撮影）
図版2上　SD－A2～4，SK－A5～8（北（A－35付近）より撮影）
図版2下　SK－A1～4，SD－A1〔旧河道〕（南（A－35付近）より撮影）
図版3上　B調査区北部近景（南（B－165付近）より撮影）
図版3下　B調査区北部付景（北（B－0付近）より撮影）
図版4上　SD－B3〔旧河道〕（南（B－85付近）より撮影）
図版4下　SD－B3〔旧河道〕左岸（南（B－65付近）より撮影）
図版5上　SD－B3〔旧河道〕左岸（北（B－55付近）より撮影）
図版5下　SD－B5〔旧河道〕右岸、SD－B6・6b（北（B－133）より撮影）
図版6上　B調査区中央部近景（南（B－270付近）より撮影）
図版6下　B調査区南部近景（北（B－283付近）より撮影）
図版7上　B調査区中央部付景（北（B－170付近）より撮影）
図版7下　SK－B7・8，SD－B15，SX－B8等（北（B－180付近）より撮影）
図版8上　SK－B10・11（北（B－222付近）より撮影）
図版8下　SK－B12・13，SD－B25，27等（北（B－232付近）より撮影）
図版9上　SK－B14（西（B－266付近）より撮影）
図版9下　SK－B16（北（B－277付近）より撮影）
図版10上　SK－B17・18，SD－B33（東（B－288付近）より撮影）
図版10下　SK－B20（西（F－297付近）より撮影）
図版11上　SK－B21・21b，SD－B34（北東（F－301付近）より撮影）
図版11下　SK－B22・23a～c等（西（F－308付近）より撮影）
図版12上　SK－B30（北東（F－273付近）より撮影）
図版12下　SI－B1（南（F－284付近）より撮影）
図版13上　SD－B17～20，SK－B11，SX－B5～7（南（F－223付近）より撮影）
図版13下　SD－B17～19，SX－B5（北（F－197付近）より撮影）
図版14上　SD－B31（東（F－269付近）より撮影）
図版14下　B－19G．PitB－4他（北東（F－193付近）より撮影）
図版15上　C調査区全景（東端（C－0付近）より撮影）
図版15下　SD－C1・2（南（C－52付近）より撮影）
図版16　B調査区出土遺物(1)
図版17　B調査区出土遺物(2)
図版18　B調査区出土遺物(3)
図版19　B調査区出土遺物(4)
図版20　A，B調査区出土遺物

Ⅰ　調査の経緯と経過

石川県内でも有数の米作地域である松任市一帯では、昭和50年代末頃から県営ほ場整備事業が積極的に施工されてきた。本遺跡の位置する同市八田中町地内も同事業旭第２地区八田中工区として事業が具体化し、昭和62年夏に施工予定区域内の埋蔵文化財分布調査について県農林水産部耕地整備課から石川県立埋蔵文化財センターに依頼がなされた。当センターは同年９月30日に施工予定区域内の試掘を実施した。区域内には周知の埋蔵文化財包蔵地は所在していなかったが、調査の結果、施工予定地には新たな埋蔵文化財包蔵地「八田中ヒエモンダ遺跡」が広範囲に所在することを確認し、工事主体者である耕地整備課、石川県松任土地改良事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、排水路については事前の発掘調査、用水路・未舗装の農道・ほ場については盛土による田面高の調整等によって極力埋蔵文化財の保存を図る方向で調整がなされた。

排水路予定地の発掘調査は翌昭和63年に、同課より依頼を受けた当センターが実施した。現地調査は、同年９月８日から同年11月30日にかけて1,070㎡を対象（Ａ～Ｃ調査区）に実施した。また、出土遺物の整理、記録資料の整理を平成元年度までに実施した。

Ⅱ　調査の概要

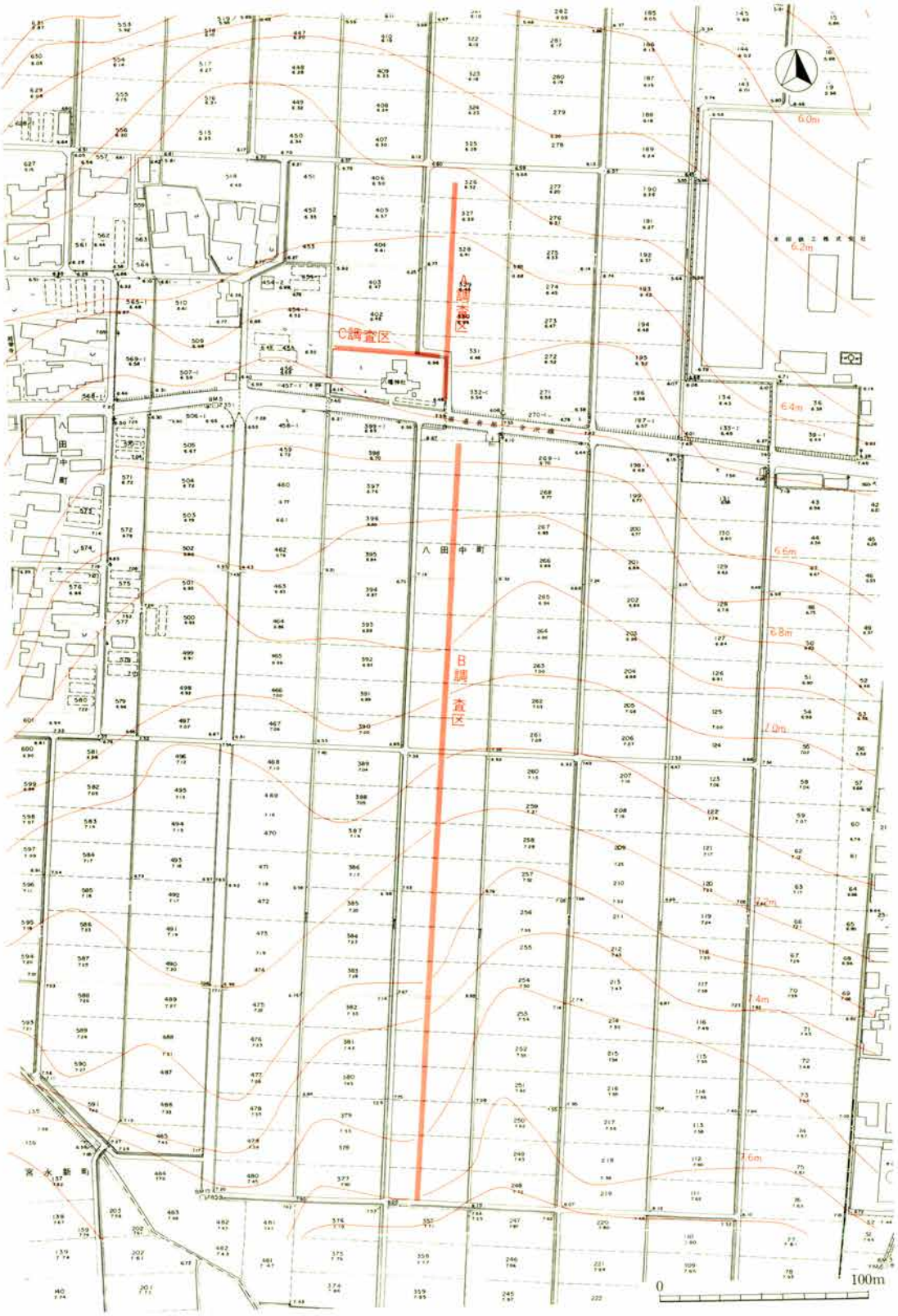
1　調査区の名称、グリッドの設定

調査区域は水路10号、同排水路の下流側で一般県道倉部金沢線を挟んだ形で計画されている排水路７号、および八幡神社敷地裏の排水路８号のそれぞれ全域を対象とした。調査幅は掘削工事幅を勘案し、２ｍとした。また、調査区域が狭長なために、排水路番号に対応する形で調査区を分割し、ＡからＣの３調査区に区分した。各調査区の基軸は排水路中心線とし、任意に設けた起点から10ｍ単位で区分するグリッドを設定した。

2　遺跡の範囲、立地

発掘調査区域は本遺跡のほぼ中央部を南北方向に貫く位置にあたっていた。調査の結果、Ａ，Ｃ調査区では江戸時代頃の土坑、溝等の他、時期未確定の旧河道が検出された。同調査区は近世集落跡縁辺部にあたるものと推定される。Ｂ調査区では、北端部を除いた大部分で弥生時代中期の集落跡に伴う土坑、溝、竪穴等が検出された。また、縄文時代晩期以後に機能していたと見られる旧河道が複数検出された。

これらの事から、ほ場整備事業区域内の南北方向の遺跡の分布状況についての概要は把握できたが、東西方向については発掘調査が行われていないために明らかではない。ただ、旧河道から縄文時代晩期の比較的大形の土器片が少なからず出土していることからも、調査区域では確認されていない該期の集落跡が付近に立地していることはほぼ間違いないものとみられる。おそらく



第１図　八田中ヒエモンダ遺跡周辺地形図〔1/3,000〕（県営ほ場整備事業着工前）

第２図　各調査区位置図〔1/3,000〕（県営ほ場整備事業による新区画）

は縄文時代晩期、弥生時代中期等の居住域が微高地のかたちで散在するとともに、各時代・時期の遺物を包含した旧河道が幾筋も曲折した状態で分布しているものと推察される。現時点ではこれら遺跡群を峻別することが不可能なために「八田中ヒエモンダ遺跡」として包括的に扱っている。なお、B調査区で検出された旧河道については、第1図に表示した等高線にその痕跡を認めることができる。

Ⅲ　遺構、遺物

1　A，C調査区

A調査区は一般県道倉部金沢線センターラインを起点（A－0）とし、ほぼ北に向かって延長106m、幅2mの発掘調査を行った結果、調査区域のほぼ全域に江戸時代と推定される土坑、溝が散在していることを確認した。また、調査区北端では時期不詳ながらも素掘の井戸と推定される遺構を検出した。各遺構とも少量の陶磁器細片の出土にとどまったために本書では掲載していない。A－53～100にかけて調査区に斜交して検出した旧河道SD－A1は北西方向に流れるかなり大規模な自然河道である。調査幅がわずか2mであったため、底面までの発掘調査は危険が大きすぎると判断し地下1.5m以下の調査は断念した。部分的にバックホーを用いた試掘を行った結果ではA－80付近が最深部と推定され、地下3mでも底面は検出できなかった。A－90以北では後世の溝と複合しているが、他の部分では人為的な造作は認められなかった。覆土には流木や腐食物が多量に含まれている。後述するSD－B3（縄文時代晩期以降）と類似する堆積状況を呈しているが、遺物が出土していないため。現時点では時代・時期の特定はできない。

C調査区は八幡神社社地背後でほぼ東西方向に設定した延長52m、幅2mの調査区である。現水路等による撹乱が著しく、西端部で時期不詳の溝を2条検出したにとどまった。

2　B調査区

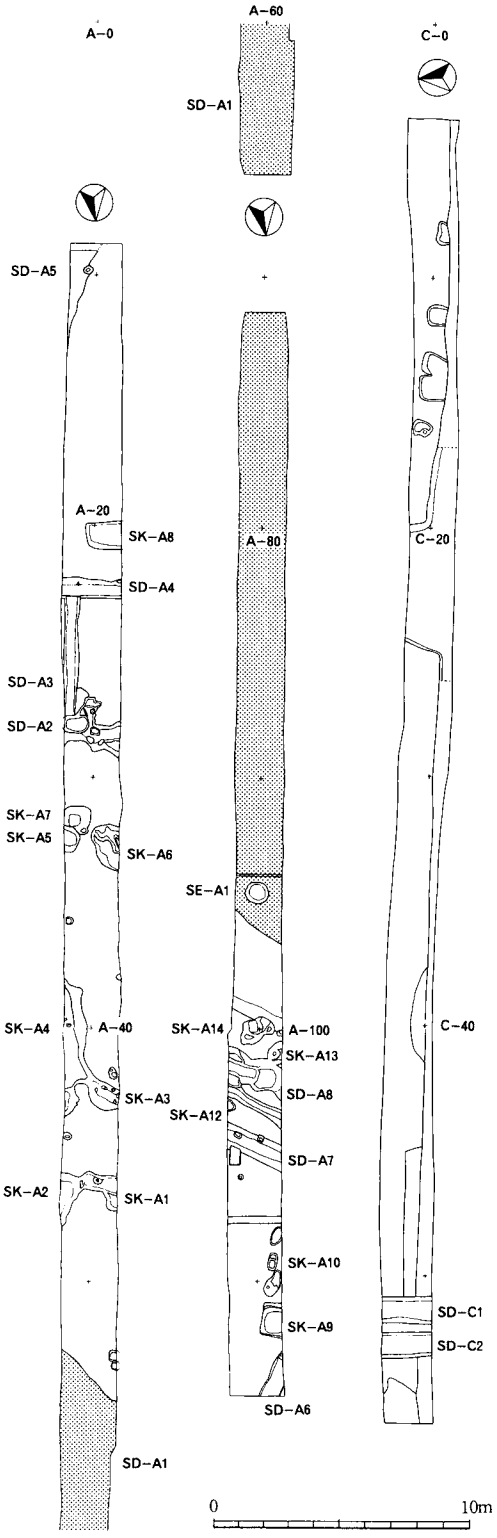
一般県道倉部金沢線センターラインを起点（B－0）とし、ほぼ南に向かって延長367m、幅2mの発掘調査を行った（A－113～133等については未調査）結果、縄文時代晩期以降の自然河道とその南部に広がる弥生時代中期の集落跡に伴う遺構、遺物を検出した。このほか時代・時期の特定困難な柱穴等、近世の溝、河道跡等も複合して検出された。

B－49～80にかけて調査区に斜交して検出した旧河道SD－B3は北東方向に流れるかなり大規模な自然河道である。調査幅がわずか2mであったため、底面までの発掘調査は危険が大きすぎると判断し地下1.5m以下の調査は断念した。部分的に試掘を行った結果、B－80付近以南でやや浅くなっていることからみて、川幅は15m弱、地山面からの深さ約1.5m、底面の標高は5m程度と推測される。川底は比較的平坦であって、人為的造作は認められなかった。覆土には流木や腐食物を多量に含み、縄文時代晩期の比較的大形の土器片が少なからず出土している。主要な土器を掲載したが、中屋式新段階と晩期終末の下野式段階に帰属する遺物が認められる。また、

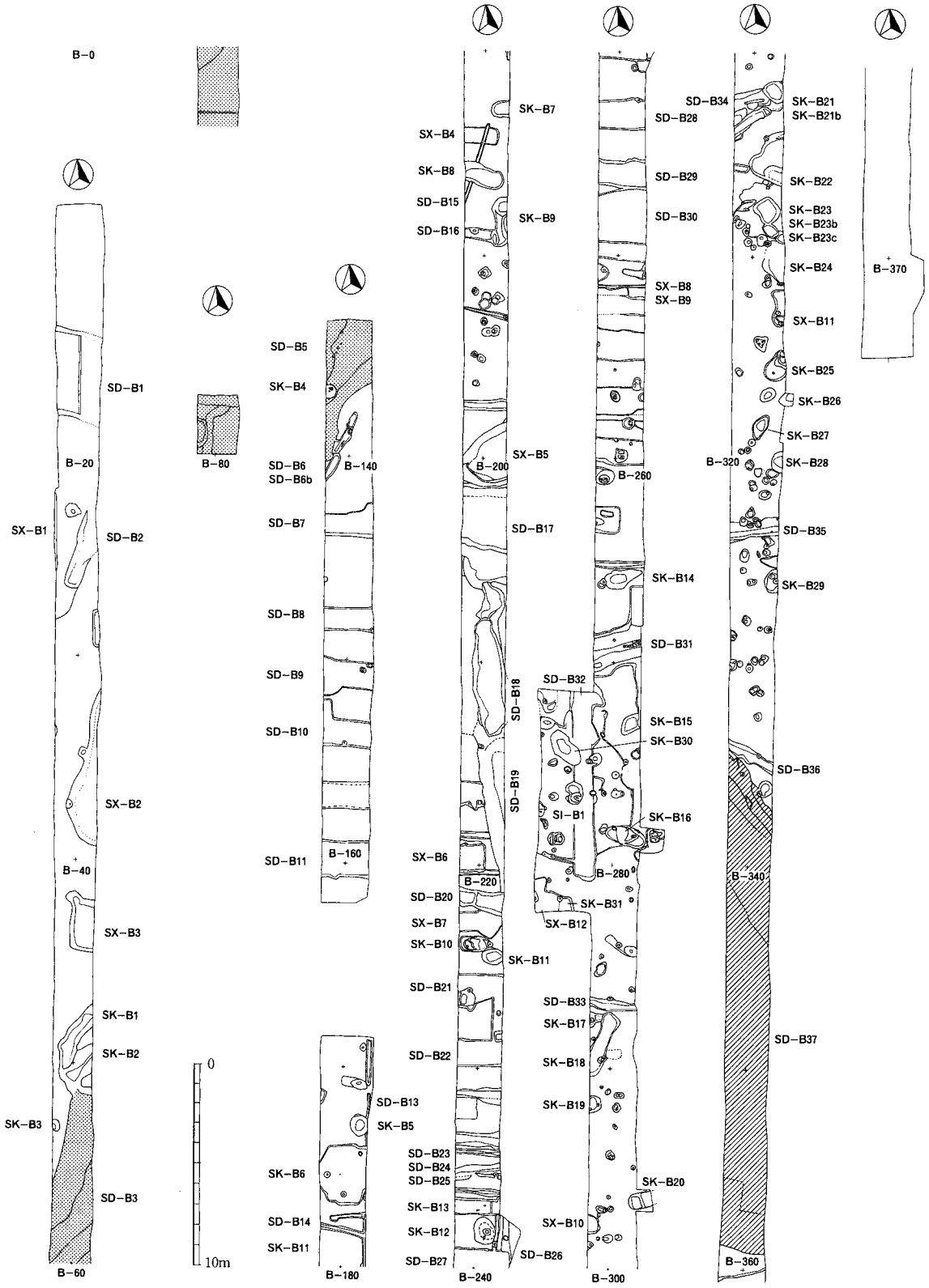
Ｂ－80～140の区間では別の旧河道であるＳＤ－Ｂ４，５が複合しているが、発掘調査が危険なため詳細を明らかにすることができなかった。ＳＤ－Ｂ５右岸にあたるＢ－133～140では、弥生時代中期のＳＫ－Ｂ４との新古関係が明らかであることからＳＤ－Ｂ５はそれ以後とみられるが、時代・時期を直接示す遺物は出土していない。ただ、ＳＤ－Ｂ３～５以北での弥生時代の遺構・遺物がほとんど認められなかったことからも、これらの河道がかなり長期にわたって機能し、弥生集落域の北限となっていたことがうかがわれる。

弥生集落の南限は遺構の分布が途絶えるＢ－350付近とみられる。該当箇所には幅10m程度の河道ＳＤ－Ｂ37が南西方向に流れているが、底面より近世陶器が出土しており、同集落域の境界とは無関係である。微高地状の集落域は後世の撹乱、削平を受けており遺物包含層は遺存していない。Ｂ－140～270にかけて各所で検出された深さ10m程度の東西方向の浅い溝または窪みの多くは近世以後の耕作に伴うものと考えられる。Ｂ－198～221にかけて所在するＳＤ－Ｂ17～19、およびＳＸ－Ｂ５については時代・時期を直接示す遺物は出土しなかったが、覆土の土質の類例から推定するば中世以後と考えられる。

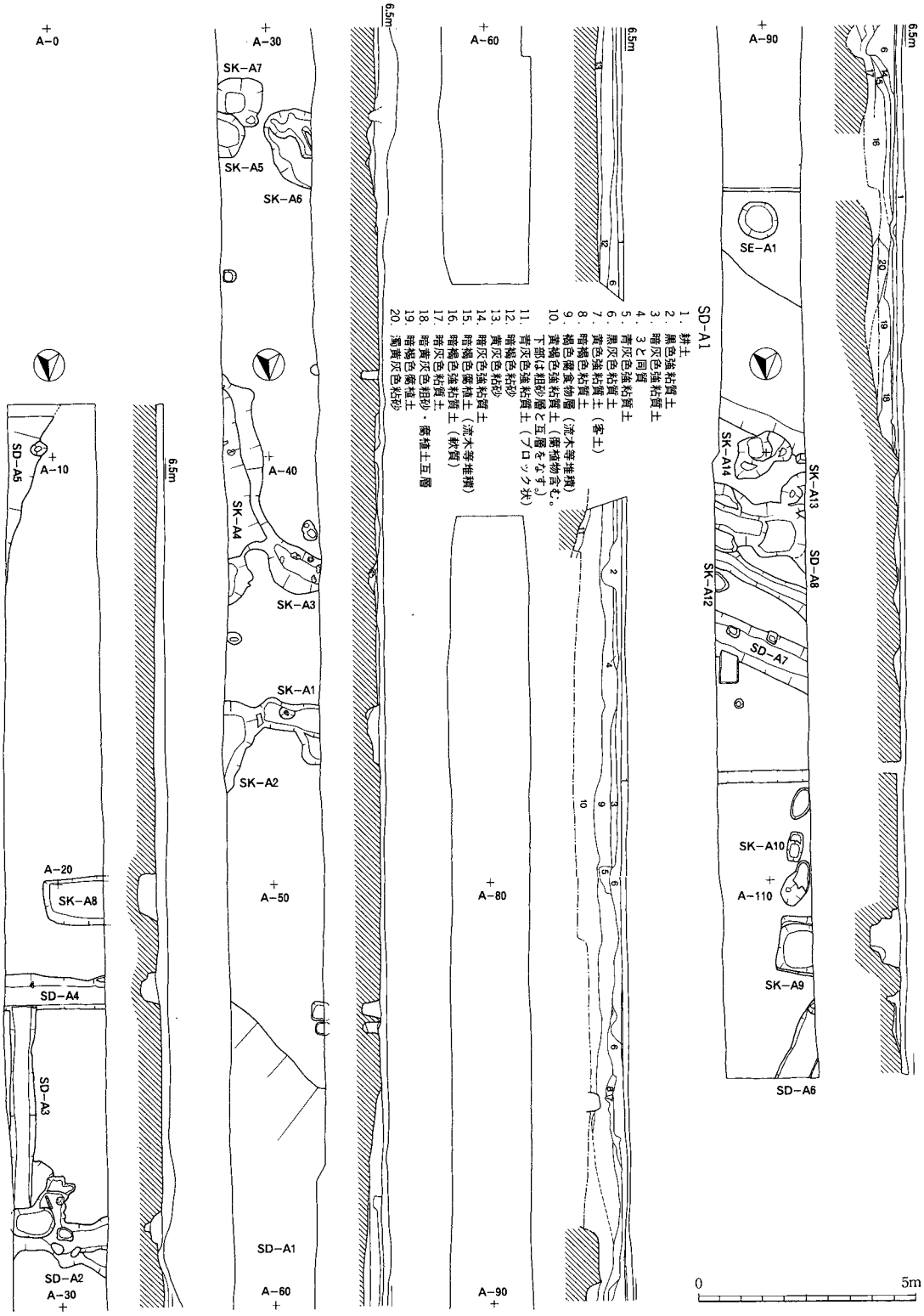
調査幅が狭く、遺構面の削平も少なくないために住居跡の確認作業は困難な状況であったが、Ｂ－270～280で竪穴が１棟検出された。ＳＩ－Ｂ１は径７～８ｍのほぼ円形を呈し、一部に壁溝が認められ、主柱穴は６箇所と推定される。掘り方は５㎝程度遺存していたが、西側⅓は削平のため不明である。また、中央部は後世のＳＤ－Ｂ32によって撹乱されている。覆土からは弥生時代中期中葉の土器・石鏃の他、石鏃製作に伴う輝石安山岩質の未製品・剥片が多量に出土した。また、本竪穴からは玉造に伴う管玉未製品、翡翠剥片等も出土している。また、本竪穴と複合しているＳＫ－Ｂ16からは翡翠製勾玉が出土している。ＳＩ－Ｂ１以外にも各所で柱穴が検出



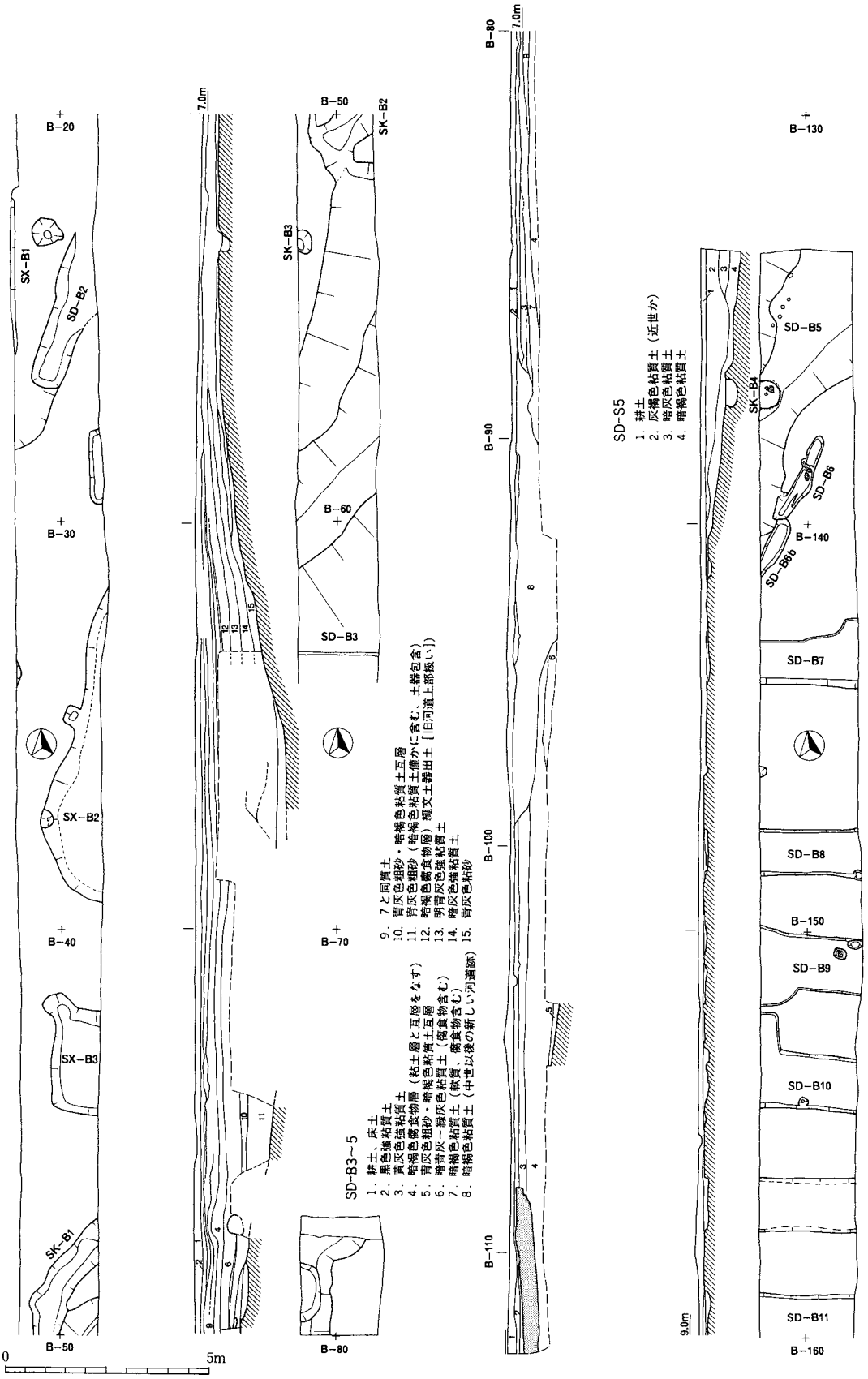
第３図　A，C 調査区全体図集成〔1/300〕



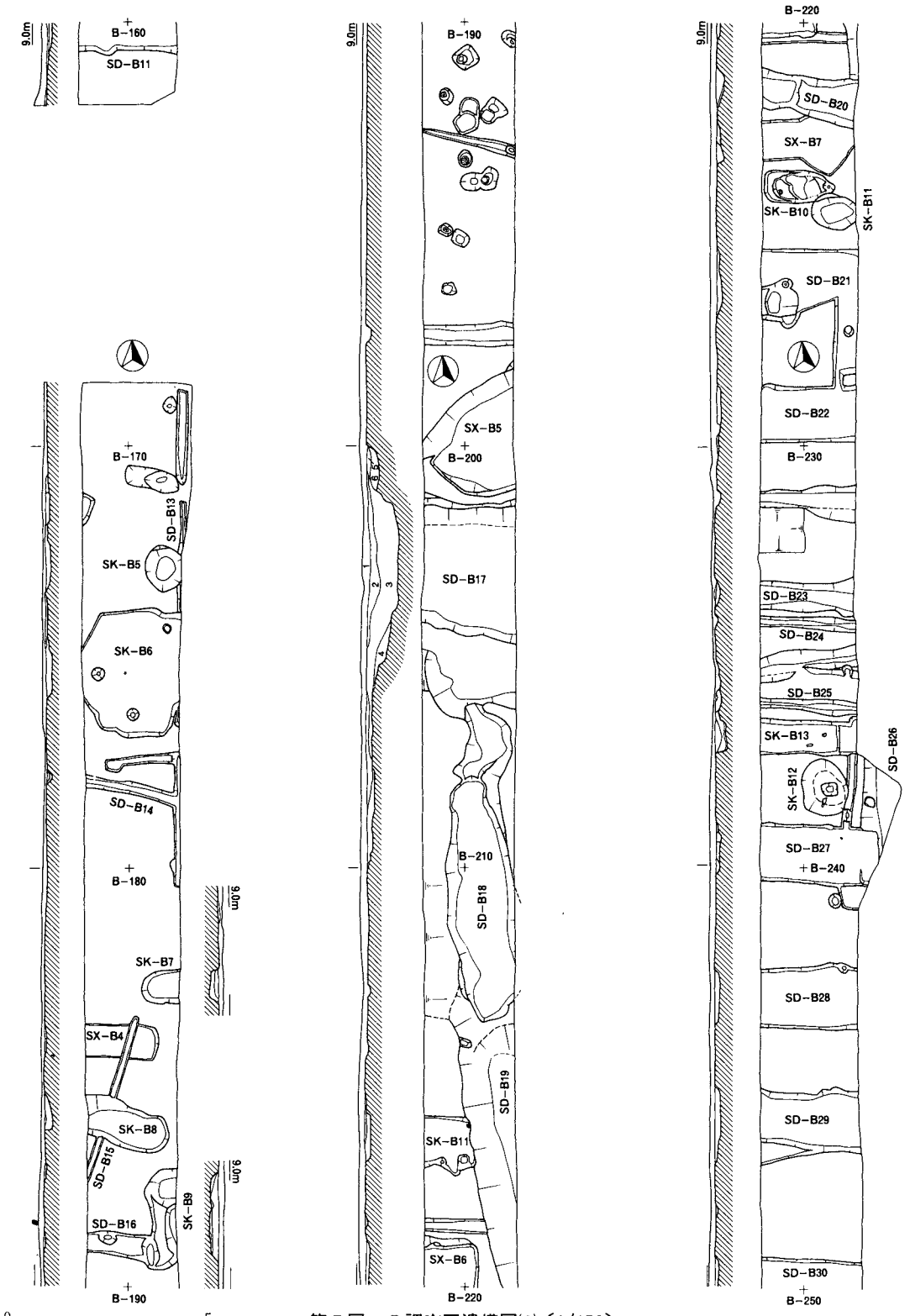
第４図　Ｂ調査区全体図集成〔1/300〕（網線部は旧河道）



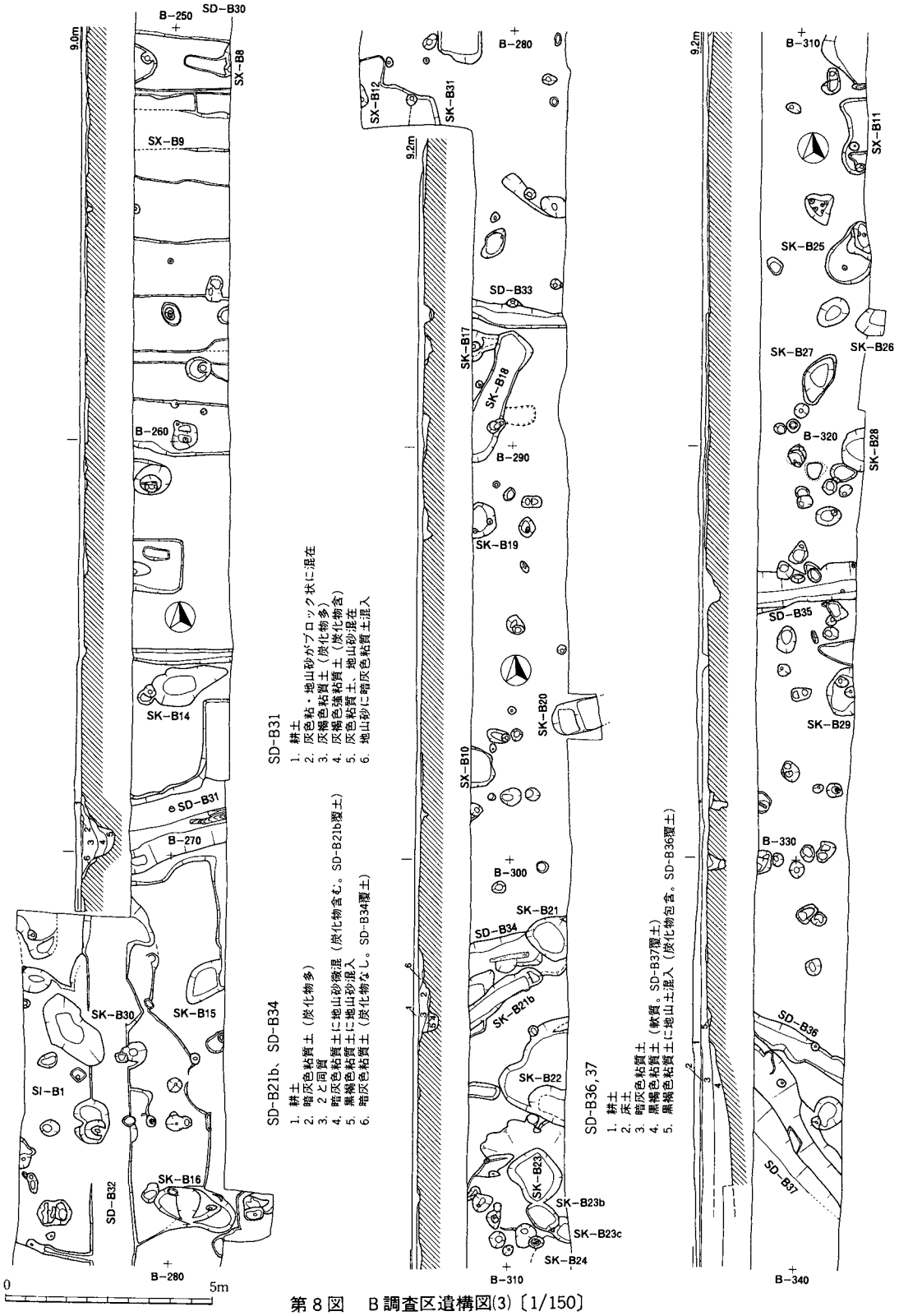
第５図　Ａ調査区遺構図〔1/150〕



第６図　Ｂ調査区遺構図(1)〔1/150〕



第７図　Ｂ調査区遺構図(2)〔1/150〕



第８図　Ｂ調査区遺構図(3)〔1/150〕

され、その中には柱根が残るものも少なくなかった。ただ、調査幅の制約から建物規模の把握は極めて困難である。

ＳＩ－Ｂ１北縁に接するＳＤ－Ｂ31は、幅約４ｍ、地山面からの深さ約２ｍを計るＶ字形のしっかりとした溝である。覆土から少なからず出土した弥生時代中期の土器破片には、約10m南方に位置するＳＫ－Ｂ16出土土器片と接合、あるいは同一個体片と確認されたものが含まれている。

これらの遺構が位置するＢ－270付近以南は、生活面の削平は全体に受けているものの、中近世の遺構や撹乱は少なく、ほとんどの検出遺構は弥生時代中期に比定される。ＳＫ－Ｂ４・Ｂ８・Ｂ12～16・Ｂ21・Ｂ21ｂ・Ｂ23・Ｂ26・Ｂ28・Ｂ30，ＳＤ－Ｂ７，Ｂ10，Ｂ20，Ｂ21，Ｂ31等、該期の検出遺構から出土した図化可能な遺物については本報告書においてほぼ掲載した。これら遺構出土土器の編年的位置づけについては、遺構の複合状況からも一定の時期幅を有する土器群であることは当然ではあるが、一部の土器を除き、編年的には短期間のものとして理解したい。特に多様な櫛描文のうち斜行単線文、扇状文、口縁部の綾杉状刻み目といった比較的新段階に盛行する櫛描文が認められず、直線文、波状文沈線文のみの構成がほとんどである点や、吉崎・次場遺跡Ｖ－５土坑、Ｖ－５号溝出土品に酷似する甕（18，39）の存在、条痕文系土器群の末裔が若干含まれる点をふまえ、小松式・次場下層式における櫛描文が最も発達する段階以前に位置付けておく。弥生時代中期の櫛描文土器の細分作業はそれほど進捗していない段階であるため、従来からの編年観を基に、畿内第Ⅱ様式の新しい段階から第Ⅲ様式初頭頃に併行すると考えられる。各種櫛描文に地域色が強く現れ、独自の土器型式として繁栄する、狭義の小松式土器・次場下層式土器の前段階といえる。

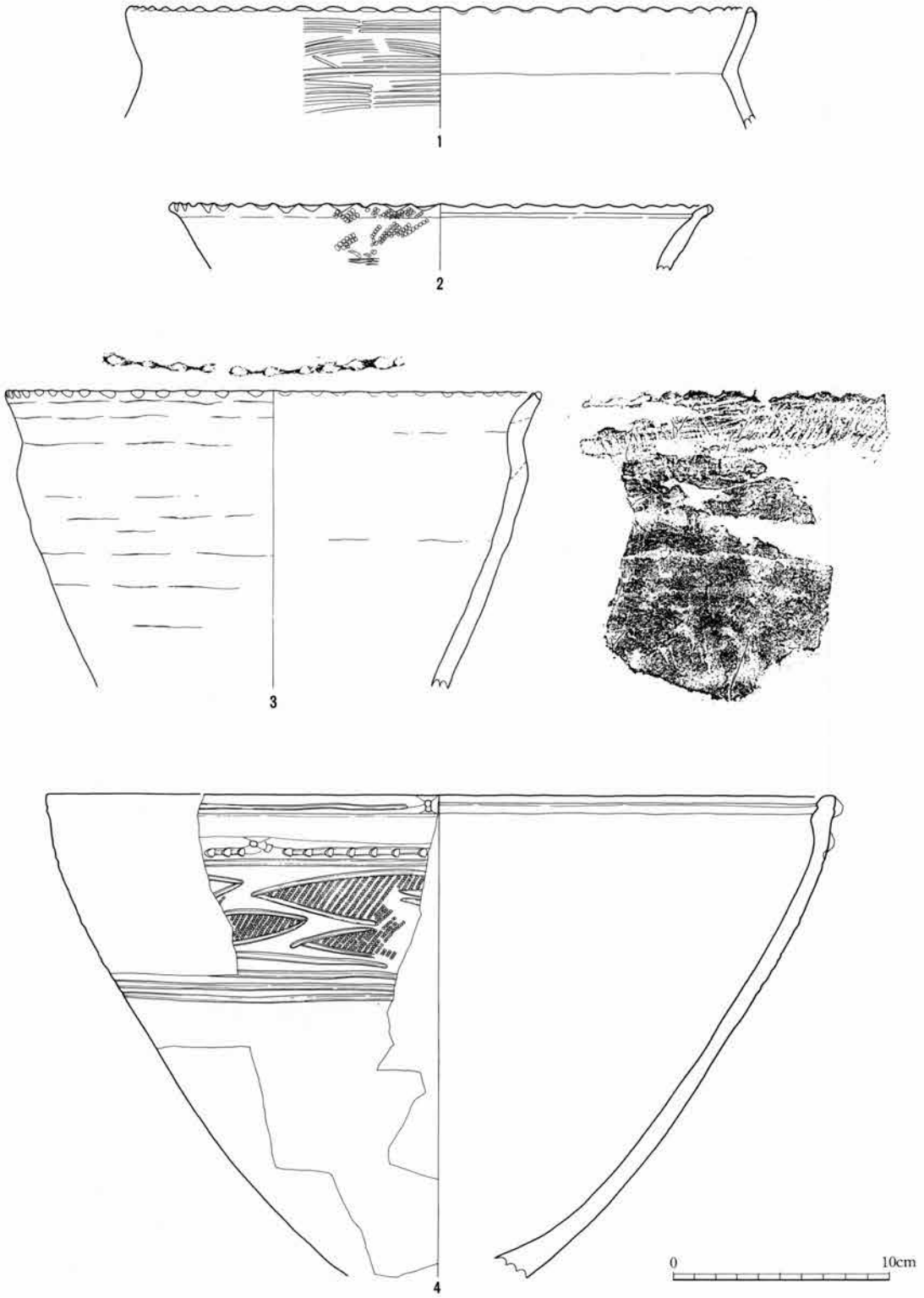
第１表　掲載遺物一覧表

図	番号	出土位置	出土遺構等	器種等	実測番号
9	1	B-50～60	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）下部（暗灰色強粘）	深鉢。外面条痕。口径29cm。	66
	2	B-60～65	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）下部（黒灰・青灰色粘）	深鉢。外面縄文。口径25cm。	69
	3	B-50～60	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）下部（暗青灰色強粘）	深鉢。口縁外面条痕。口径25cm。	64
	4	B-60～65	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）下部（青灰色強粘）	深鉢（縄文晩期中屋式新段階）。口縁外面条痕。口径37cm。	63
10	5	B-50～60	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）縁上部（暗灰色粘）	深鉢。外面条痕後施文。口径25cm	68
	6	B-60～65	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）下部（黒灰・青灰色粘）	深鉢。外面ナデ後赤彩。口径20cm	67
	7	B-75	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）底面付近（試掘坑）	深鉢。外面条痕。口径11cm。	12
	8	B-50～60	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）縁上部（暗灰色粘）、下部（暗青灰色強粘）	深鉢。外面条痕。口径14cm。	29
	9	B-75	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）底面付近（試掘坑）	底部。外面条痕。底径11cm。	71

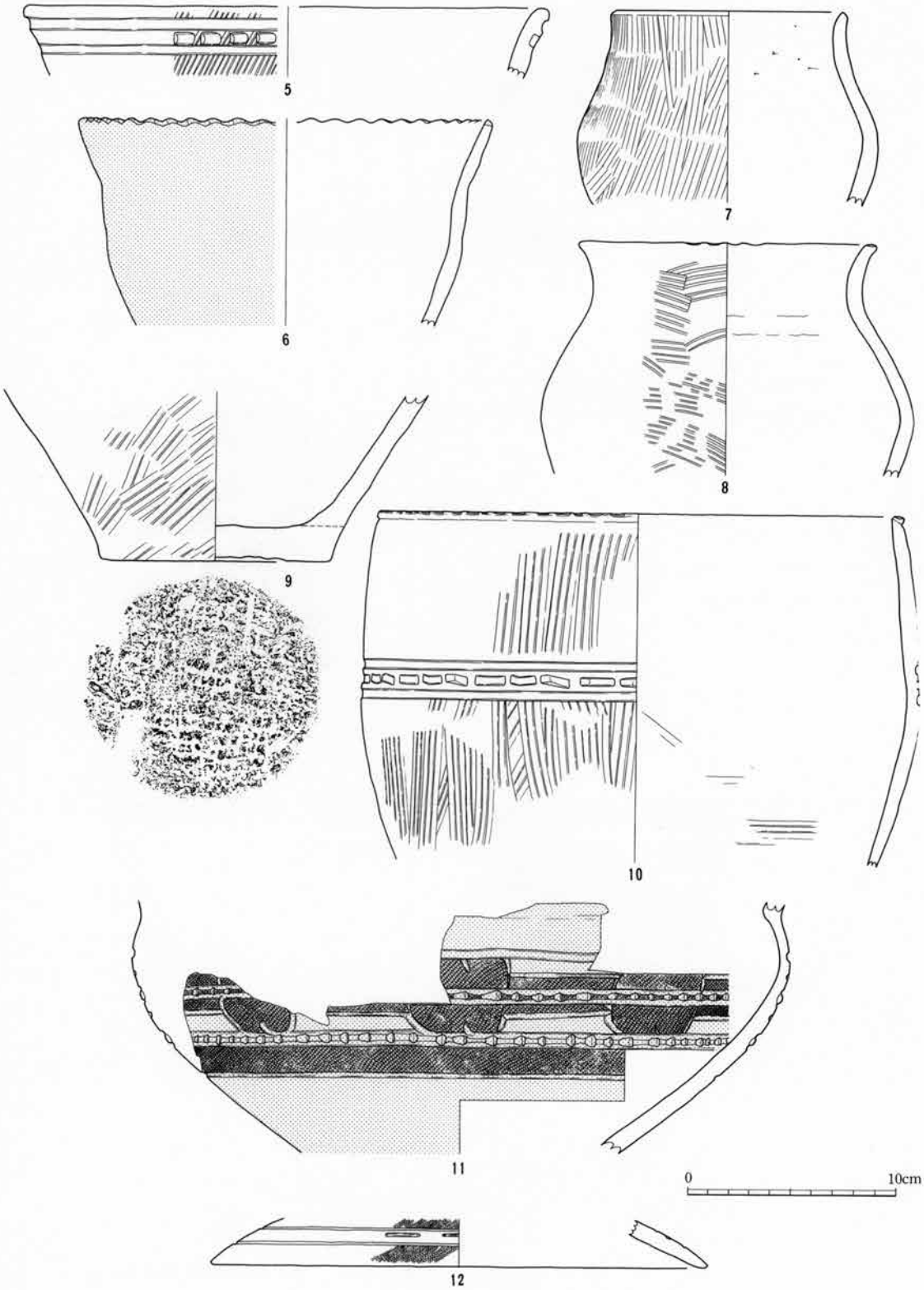
	10	B-85	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）上部	深鉢（縄文晩期下野式）。外面条痕後施文。口径25cm。	65
	11	B-50～60	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）縁上部（暗灰色粘下部（暗青灰色強粘）。破片接合。	浅鉢（縄文晩期中屋式新段階）。外面ケズリ後赤彩。	62
	12	B-60～65	ＳＤ－Ｂ３（旧河道）下部（黄灰色粘）	蓋。口径24cm。	70
11	13	B-136	ＳＫ－Ｂ４	鉢。口径14cm。	72
	14	B-136	ＳＫ－Ｂ４	高杯。	73
	15	B-186	ＳＫ－Ｂ８上部	壷。櫛描直線、波状文。	43
	16	B-186	ＳＫ－Ｂ８底面	壷。櫛描直線、波状文。口径13cm、体径19cm、器高17cm。	1
	17	B-238	ＳＫ－Ｂ12	甕。口径19cm。	11
	18	B-238	ＳＫ－Ｂ12	甕。櫛描直線文、列点文。口径22cm。	4
	19	B-237	ＳＫ－Ｂ13	甕。口縁端ヘラ描列点文。口径30cm。	32
	20	B-237	ＳＫ－13	甕。口縁端ハケ刻み目。口径26cm	3
12	21	B-265	ＳＫ－14	底部。底径 6cm。	53
	22	B-273	ＳＫ－15	壷。櫛描直線、波状文。	25
	23	B-273	ＳＫ－15	甕。口縁端ハケ刻み目。口径22cm	14
	24	B-278	ＳＫ－16	壷。	17
	25	B-278	ＳＫ－16	壷。櫛描直線、波状文。	35
	26	B-278	ＳＫ－16上面	壷。櫛描直線、弧線文他。	44
	27	B-278	ＳＫ－16	壷。櫛描山形文。	61
	28	B-278	ＳＫ－16	壷。口縁端ハケ刻み目。口径10cm	38
	29	B-278	ＳＫ－16上面	甕。口縁端ハケ刻み目。口径22cm	13
	30	B-278	ＳＫ－16上面	甕。口径20cm。	15
	31	B-278, B-269	ＳＫ－16, ＳＤ－Ｂ31 同一個体片	甕。口縁端ハケ刻み目。内面櫛描波状文。口径19cm。	34
	32	B-278, B-269	ＳＫ－16, ＳＤ－Ｂ31 破片接合。	甕。口縁端ハケ刻み目。口径19cm	19
	33	B-278	ＳＫ－16	甕。口縁端ハケ刻み目。口径19cm	27
	34	B-278	ＳＫ－16	甕。口縁端ハケ刻み目。口径20cm	16
	35	B-278	ＳＫ－16	甕。底径 7cm。	51
13	36	B-302	ＳＫ－21検出面	壷。頸部突帯。	76
	37	B-302	ＳＫ－21	壷。沈線文。	74
	38	B-302	ＳＫ－21法面	鉢。口径 8cm。	75
	39	B-302	ＳＫ－21	甕。櫛描直線、波状文。口縁端ハケ刻み目。口径20cm。	48
	40	B-302	ＳＫ－21法面	甕。頸部櫛刺突文。	47
	41	B-304	ＳＫ－21検出面	甕。口縁端ハケ刻み目。口径21cm	9
	42	B-304	ＳＫ－21検出面	甕。口縁端ハケ刻み目。口径21cm	37
	43	B-304	ＳＫ－21ｂ	甕。口縁端ハケ刻み目。口径26cm	39
	44	B-304	ＳＫ－21ｂ	底部。底径 6cm。	55
	45	B-307～309	ＳＫ－23ｃ検出面	甕。	33

	46	B-317	ＳＫ－26	甕。口縁端ハケ刻み目。内面櫛描波状文。口径22cm。	30
	47	B-317	ＳＫ－26	甕。	36
	48	B-320	ＳＫ－28	甕。口縁端ハケ刻み目。内面櫛描波状文。口径20cm。	45
	49	B-320	ＳＫ－28	壷。櫛描直線、波状文。	20
14	50	B-274	ＳＫ－30	壷。沈線文。	58
	51	B-274	ＳＫ－30	甕。口縁端ヘラ刻み目。口径33cm	6
	52	B-271～276	ＳＩ－Ｂ１北西ｸﾞﾘｯﾄﾞ,北東ｸﾞﾘｯﾄﾞ	壷。口縁ハケ刻み目。櫛描直線、波状、弧線文。列点文。口径23cm	49
	53	B-276～280	ＳＩ－Ｂ１南東ｸﾞﾘｯﾄﾞ	壷。櫛描直線、弧線文。	59
	54	B-276～280	ＳＩ－Ｂ１南東ｸﾞﾘｯﾄﾞＰｉｔ４	壷。沈線文。	57
	55	B-271～276	ＳＩ－Ｂ１北東ｸﾞﾘｯﾄﾞ,ＳＤ－Ｂ32撹乱部	壷。櫛描直線文。	78
	56	B-280	ＳＩ－Ｂ１南北ｸﾞﾘｯﾄﾞ横遺構検出面	壷か。口径14cm。	26
	57	B-271～276	ＳＩ－Ｂ１北東ｸﾞﾘｯﾄﾞ,ＳＤ－Ｂ32	甕。口縁端ハケ刻み目。口径30cm	10
	58	B-271～276	ＳＩ－Ｂ１北東ｸﾞﾘｯﾄﾞ	甕。口縁端ハケ刻み目。頸部櫛描直線文。口径23cm。	46
	59	B-279	ＳＩ－Ｂ１南東ｸﾞﾘｯﾄﾞＰｉｔ１	甕。口縁端ハケ刻み目。口径19cm	42
	60	B-276～280	ＳＩ－Ｂ１南東ｸﾞﾘｯﾄﾞ,ＳＤ－Ｂ32	甕。口径19cm。	28
	61	B-276～280	ＳＩ－Ｂ１南西ｸﾞﾘｯﾄﾞ	甕。口径22cm。	31
	62	B-276～280	ＳＩ－Ｂ１南東ｸﾞﾘｯﾄﾞ	甕。口径20cm。	22
15	63	B-140～150	ＳＤ－Ｂ7	甕。口縁端ハケ刻み目。口径25cm	40
	64	B-154	ＳＤ－Ｂ10	甕。口縁端ハケ格子状刻み目。口径21cm。	23
	65	B-222	ＳＤ－Ｂ20	壷。櫛描直線、波状、簾状文。	60
	66	B-222	ＳＤ－Ｂ20	壷。櫛描直線、波状文。	77
	67	B-222	ＳＤ－Ｂ20	鉢。円形刺突文、櫛描直線、波状文。口径15cm。	41
	68	B-226	ＳＤ－Ｂ21	口径12cm。	24
	69	B-270	ＳＤ－Ｂ31	鉢。櫛描直線文。口縁端ハケ刻み目。口径16cm。器高16cm。	8
	70		ＳＤ－Ｂ31下部	鉢。口縁端ハケ刻み目。口径20cm	18
	71	B-270	ＳＤ－Ｂ31中層	鉢。口径15cm。	5
	72	B-270	ＳＤ－Ｂ31中層	甕。口縁端ハケ刻み目。口径22cm	2
	73		ＳＤ－Ｂ32（ＳＩ－Ｂ１土器混入）	壷。口縁端指頭押圧。口径18cm。	21
	74	B-270	ＳＤ－Ｂ31中層～	甕。口径16cm。	7
	75	B-270	ＳＤ－Ｂ31	底部。穿孔有。底径 6cm。	54
	76	B-270	ＳＤ－Ｂ31中層～	底部。底径 6cm。	50
	77	B-270	ＳＤ－Ｂ31	底部。底径 6cm。	52
	78	B-299	Ｐｉｔ－Ｂ11	壷。櫛描直線文。	56
16	79	B-279	ＳＩ－Ｂ１石器2	石鏃。珪質黒色頁岩。長 3.6cm、幅1.35cm、厚0.47cm、重 2.1ｇ。	52
	80	B-279	ＳＩ－Ｂ１石器1	石鏃。珪質黒色頁岩。長 5.1cm、幅 1.4cm、厚 0.5cm、重 3.0ｇ。	47

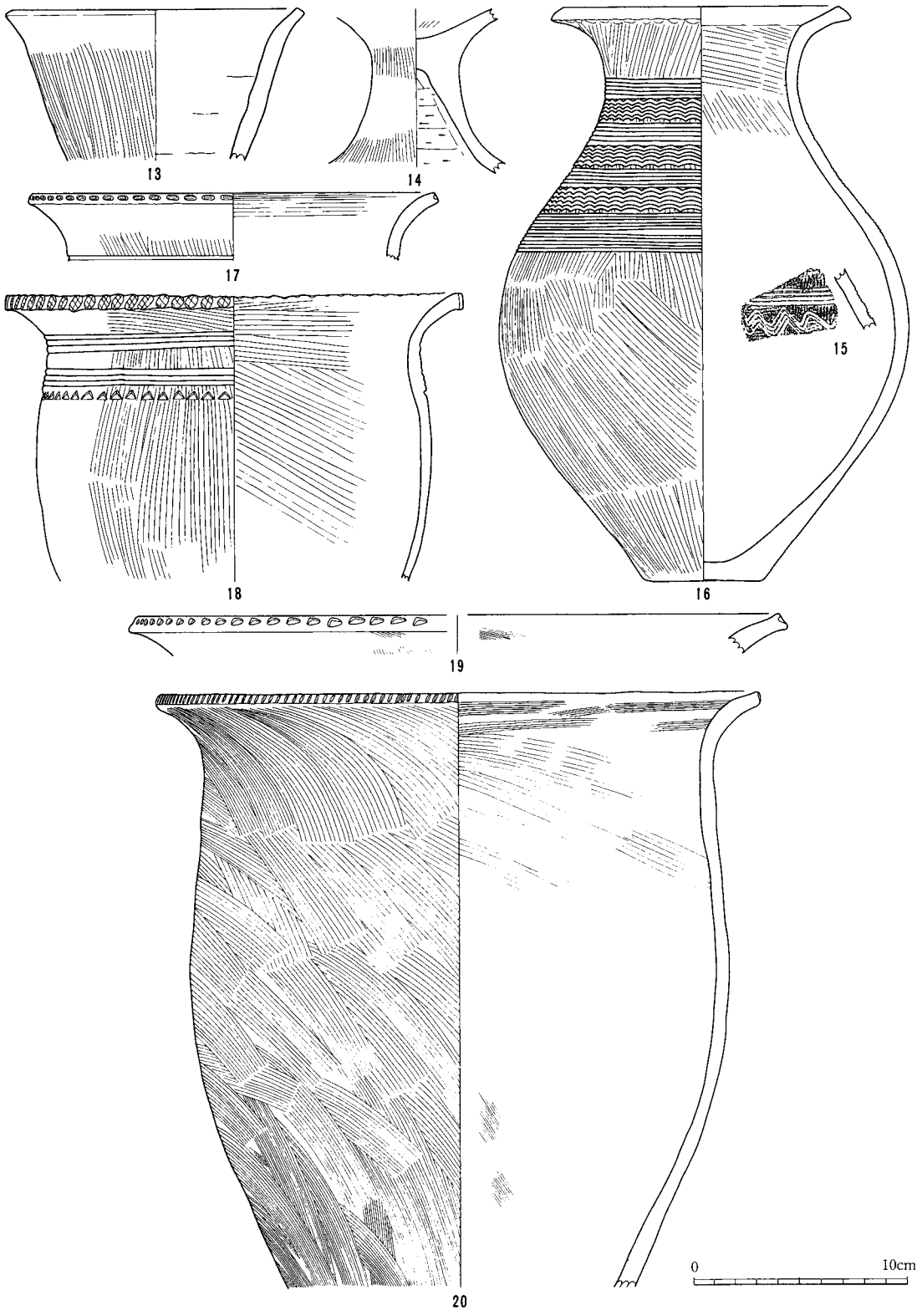
	81	B-302	ＳＫ－Ｂ21法面	石鏃。珪質黒色頁岩。長 2.2cm、幅 1.4cm、厚0.52cm、重 1.3ｇ。	38
	82	B-280	ＳＩ－Ｂ１石器5	石鏃。珪質黒色頁岩。長2.15cm、幅 1.3cm、厚 0.4cm、重 1.0ｇ。	51
	83	B-277	ＳＩ－Ｂ１石器3	石鏃。珪質黒色頁岩。長 2.3cm、幅 1.2cm、厚0.24cm、重 0.7ｇ。	53
	84	B-192	Ｐｉｔ－Ｂ２	未製品。玻璃質流紋岩。長 3.1cm 幅1.75cm、厚1.06cm、重 6.5ｇ。	36
	85	B-276～280	ＳＩ－Ｂ１南東ｸﾞﾘｯﾄﾞ	鏃未製品。珪質黒色頁岩。長4.15 cm、幅1.75cm、厚0.63cm、重 5.1。	49
	86	B-192	Ｐｉｔ－Ｂ２	管玉剝片。施溝。珪質緑色凝岩。長1.75、幅 1.2、厚 0.7、重 1.6	35
	87	B-210～215	ＳＤ－Ｂ18	砥石。凝灰質頁岩。長 4.8、幅 3 厚0.65、重12.8。時期不詳。	37
	88	B-278	ＳＫ－Ｂ16	勾玉。翡翠。長 1.8cm、幅 1.2cm 厚 0.7cm、重 2.0ｇ。	32
	89	B-278	ＳＩ－Ｂ１南東ｸﾞﾘｯﾄﾞ上部	管玉。緑色凝灰岩。長 1.1cm、幅 0.4cm、厚 0.4cm、重 0.2ｇ。	33
	90	B-277	ＳＩ－Ｂ１東隅	管玉未製品。緑色凝灰岩。長 3.3 cm、径 0.8～ 0.9cm、重 4.6ｇ。	31
	91	B-237	ＳＫ－Ｂ13	石核。翡翠。施溝無。長 2.2cm、幅 2.0cm、厚 1.8cm、重12.9ｇ。	45
	92	B-237	ＳＫ－Ｂ13	石核。翡翠。施溝無。長 3.9cm、幅 2.9cm、厚 1.2cm、重19.4ｇ。	44
	93	B-237	ＳＫ－Ｂ13	管玉未製品。施溝。珪質緑色凝灰岩。長 2.8、幅 1.5、厚 1.3、重 7.5	43
	94	B-154	ＳＤ－Ｂ10	管玉剝片。施溝。凝灰質頁岩。長 1.6、幅 1.7、厚 0.6、重 2.5。	34
17	95	B-275	ＳＩ－Ｂ１（Ｐｉｔ－８）	打製石斧。流紋岩。長10.4cm、幅 9.6cm、厚 2.9cm、重 343.6ｇ。	42
	96	B	表採	打製石斧。流紋岩。長14.9cm、幅 6.5cm、厚 2.9cm、重 315.2ｇ。	41
	97	B	表採	打製石斧。凝灰質砂岩。長14.4cm 幅 7.8cm、厚 2.0cm、重 230.2ｇ	50
	98	B-50～100	耕土（排土中）	打製石斧。ヒン岩。長 5.7cm、幅 6.6cm、厚 2.9cm、重 125.1ｇ。	48
	99	B-278	ＳＫ－Ｂ16	磨製石斧。安山岩。長 4.2cm、幅 7.3cm、厚 3.9cm、重 184.4ｇ。	40
	100	B-215	ＳＤ－Ｂ19	凹石。安山岩。長 9.7、幅 8.5、厚 6.7、重 792.7。時期不詳。	54
	101	A-46	ＳＫ－Ａ２	砥石。安山岩。長15.9cm、幅 3.4 厚 2.2cm、重 170.4ｇ。時期不詳	46
	102	A-40	ＳＫ－Ａ４	砥石。凝灰質頁岩。長15.0、幅 8.2 厚 4.6、重427.3ｇ。時期不詳	39



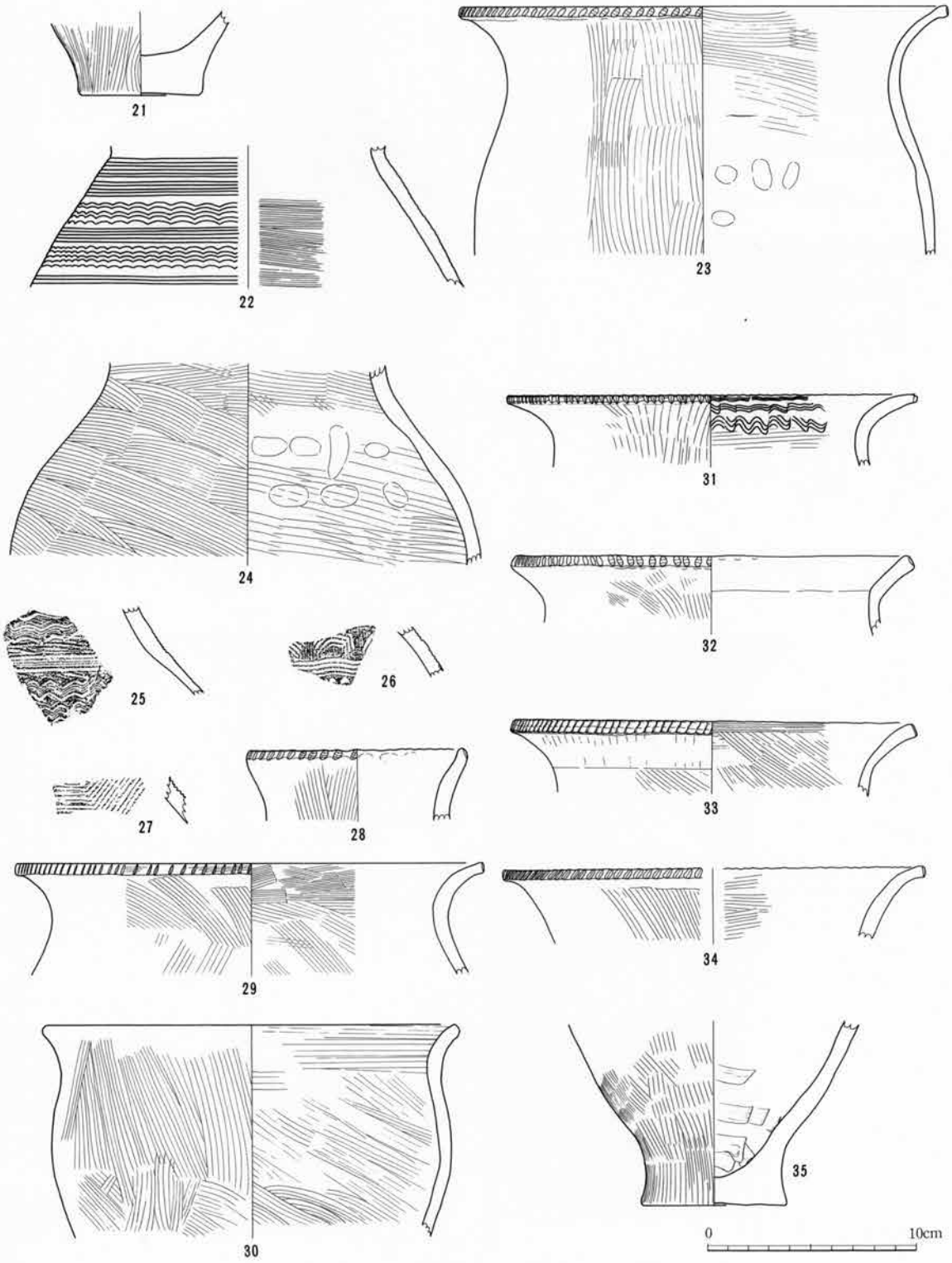
第９図　Ｂ調査区出土遺物実測図(1)〔1/3〕



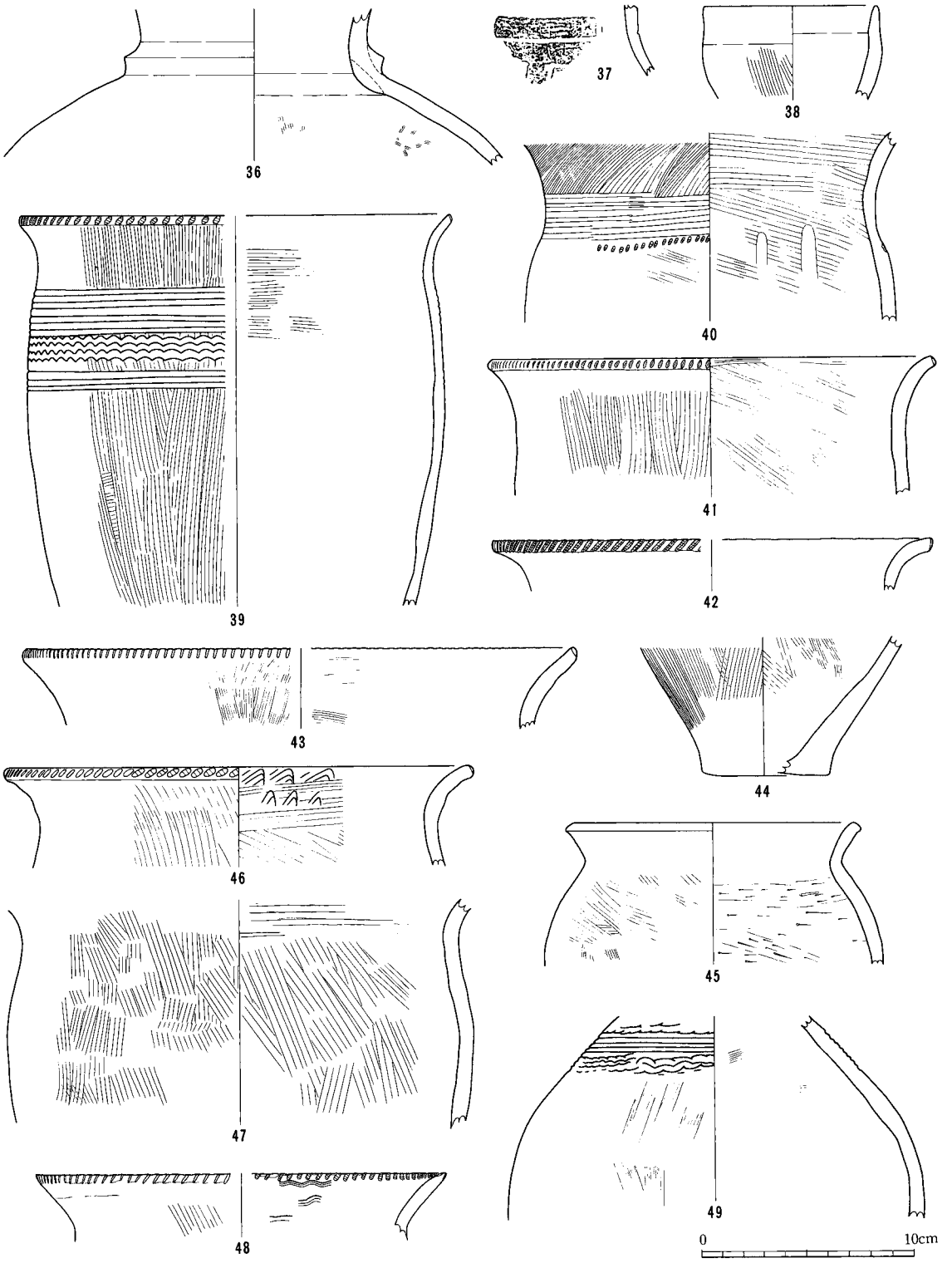
第10図　B調査区出土遺物実測図(2)〔1/3〕



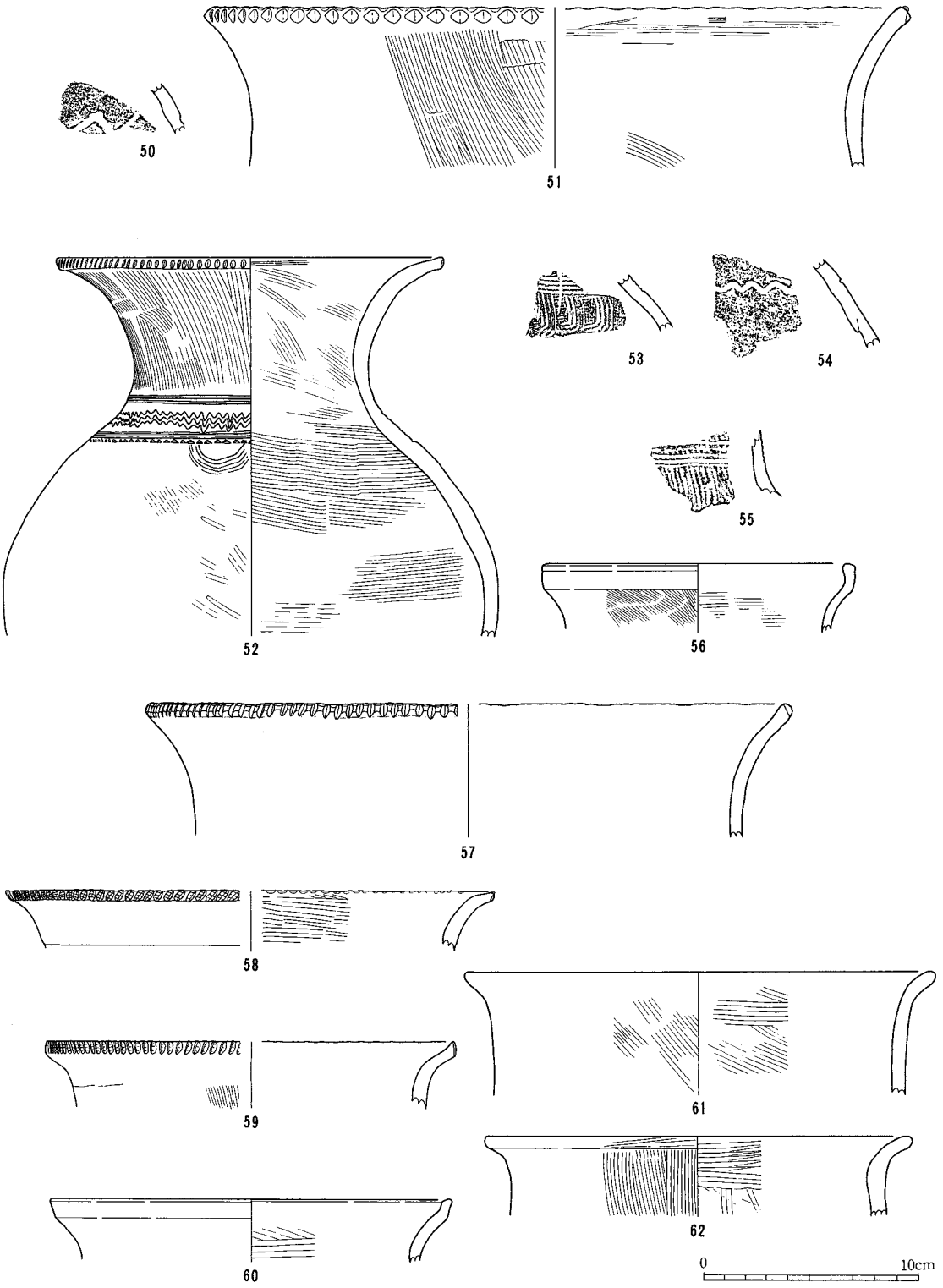
第11図　B調査区出土遺物実測図(3)〔1/3〕



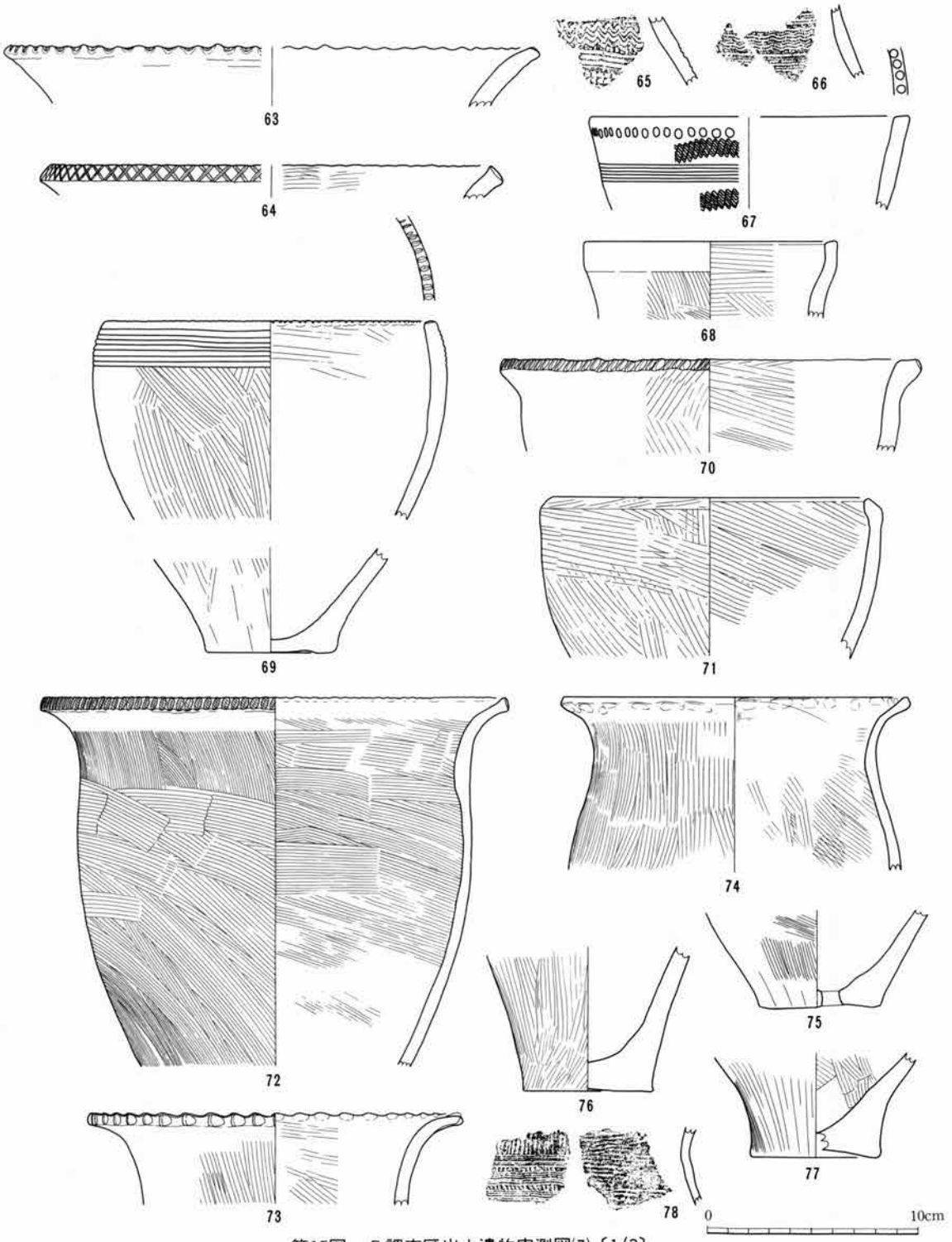
第12図　B調査区出土遺物実測図(4)〔1/3〕



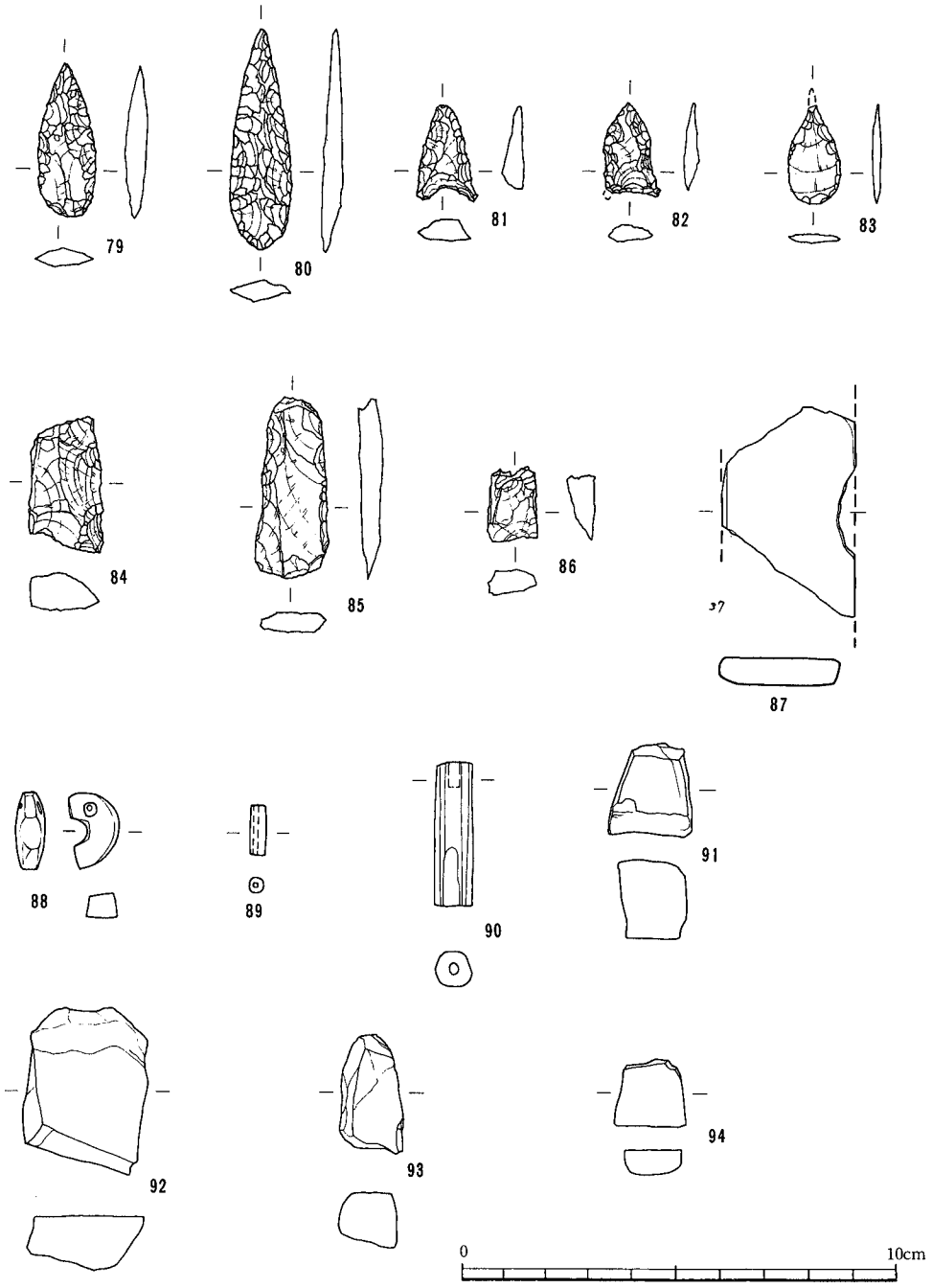
第13図　B調査区出土遺物実測図(5)〔1/3〕



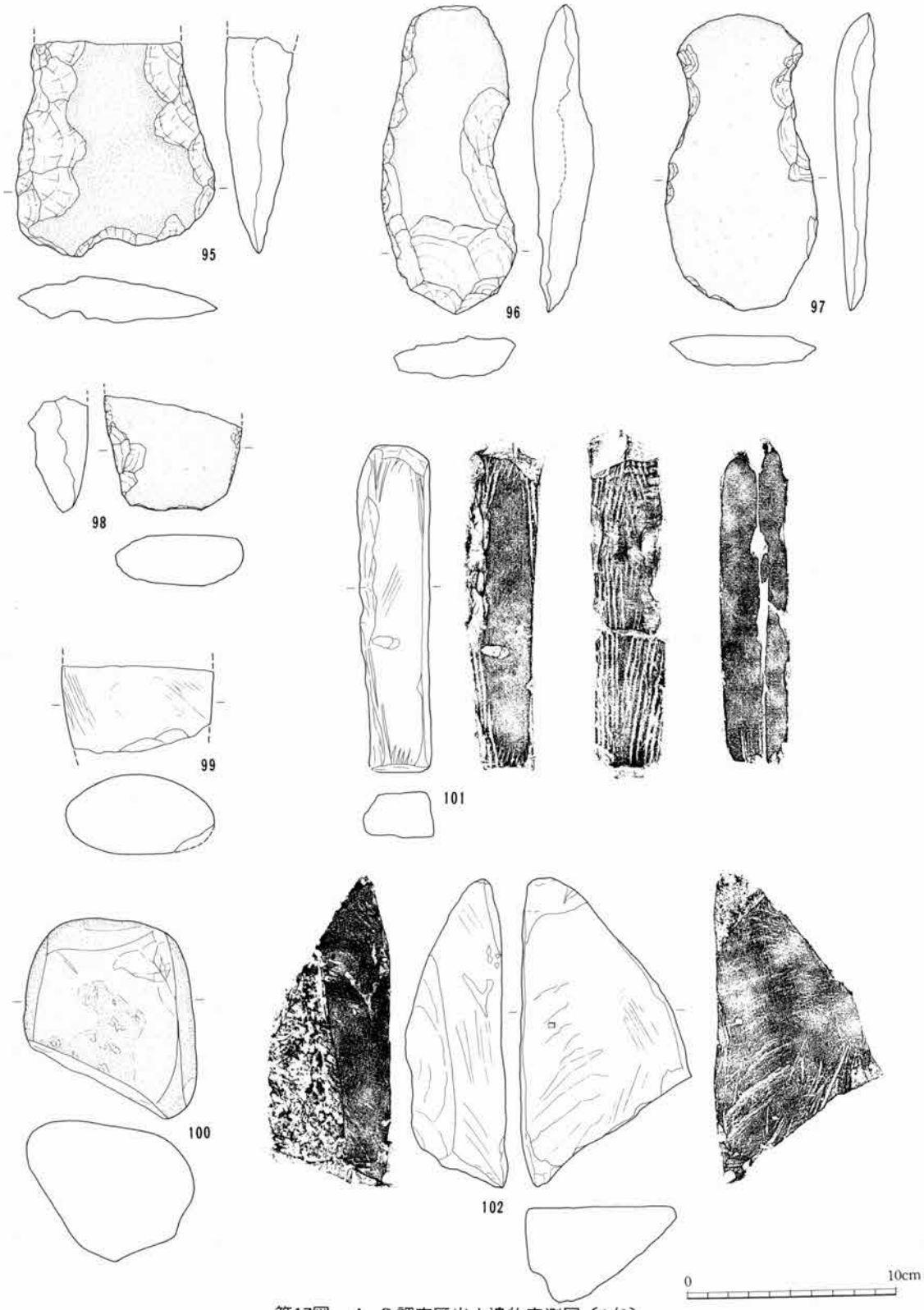
第14図　B調査区出土遺物実測図(6)〔1/3〕



第15図　B調査区出土遺物実測図(7)〔1/3〕



第16図　B調査区出土遺物実測図(8)〔2/3〕



第17図　A，B調査区出土遺物実測図〔1/3〕

A 調査区全景（南端(A－0付近)より撮影）

A 調査区全景（北端(A－125付近)より撮影）

図版2

SD－A2～4，SK－A5～8（北(A－35付近)より撮影）

SK－A1～4，SD－A1〔旧河道〕（南(A－35付近)より撮影）

B調査区北部近景（南(B－165付近)より撮影）

B調査区北部付景（北(B－0付近)より撮影）

図版4

SD－B3〔旧河道〕（南(B－85付近)より撮影）

SD－B3〔旧河道〕左岸(南(B－65付近)より撮影)

SD－B3〔旧河道〕左岸（北(B－55付近)より撮影）

SD－B5〔旧河道〕右岸、SD－B6・6b（北(B－133)より撮影）

B 調査区中央部近景（南(B－270付近)より撮影）

B 調査区南部近景（北(B－283付近)より撮影）

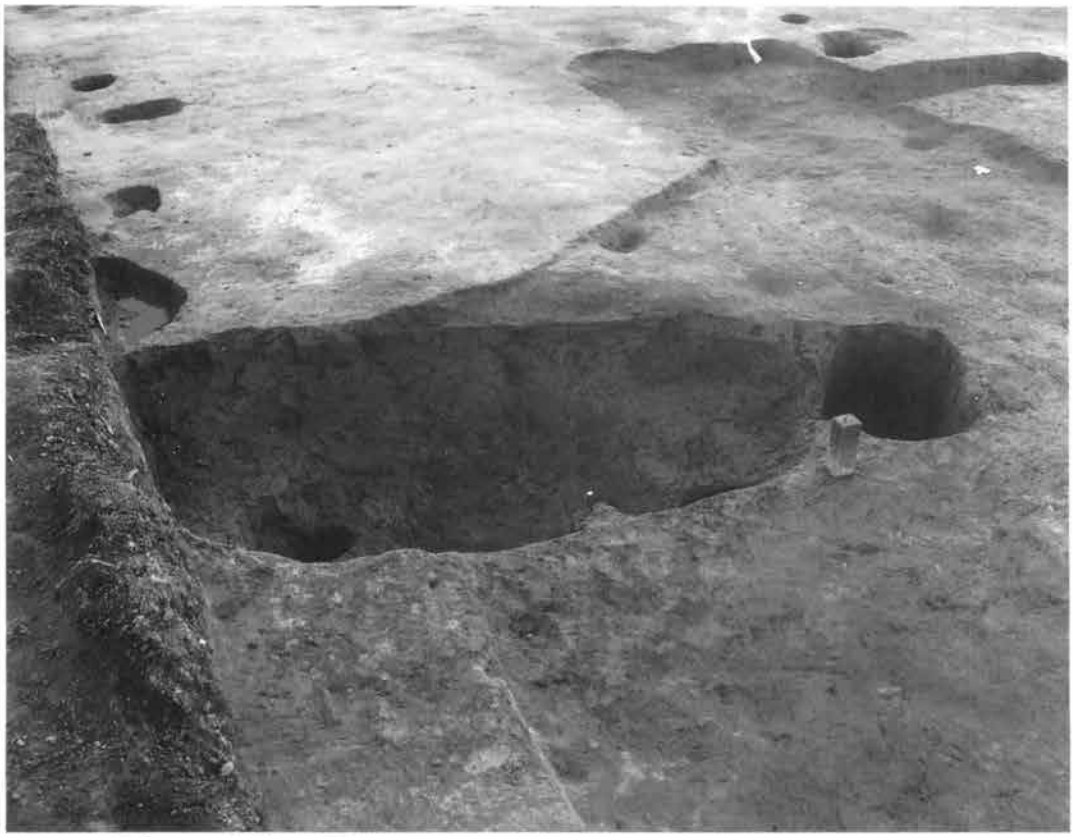
B調査区中央部付景（北(B－170付近)より撮影）

SK－B7･8，SD－B15，SX－B8等（北(B－180付近)より撮影）

SK－B10・11（北(B－222付近)より撮影）

SK－B12・13，SD－B25，27等（北(B－232付近)より撮影）

SK－B14（西(B－266付近)より撮影）



SK－B16（北(B－277付近)より撮影）

図版10

SK－B17・18，SD－B33（東(B－288付近)より撮影）

SK－B20（西(F－297付近)より撮影）

SK－B21・21b，SD－B34（北東(E－301付近)より撮影）

SK－B22・22a～c等（西(F－308付近)より撮影）

SK－B30（北東(F－273付近)より撮影）

SI－B1（南(F－284付近)より撮影）

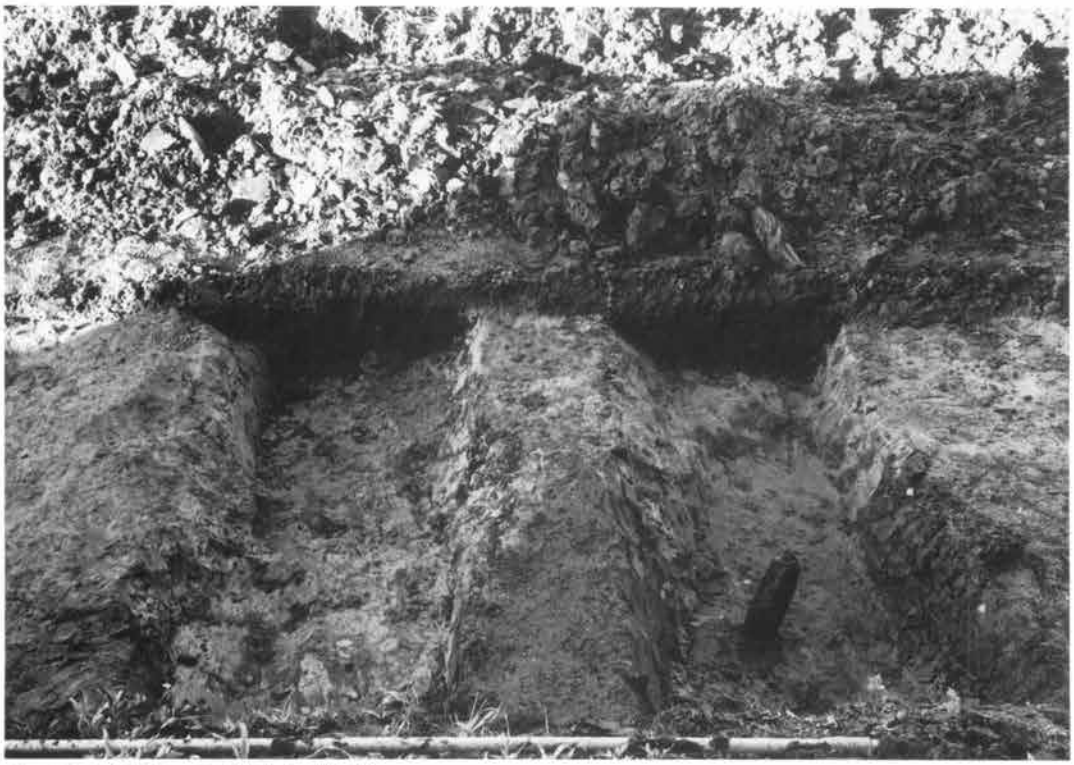
SD－B17～20，SK－B11，SX－B5～7（南(F－223付近)より撮影）

SD－B17～19，SX－B5(北(F－197付近)より撮影)

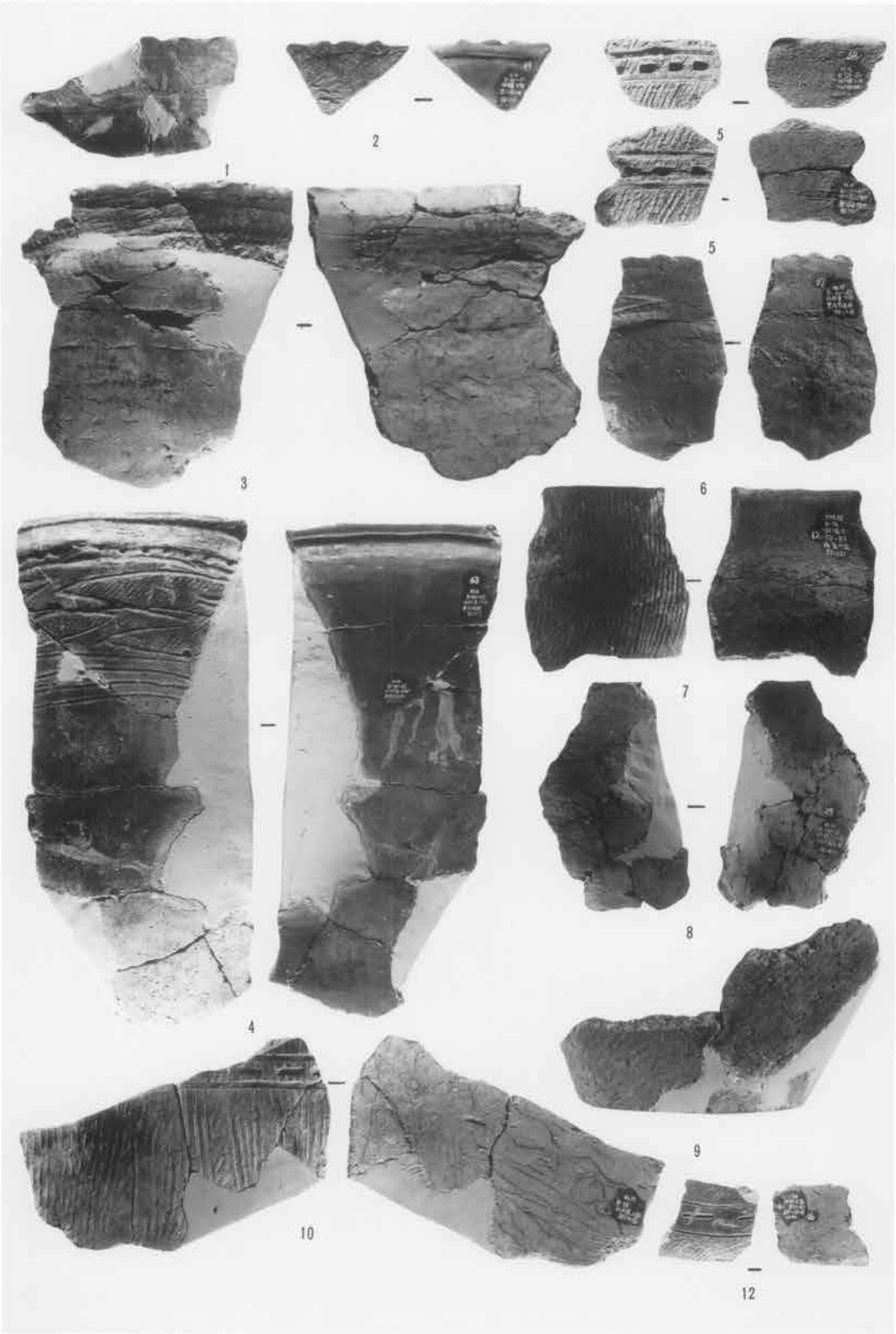
SD－B31（東(F－269付近)より撮影）

B－19G．PitB－4他　（北東(F－193付近)より撮影）

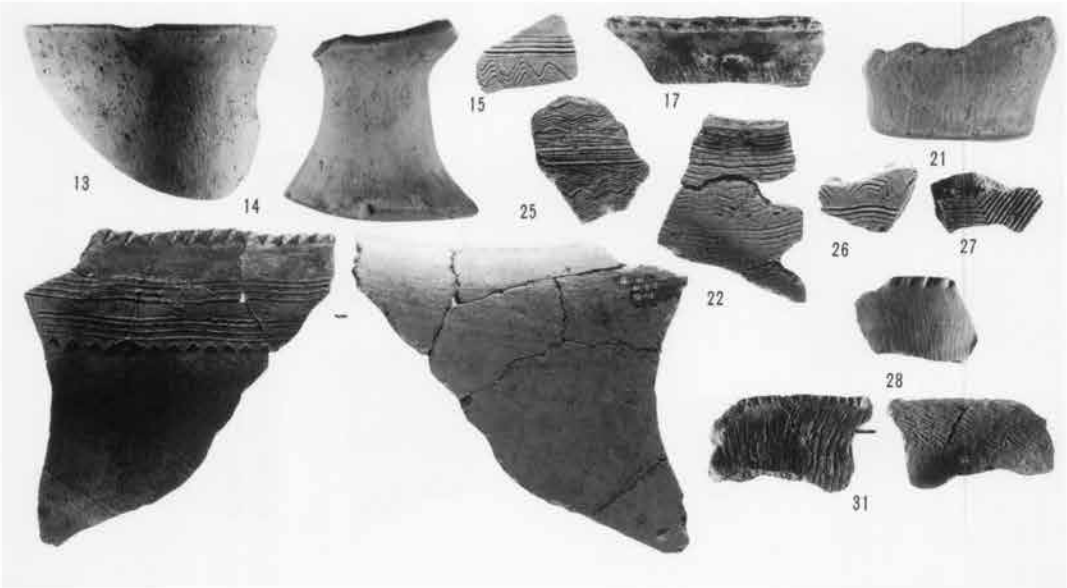
C調査区全景（東端(C－0付近)より撮影）



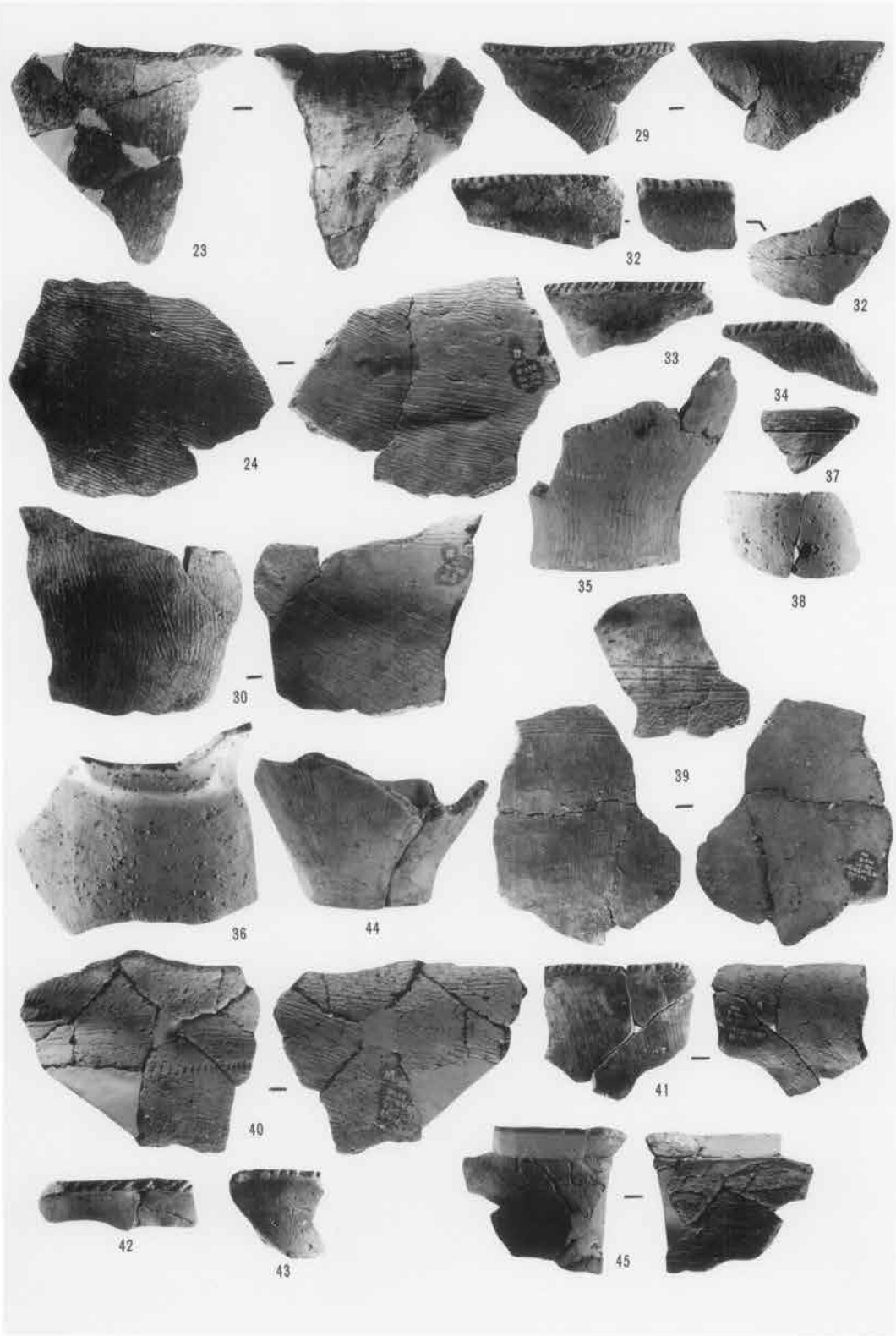
SD－C1・2（南(C－52付近)より撮影）



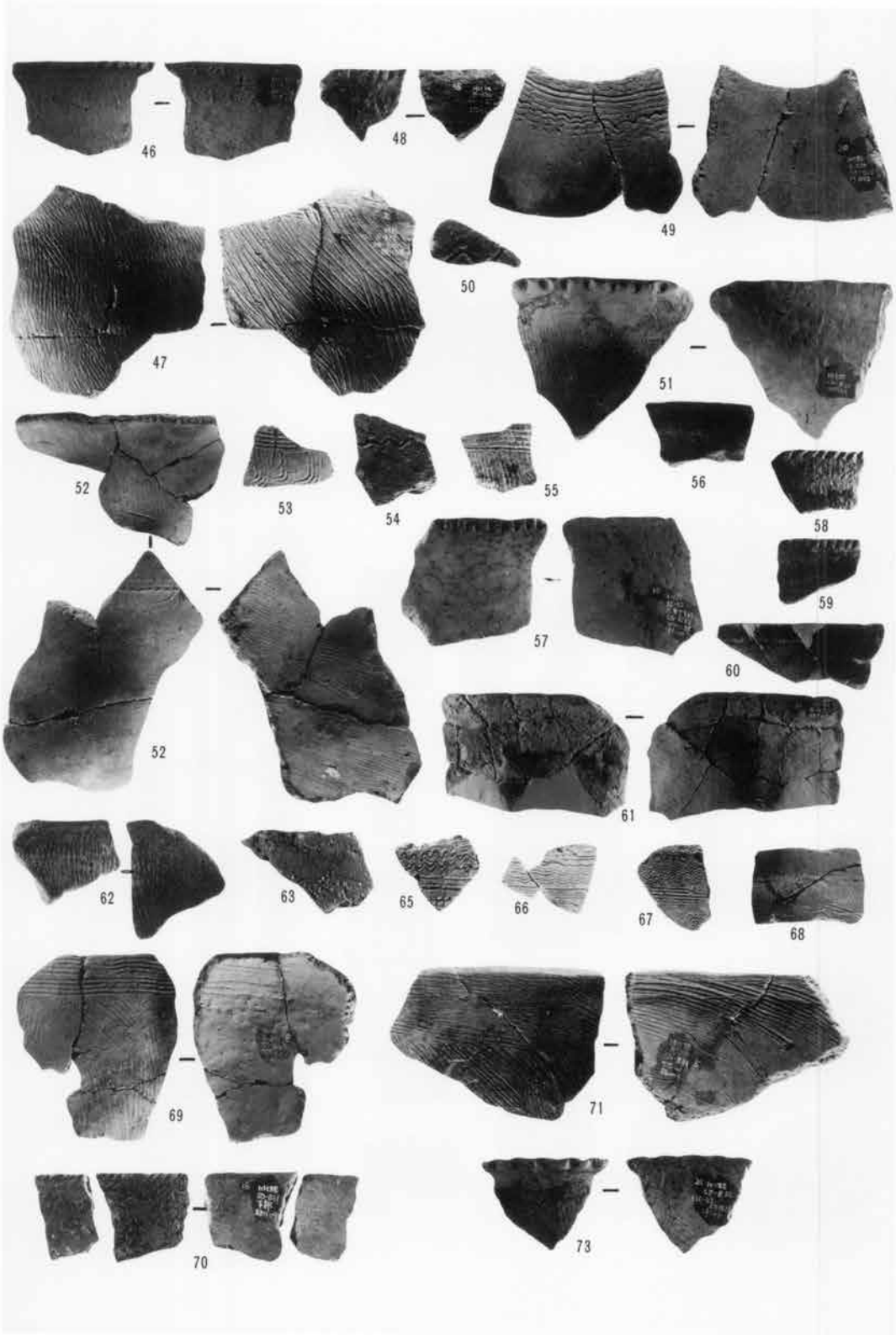
B調査区出土遺物(1)



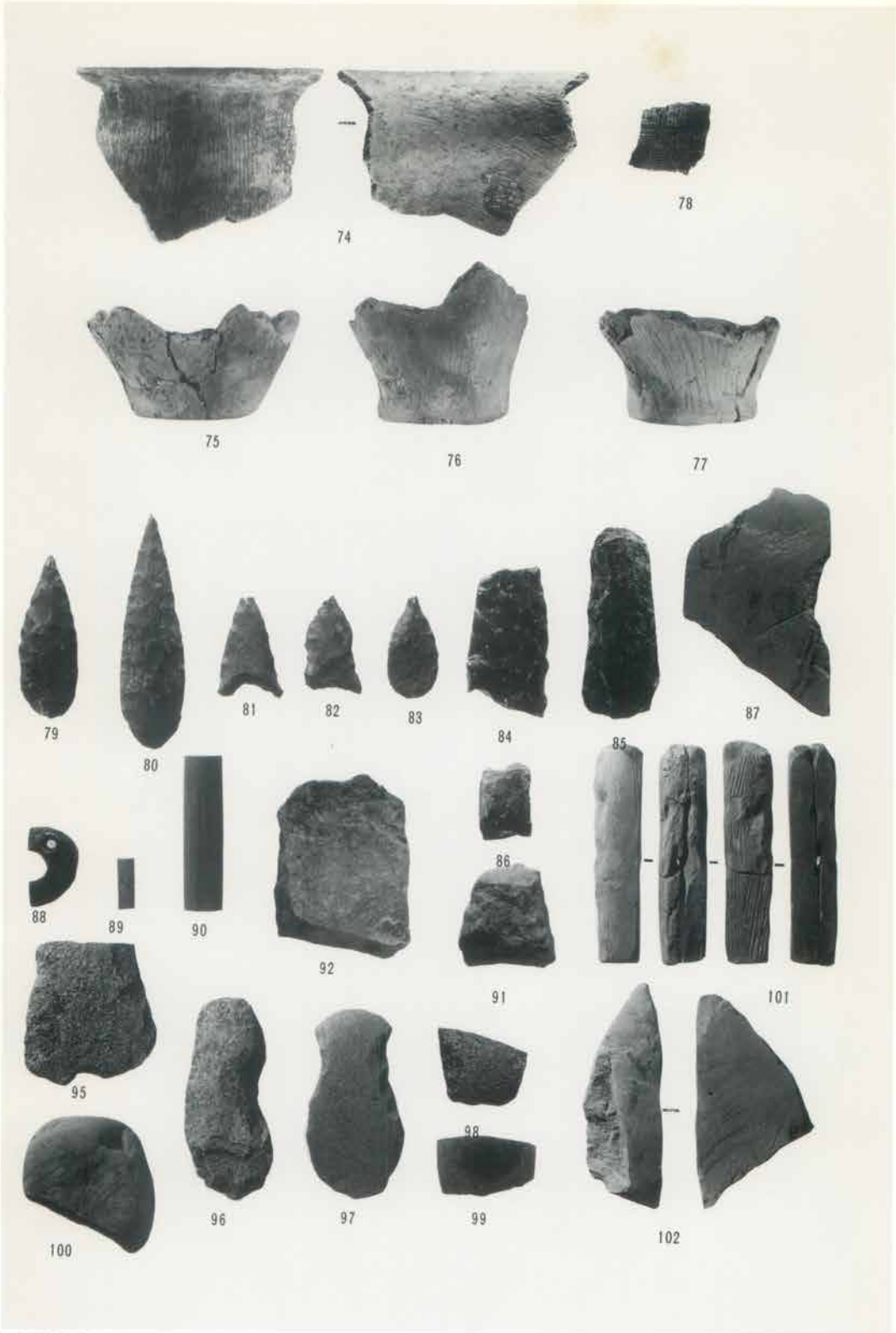
B調査区出土遺物(2)



B 調査区出土遺物(3)


46
48
49
47
50
51
52
53
54
55
56
58
59
57
60
52
61
62
63
65
66
67
68
69
71
70
73

B 調査区出土遺物(4)


74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
95
96
97
98
99
100
101
102

A，B各調査区出土遺物

八田中遺跡群

県営圃場整備事業旭第2地区関係
埋蔵文化財発掘調査報告書3

発行日　1990（平成2）年3月31日

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印刷　ヨシダ印刷株式会社
〒921　金沢市御影町19番1号